

厚生労働省

共生社会等に関する基本理念等普及啓発事業

令和4年度 実績報告書

公益財団法人 糸賀一雄記念財団

目次

I 事業の概要	1
II 実行委員会での検討	4
III 研修カリキュラム・テキストについて	7
IV 「共生社会フォーラム」等の開催状況	16
1. 「共生社会フォーラム」の内容	16
2. 「共生社会フォーラム」「全体フォーラム」の開催日程	17
3. 「共生社会フォーラム」の開催状況	18
(1) 共生社会フォーラム in 静岡	18
(2) 共生社会フォーラム in 滋賀・全体フォーラム 2022	27
(3) 共生社会フォーラム in 広島	46
(4) 共生社会フォーラム in 福島	55
(5) 共生社会フォーラム in 佐賀	64
5. 参加状況およびアンケート結果	73
V 事業の成果と課題	77
VI 今後の事業のあり方について	82
参考資料 1 メンター・助言者・全体進行者 参加状況	84
参考資料 2 受講後アンケート集計結果	85
参考資料 3 受講後のアクションに関するアンケート一覧表	88

別添資料 1 研修テキスト（ブックレット「ほほえむちから」抜粋版）

別添資料 2 テキスト資料（糸賀語録等）

別添資料 3 ワークシート（中堅用）

別添資料 4 ワークシート（学生・新任者用）

別添資料 5 グループワークの進め方（GWシナリオ）

別添資料 6 新型コロナウイルス感染予防マニュアル&チェックシート

I 事業の概要

1. 事業の目的

本事業は、平成 28 年（2016 年）7 月 26 日に神奈川県「津久井やまゆり園」で発生した事件を踏まえ、厚生労働省において、障害者基本法および障害者総合支援法の共通の目的である「全ての国民が、障害の有無によって分け隔てられることなく、相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会を実現する」ため、「全ての国民が、障害の有無にかかわらず、等しく基本的人権を享有するかけがえない個人として尊重されるものであるとの理念」等について、普及啓発を図ることにより、福祉サービスの質の向上を図ることを目的に実施したものである。

具体的には、研修を通じて障害福祉事業従事者、事業経営者等が共生社会の理念等を改めて学び、それを実践につなげていくことをねらいとして事業を実施した。

2. 実施主体

国（公益財団法人糸賀一雄記念財団が受託）

3. 事業の検討・運営体制

国が設置した実行委員会の事務局を当財団が担い、実行委員により研修カリキュラム、研修資料、受講要件の検討および普及啓発フォーラムに関する検討等が行われた。

また、ワーキンググループ（以下、「WG」という。）を財団内部に設置し、研修カリキュラムの詳細な内容の検討を行った。なお、各フォーラムにおける研修のメンターや助言者は、WGメンバーが、その役割を担った。

さらに、各ブロックにおいて、施設・事業所を運営する社会福祉法人等による開催委員会を組織し、地域主体のフォーラムを開催した。

■ 共生社会等に関する基本理念等普及啓発事業実行委員会

（五十音順・敬称略）

氏 名	所属・役職等(令和 5 年 2 月 10 日時点)
阿部 一彦	社会福祉法人 日本身体障害者団体連合会 会長
磯 彰格	全国社会福祉法人 経営者協議会 会長
大塚 晃	上智大学総合人間科学部社会福祉学科 特任教授
岡田 久実子	公益社団法人 全国精神保健福祉会連合会(みんなねっと) 理事長
金井 正人	社会福祉法人 全国社会福祉協議会 常務理事
久保 厚子	一般社団法人 全国手をつなぐ育成会連合会 会長
水流 純大	公益財団法人 日本知的障害者福祉協会 評議員
名里 晴美	社会福祉法人 訪問の家 理事長
若林 和彦	相模原市役所健康福祉局地域包括ケア推進部 部長
矢田貝 泰之(座長)	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部企画課 課長

■共生社会等に関する基本理念等普及啓発事業ワーキンググループ（WG）

【全体企画】

（五十音順・敬称略）

氏 名	所属・役職等(令和３年７月８日時点)
岡部 浩之	社会福祉法人 清心会 法人本部 副理事長
片岡 保憲	NPO法人 脳損傷友の会高知青い空 理事長
近藤 紀章	NPO法人 とんがるちから研究所 代表理事
竹岡 寛文	NPO法人 とんがるちから研究所 研究員
田中 正博(リーダー)	一般社団法人 全国手をつなぐ育成会連合会 専務理事
玉木 幸則	一般社団法人 兵庫県相談支援ネットワーク 代表理事
水流 源彦	社会福祉法人 ゆうかり 理事長
丹羽 彩文	社会福祉法人 昂 理事長
福島 龍三郎	社会福祉法人 はる 理事長
御代田 太一	社会福祉法人 グロー法人事務局 芸術文化部
渡部 恵子	NPO法人 あかり広場 代表理事

【フォーラム開催】

（五十音順・敬称略）

氏 名	所属・役職等(令和３年７月８日時点)
大平 眞太郎	社会福祉法人 グロー 法人事務局 芸術文化部長
奥村 昭	社会福祉法人 六心会 法人本部 地域支援担当
川西 大吾	社会福祉法人 旭川荘 (株) トモニー 事業部長
斎藤 誠一	社会福祉法人 グロー ひのたに園 園長
下里 晴朗	社会福祉法人 ほっと未来S O U Z O U 舎 理事長

4. 活動内容

開催日	内 容
令和４年(2022年)５月１７日	滋賀県内WG会議
令和４年(2022年)５月２０日	厚生労働省企画課・糸賀財団事務局打ち合わせ
令和４年(2022年)６月１４日	共生社会フォーラム in 広島 現地事務局打ち合わせ
令和４年(2022年)６月２３日	共生社会フォーラム in 福島 財団事務局打ち合わせ
令和４年(2022年)７月２日	共生社会フォーラム in 佐賀 現地事務局打ち合わせ
令和４年(2022年)７月４日	全体フォーラム シンポジスト調整
令和４年(2022年)７月５日	第１回実行委員会（集合およびZoom参加方式） 事業の全体像、研修カリキュラム、受講者要件、研修資料、年間スケジュール等の検討
令和４年(2022年)７月５日	第１回全国WG会議 研修プログラムの改良検討 メンター・助言者・全体進行役の配置調整

令和4年(2022年)7月5日	共生社会フォーラム in 静岡 事務局打ち合わせ 地元メンターの協力について
令和4年(2022年)9月13日	事前研修会(滋賀県大津市)集合およびZoom参加 広島フォーラム・佐賀フォーラムの地元メンターも参加
令和4年(2022年)9月29日 ・30日	共生社会フォーラム in 静岡(静岡県静岡市)
令和4年(2022年)11月22日 ・23日	共生社会フォーラム in 滋賀・全体フォーラム(滋賀県彦根市)
令和4年(2022年)12月5日 ・6日	共生社会フォーラム in 広島(広島県広島市)
令和4年(2022年)12月19日 ・20日	共生社会フォーラム in 福島(福島県郡山市)
令和5年(2023年)1月27日 ・28日	共生社会フォーラム in 佐賀(佐賀県佐賀市)
令和5年(2023年)3月	第2回実行委員会 事業の成果と課題について

Ⅱ 実行委員会での検討

1. 第1回実行委員会

開催日：令和4年7月5日（WEB 併用会議）

場 所：A P 東京八重洲 10 階 X ルーム

概要：

本事業の開催の意義、これまで実施した事業の成果および課題を確認したうえで、今年度（令和4年度）の事業実施計画を協議し、全体プログラム、テキスト、グループワーク研修、募集方法、実施地域、年間スケジュール等を決定した。

<本事業の開催の意義>

本事業の契機となったやまゆり園事件の裁判が終結するなかで、新型コロナウイルスの感染拡大に直面し、国民一人ひとりが他者との向き合い方や社会のあり様を改めて問い直し、考える時代を迎えた。貧困の問題が身近となり、社会のなかの分断が加速しかねない今だからこそ、共生社会等に関する基本理念等の普及啓発を継続的・拡大的に実施する必要がある。

<事業の経緯・内容と昨年度の主な変更点>

- ・人の尊厳の輝きを認め合い、共に生きる社会の実現を推進することを事業目的とし、各地域で開催する共生社会フォーラムを事業の核とする。
- ・昨年度のコロナ禍の影響による主な変更点
 - ① 1月開催予定の静岡と広島が中止となり、4会場での開催となった。
 - ② 密を避けるために全体的に参加人数の縮小を図り、募集定員を84人にした。（従来：平均約130人）とした。
 - ③ 全体フォーラム（滋賀フォーラム）について、令和2年度はシンポジストも参加者も全てオンラインによる参加であったのが、実際の参加者も得ての開催とした。
 - ④ 令和2年度の10月に開催した4会場では、2日間のプログラムを1日に短縮して実施したが、参加者の負担が重くなるため1日プログラムの開催は行わないこととした。

<成果と課題>

(1) 実施体制

- ・地域主体の開催を推進するために各地域で開催委員会の組織化を図った。
- ・開催2か年目から福祉関係団体、社会福祉協議会、自治体等による開催委員会を組織し、昨年度は、メンター等が中心となる実践型の構成となった。
- ・共生社会の基本理念の普及には、今後とも推進母体と地元協力法人が不可欠である。

(2) 普及啓発の担い手育成

- ・受講者対象に、決意を行動に移すサポートとして事後アンケートを実施した。
- ・受講者からメンターへ、さらには全体進行役へステップアップする者を育成した。
- ・運営サイドに開催する地元で力量のある新規協力者を引き入れることもできた。

- ・新規協力者向けに事前研修を企画したが、コロナ禍で集まった人は限定的であった。
- (3) 受講後のフォロー
- ・多忙な日常業務に埋没して継続が難しい等、アクションを起こしにくい環境がある。
 - ・実践の決意を思い起こし、モチベーションを維持するため、交流会を開催した。
 - ・各地域での実践例を学び、各人が職場や地域で展開する方策を考える機会を提供する必要がある。
 - ・今後のアフターフォローにおいて、リアル参加とオンライン参加とを組み合わせる等の工夫が必要である。

＜今年度の事業実施計画＞

(1) 全体スケジュール

- ・9月から1月にかけて5会場で共生社会フォーラムを開催する。
- ・「良いアクセス」「適切な規模とコスト」「2日連続の使用可能」を会場の条件とする。
- ・全体フォーラムを地域でのフォーラム開催日程に合わせて、滋賀大学キャンパスで開催する。

(2) 研修カリキュラム

- ・一般参加者・研修参加者共通の1日プログラム（「表現活動の視聴」「基調講演の受講」「映像の視聴」）と研修参加者向けの「グループワーク研修」（2日間）とする。
- ・「中堅職員グループ」は、4・5人で1グループとし、1名ずつメンターを配置する。
- ・複数の助言者が巡回し、各グループをサポートし、全体進行役が研修目的の確認、時間管理等を行う。
- ・メンターは、経験者以外に、新たな地元のメンバーも加わることで育成を図る。
- ・「学生・新任者グループ」は、対話型のグループセッションとする。
- ・進行は、身体にハンディのある障害当事者と受講者と同年配の現役スタッフ等とし、「生きている意味とは？」「障害とはそもそも何？」「福祉の仕事とは？」といった根源的な問いについて、受講者が日々感じているが、うまく言葉にできない微妙な感覚や思いを言語化し、参加者で共有する。

(3) 研修受講対象者

- ・福祉施設・事業所の中堅職員
- ・学生および福祉職新任者
- ・多分野の関係者（行政職員、経済界の関係者含む）

(4) 研修テキストおよびテキスト資料

- ・研修テキストは、ブックレット「ほほえむちから」抜粋版とする。
- ・テキスト資料は、研修テキストで例示された思想や言葉の詳細、やまゆり園事件後に福祉団体が出した声明文に対する意見、判決文、事件を取材・報道した神奈川新聞社の記者による座談会記録を掲載したものとする。

(5) 全体フォーラム

- ・各地で開催したフォーラムの総括を行い、社会一般に広く広報を行うことを目的として開催する。
- ・プログラムは、「表現活動」「映像」および「シンポジウム」とし、併せて各ブロック

で開催した研修の受講者やメンターを対象とした「実践報告・交流会」とする。

- ・新型コロナウイルス感染拡大防止や参加負担軽減の観点から、オンラインによる参加が出来るよう、Zoom の活用や YouTube での配信を実施する。

(6) コロナ対策

- ・ 3 密回避のため、参加者数をホール定員の 2 分の 1 以下とする。
- ・ 換気を 30 分に 1 回を原則とし、更にこまめな換気を徹底する。
- ・ グループワークの人数を減らして隣りの人との間隔を空けることとする。
- ・ マスクの着用や使用器具のアルコール消毒の実施、研修参加者への検温や健康観察票の提出依頼など、対策の徹底を図る。
- ・ 感染状況に応じて開催方法を検討する。

<委員からの質疑・提案内容>

- (1) 学生・新任者研修に関して、学生についてはどういう形で募集しているのか。また、受講前と受講後の意識や障害福祉に関する関心の持ち方がどのように変わっているのかという質問があり、事務局からゼミの先生方をお願いしたり、すでに次年度福祉関係のところに採用が決まっている方に参加を呼びかけているが、基本的に平日開催のため学生の参加は難しい状況にあることや、参加した学生からは、学校では教わらないことが身近に感じて、福祉や障害のことについて考える機会になって良かったと言っている方が多いことなどを説明する。
- (2) 委員から、この研修においてはメンターが非常に重要であることから、メンターとしての基準などを設けてはどうか。それができなければメンター像を想定して、これをクリアした方をメンターとして認めていくとかの仕組みが必要ではないかという提案があった。
- (3) 委員から、様々な障害のある人が検討段階でのワーキンググループや、実施におけるメンター、サポーターなどに参加し、多様な障害に対応した研修システムになることの配慮が必要であるとの提案があった。
- (4) 委員から、教育関係者の参加が非常に少ないので、教育関係者がひとりでも多く参加できるよう門戸を広げて開催してほしいとの提案があった。
- (5) 委員から、定量的な評価は難しいと思うが、研修後、地域や施設においてこういう研修をして、このような認識の変化がみられたということを、定期的に追っていくことが重要であるとの提案があった。
- (6) 委員から、行政の参加者が少ないが、フォーラムに参加することに若干負担感がある。全体フォーラムは YouTube での配信や、Zoom 参加について実施いただいているが、各自治体において、例えば各自治体において YouTube で基調講演などを聞き、その内容をもとにグループ討議などを実施するということができたら面白いと思うとの意見があった。

Ⅲ 研修カリキュラム・テキストについて

1 研修カリキュラムの作成経緯

初年度（平成 30 年度）のWGおよび実行委員会において、研修カリキュラムの作成にあたり、共生社会の理念を普及する「語り部養成」という事務局提案を基に、「語り部」の役割や対象者の設定について議論された。その中で、本事業の目的に照らし、障害福祉を中心とした福祉施設や事業所の職員を主たる対象とすることが重要であるとの方向性が示されたことを受け、「福祉支援語り部」（※）の養成を核としたカリキュラムが作成された。また、若い世代を対象とした研修も重要であるとの意見を踏まえ、「学生・新任者グループ」という枠組みも設けられた。

開催二年目（令和元年度）および一昨年度（令和 2 年度）のWG・実行委員会において、初年度（平成 30 年度）の研修プログラムを評価・検討した結果、大きな枠組みは変更せず継続して実施することとなり、昨年度（令和 3 年度）および今年度（令和 4 年度）もマイナーチェンジはあるものの、大きな変更は行われなかった。

※ 当初の事務局案では、「施設内語り部」であったが、実行委員会で対象者を正確に表しておらず、「障害者支援語り部」という提案もあった。その後の検討で、障害以外の生活困窮等も含む意味合いで「福祉支援語り部」となった。

2 研修カリキュラムの骨子

(1) 福祉支援語り部グループ

研修を通じて障害福祉事業従事者、事業経営者等が改めて学び、それを実践につなげていくことをねらいとする研修カリキュラムを作成した。

① 表現活動の視聴

障害者の舞台表現等の視聴を通じて、直感的に障害や障害者理解を深める。

② 基調講演の受講

基調講演を通じて、やまゆり園事件の受け止め方、いのちの意味、先人の福祉の思想等を学び、共生社会を考えるうえでの示唆を受ける。

③ 映像の視聴

「NHKスペシャル『ラストメッセージ』この子らを世の光に」の映像（約 60 分）と同番組制作者の想いを聴くことにより、先人の活動等今につながる福祉の原点を学ぶ。

④ グループワーク研修（2 日間）

1 日目の午後は、上記①から③で学んだ共生社会の根幹にある普遍的価値を共有し、2 日目の午前は、やまゆり園事件に対する多様な考えに関する語りかけ・問いかけを学び、2 日目の午後は、受講者が従事する現場や地域に働きかけるアクションプランを作成する。

(2) 学生・新任者グループ

福祉支援語り部グループで使用するようなワークシート等は当初作成せず、「生きている意味とは?」「障害とはそもそも何?」「福祉の仕事とは?」といった根源的な問いについて、時間をかけてフリーディスカッションし、日々感じているがなかなか言葉にできていない微妙な感覚や想いを言葉にしていく内容とした。

開催二年目（令和元年度）の途中からは、学生・新任者グループ向けのワークシートを作成し、より円滑なグループワークが進行できるようになり、昨年度（令和3年度）および今年度（令和4年度）も踏襲した。

3 研修テキストおよびテキスト資料

研修テキストは、財団が発行したブックレット「ほほえむちから」を本研修用に抜粋した冊子を基本とし、テキスト資料は、糸賀語録（糸賀一雄氏の思想を表す言葉。収録数は50篇）、やまゆり園事件後に全国手をつなぐ育成会連合会（全育連）が出した声明文への意見、相模原障害者施設殺傷事件判決文要旨、神奈川新聞取材班記者座談会記録および日本赤十字社新型コロナウイルス啓発パンフレットを内容とする冊子とした。

「ほほえむちから」抜粋版は、糸賀一雄氏をはじめとする先人の実践から編み出された思想に触れ、現代につながる福祉の原点が学べるテキストとして今年度（令和4年度）の実行委員会においても採択され、一般参加者と研修参加者に配布することとした。

（研修テキスト（ブックレット「ほほえむちから」抜粋版）：別添資料1）

（テキスト資料（糸賀語録等）：別添資料2）

4 ワークシートおよびシナリオ

福祉支援語り部グループの受講者が見通しを持って研修に臨むことができるとともに、メンターがグループワークと個人ワークを円滑に支援できるよう、初年度（平成30年度）の実行委員会とWGで検討したワークシートを元に、これまで開催の都度、ミーティングを行い改良した。このワークシートは、NPO法人全国地域生活支援ネットワーク代表理事の大原祐介氏が北海道で開発したワークシートがモデルとなっている。

シートは、①受講者に配布され書き込みするワークシート、②メンター用の進行に必要な時間管理や記録管理のポイント、受講者の思考や発言の引き出し方、前回までのシートの作成例等を掲載したガイドブック的なシート、③研修参加者へのオリエンテーション内容やカリキュラム、個人ワーク・グループディスカッション・全体共有という流れ、全体のまとめで振り返りを視覚化するスライド、という三種類を作成した。

ワークシートを用いて実際にグループワークを進行するときの説明口述を③のスライドに追記したものがグループワークの進行シナリオである。

5 ワークシートの内容（ワークシート（中堅用）：別添資料3、グループワークの進め方（GWシナリオ）：別添資料5）

【本研修の目的】

「誰もが等しく基本的人権を享有するかけがえのない個人として尊重されるもので

あるという理念等について学び、自らの実践につなげ、さらには所属や地域社会に向けて普及啓発していく人材」の養成研修であることを明記。

【本研修に関わるスタッフ】

メンター、アドバイザー、進行役、事務局の役割を紹介。

【研修プログラム概要】

2日間の三つのセッションごとの到達目標と研修内容を明記。

※ 各セッションのポイント

セッション1：二元論の思考・発想ではなく”どちらでもない”という第三軸、
”答えはでない”という考え方。

セッション2：自分の内面（感情・思考）と向き合う、もやもやとの対話「わからない」「もやもや」の言語化、「問いかけ」「語りかけ」による対話。

セッション3：実際に、語りの場を考える。

【ワークシートの使い方】

研修の目的やワークシートの役割（他人に伝えるための整理）、事前準備の重要性を明確化する。

【シート1：事前準備シート】

自己紹介のためのシートで、名前・職種・福祉業界での経験年数・参加動機・研修参加理由・研修にあたっての不安の記入と事前に配布しているテキスト資料を読んで抜き書きし、事件当時の感想や周囲の反応等を記入する。予めテキストと一緒に配布し、当日受付で回収。グループ分けと担当のメンターによる参加者把握に使用する。

【シート2～4：鑑賞中・聴講中メモ】

表現活動、基調講演および映像のプログラムについて、それぞれ鑑賞・聴講する中で印象に残ったことや学びや気づきをメモし、次のワークで使用する。

【研修中のルール】

- ① ワークシートで考えを整理し（個人作業）、グループ内で共有（各自の発言は1分）、その後にディスカッションという流れ（限られた時間を有効に）。
- ② 正解のない問題に向き合うために、メンバーと一緒にさまざまな問いからあぶりだす・自分の意見を伝える・積極的にディスカッションに参加する。
- ③ 一緒に考えるメンバーに、尊重の念を表す（否定をしない＝賛同・認める）。

【シート5：ワークA】

一般プログラムのふりかえり

個人ワークにより、表現活動、基調講演および映像から得た学び・気づき、自己の内面にある納得できないこと、理想と現実とのギャップ、いまさら聞きづらいこと等を記入。グループワークで他者の視点・新たな気づきや疑問・違和感を記入する。

※ディスカッションでは、模造紙、ふせん、マーカーを用意し、整理用・発表用にする。

【シート6：ワークA】

疑問・違和感を整理し、共生社会について「そう呼べる状況・わからない どちらともいえない状況・そう呼べない状況」の3分類にまとめる。

※ふせんに書かれた内容をもとに、関連する意見を付け加えたり、取り下げたり、状

況を入れ替える等して意見交換する。

※それぞれグループディスカッションが終わった後、メンターが発表者となり、各グループ3分間で全体に共有する。その後、基調講演の講演者やアドバイザーが講評を行う。

【シート7：ワークA】

「ふりかえりシート」に各グループの報告等から得られた学びや気づき、初日のふりかえりと翌日にむけての注意点等を記載する。

【シート8：ワークB-1】

やまゆり園の事件を聞いた当時、自身や他のメンバーは、どのように感じたか、テキスト資料に掲載した育成会に寄せられた意見の中のどの意見に対してどんな感情を持ったか、その感情の源泉は何か（なぜそういった感情が生まれてきたのか）自分の内面と向き合う。また、メンバーとの共有で自分の感情と源泉を再整理する。

【シート9-1～3：ワークB-2】

「語りかけ」のシーンをイメージし、実際に取り組んでみる。語りかけ練習シートを3種類用意し、「なぜ答えに窮したと思うのか」「どのように語りかけるのか」を考える。

語りかけ練習シート その①		シート No. 9-1
以下の「問いかけ」に対して「語りかけ」を練習しましょう。		
問いかけ	【誰から】後輩の福祉施設職員 【どんな状況で】相模原の事件の後でどうしても反りの合わない子（7才）がいてイライラしてしまう。植松のやったことは許されないが自分もたまに手が出そうになる時もある。私は施設を辞めるべきでしょうか。	

語りかけ練習シート その②		シート No. 9-2
以下の「問いかけ」に対して「語りかけ」を練習しましょう。		
問いかけ	【誰から】小学校低学年の自分の子ども 【どんな状況で】自分の働く施設に子どもを連れて行き、重度の障害がある利用者（ベッドで寝ていて話したりすることはできない）とその保護者にすれ違った時にこの子、死んでいるの？	

語りかけ練習シート その③		シート No. 9-3
以下の「問いかけ」に対して「語りかけ」を練習しましょう。		
問いかけ	【誰から】自殺念慮のある思春期女性（1人親貧困家庭育ち、薬物療法効果なし） PTSD、性虐待、人格障害、ミュンヒハウゼン、解離性障害、躁鬱... 【どんな状況で】精神状態が落ち着いている時 自分の命だし、自分で死ぬと決めているのに、周りの人から死んだらダメだと言われる。どうして死んだらダメなんですか？	

【シート10-1：ワークB-3】

やまゆり園事件を含む「共生社会のありかた」について、職場の職員、利用者、家族等から尋ねられると答えに窮してしまう「問いかけ」を考える。

【シート10-2：ワークB-4】

「共生社会のありかた」について、尋ねられると答えに窮してしまう「問いかけ」に

対して、グループのみんなで「語りかけ」を考える。

【シート 11：ワーク B】

ディスカッションを通じて得られた学びや気づき、問いかけ・語りかけで大事な
と、他グループの「問いかけ」と「語りかけ」から得られた学びと気づきを振り返る。

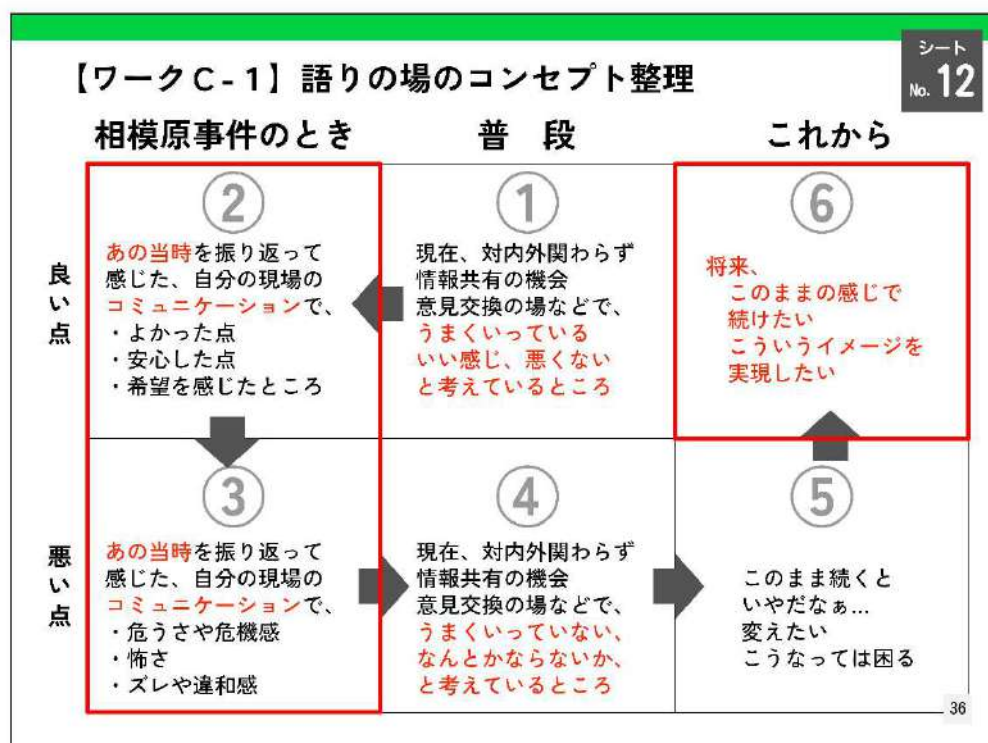
※今回のセッションでは、共生社会の根幹にある福祉の思想と普遍的な価値を理解
するために、二元論の思考ではなく、どちらともいえないという第三軸があるこ
と、答えの出ない問題に取り組むことを考えてきたことをアナウンスする。

※それぞれグループディスカッションが終わった後に、メンターが発表者となり、
各グループ 3 分間で全体に共有する。その後、基調講演の講演者やアドバイザー
が講評を行う。

【シート 12：ワーク C-1】

語り（対話）の場を設計するためにコンセプトを整理する。以下を書き出す。

1. 現在、対内外関わらず情報共有の機会、意見交換の場等でうまくいっている等と
感じる点
2. 事件当時を振り返り、自身の現場のコミュニケーションでの良かった点、安心し
た点、希望を感じたところ
3. 事件当時を振り返り、自身の現場のコミュニケーションでの危うさや危機感、怖
さ、ストレスや違和感
4. 現在、対内外関わらず情報共有の機会、意見交換の場等でうまくいっていない、
なんとかならないか、と考えているところ
5. このまま続くといやだなあ、変えたい、こうなっては困ると思うことを書き出す。
6. 将来、このままの感じで続けたい、こういうイメージを実現したいと思うこと



【シート 13-1：ワーク C-2】

語りの対象者、対象の特徴、対象者の現在の状況（課題）、対象者の目指すべき方向（語りに期待する効果）、組織内部の協力者等、組織外部の支えてくれる人等を整理し、どのような場を作るか、現場をイメージしてアクションプランを作成する。

【ワーク C-2】 アクションプラン：語りの対象		シート No. 13-1
〈対象者：語りを伝えたい相手〉	〈対象の特徴〉 ex. 興味のない話はほとんど聞かない、話の一部を聞いて全部わかった気になる、他人の話を聞き流すなど...	
〈対象者の現在の状況（課題）〉	〈対象者の目指すべき方向（語りに期待する効果）〉	
〈組織内部の協力者や対象者を支えてくれる人〉	〈組織外部の協力者や対象者を支えてくれる人〉	

【シート 13-2：ワーク C-2】

語りのシチュエーションの呼び名、実施する頻度・期間・人数・場所、具体的な方法（プログラム・内容）、語りの際に留意すべきポイントを整理する。

伝える時の姿勢は何か？
その原動力や理由
主観性を持つ（客観性へ）

【ワーク C-2】 アクションプラン：シチュエーション		シート No. 13-2
〈語りのシチュエーションの呼び名〉 「ひびき参観日」	〈実施する頻度・期間・人数・場所〉 ・年に2回 ・1日2つの時間帯でもフリー参観（見学） ・地区の人 ・法人の事業所	
〈具体的な方法（プログラム・内容）〉 可能であれば、タイムテーブルを組んでみよう！ ① 回覧板で地区に案内を出す。 当日 11時の情報提供をする。 ② 11:00～15:00まで自由に参観 ※案内職員を配置し、来てくださった方に事業所内を案内。 ※体験型にして、お礼の方と一緒に作業してもらって、作ったものを持ち帰り、頂く。 ・ジュニアの袋詰め、カンパウ作成	〈語りの際に留意すべきポイント〉 上の〈対象の特徴〉もふまえて ・強制しない。 ・逆に法人にしてほしい事としてみる。 ・一対一でいいのに事業所やここを利用している方の説明をする。 ・一人では来にくいから、何人で来てもOKだとする。	

【シート 14：ワーク C】

「ふりかえりシート」に研修の総括、決意表明等を記載する。

6 ワークシートの内容（ワークシート(学生・新任者用)：別添資料4)

【本研修の目的】

「誰もが等しく基本的人権を享有するかけがえのない個人として尊重されるものである」という理念等について学び、自らの実践につなげ、さらには所属や地域社会に向けて普及啓発していく人材」の養成研修であることを明記。

【プログラム①】

初日のプログラムと内容について、概要およびシート番号について、【表現活動】【基調講演】【映像&トーク】ごとに整理している。

【ワークシートの使い方】

①事前準備の重要性

研修では、各自の体験や現場でのできごとをふまえて、議論を進める。テキストをあらかじめ読むとともに、事前準備シートに記入する。

②考えや思いを言葉にする

普段、それぞれが向き合っている「福祉」を捉えなおすためにもまずは言葉にすることが重要。

③他人に伝えるための共有

「こんなこと言っても大丈夫かな？」という意見や疑問も、思い切って共有する。一緒に考えていくのが大事。

【シート1：事前準備シート】

自己紹介のためのシートで、表面に、名前・所属（大学・学部・学科）・学年・経験年数（新任者）、参加動機の記入、「福祉」のイメージ、「共生」や「共生社会」のイメージ、最近気になった福祉的ニュース、相模原の事件について知っていること・感じたことを記入する。

【シート2～4：鑑賞中・聴講中メモ】

1 日目の午前の表現活動および基調講演と午後の映像&トークのプログラムについて、それぞれ鑑賞・聴講する中で気づいたことをメモし、次のワークで使用する。

【シート5：ディスカッション】

個人ワークにより、一般プログラム（シンポジウム、表現活動および映像&トーク）から得た学び・気づきや、疑問・違和感で今ひとつ納得できないこと、理想と現実とのギャップ、今さら聞きづらいこと等を記入。グループワークで他者の視点・新たな気づきや疑問・違和感を記入する。

【シート6：聞き取りシート】

個人ワークにより、先輩方の話や久保さん（全育連会長）の話を聞いて感じたこと

等を記入する。

【シート7：ふりかえりシート】

ディスカッションを通じて得られた学び、気づき、さらに、翌日にむけて、研修を受ける前との変化、研修で得られた学び・気づき、翌日の注意点を確認しながら記入する。メンターのコメントを交えながら、個人の思いや考えを表明すると共に、シートに記入しながら、自分の考えを整理する。

【シート8：語りかけ練習シート】

例題の「問いかけ」に対して「語りかけ」を練習する。なぜ答えに窮した（困惑して、答えることができなくなる。）と思うのか、どのように語りかけるのか、を記入する。

【DAY 1→2 宿題】語りかけ練習シート		シート No. 8
以下の「問いかけ」に対して「語りかけ」を練習しましょう。		
問 い か け	【誰から】 祖母あるいは祖父	
	【どんな状況で】 知的障害者施設に就職したことを報告したとき 障害者の面倒なんて、家族が見るものでしょ。そんなことに税金を使って、 そのお金をもらう仕事なんて、仕事と言えるの？	

【シート9：ディスカッション①“相模原障害者殺傷事件”について考える】

神奈川新聞の記事（誇り「26人救った」相模原殺傷 奮闘した救急隊員）、総務省消防庁の資料（神奈川県相模原市において発生した集団救急事案）、救急搬送関係資料を提供し、メンターのレクチャーを踏まえ、事件について考える。

【シート10：ディスカッション②“命の選別”について考える】

命の選別に関するメンターのレクチャーを踏まえ、理解できたことや自分の認識を発表し、他人の意見を共有し、全ての命に“価値”があることについての理解を深める。

【シート11：ディスカッション②“福祉”について考える】

福祉の語源、糸賀氏著「福祉の思想」、福祉的ニュース等に関するメンターのレクチャーを踏まえ、理解できたことや自分の認識を発表し、他人の意見を共有し、全ての命に“価値”があることについての理解を深める。

【シート12：ディスカッション③“共生社会”の“障害”について考える】

国連の障害者権利条約の対日審査・勧告などに関するメンターのレクチャーを踏まえ、共生社会をめざすうえでのあるべき社会について理解できたことや自分の認識を発表し、他人の意見を共有し、障害と福祉についての理解を深める。

【シート 13：ディスカッション④ “共生社会” の方向性について考える】

共生社会という漠然としたイメージを、メンターが議論の方向性を見極めながら進行を補助し、個々の意見を出し合うことにより、ある一定の共通理解を図っていく。

【シート 14：ディスカッション⑤ “福祉” で “働く” ことを考える】

福祉を仕事とすることについて、メンターが議論の方向性を見極めながら進行を補助し、個々の意見を出し合うことにより、ある一定の共通理解を図っていく。

【シート 15：ふりかえりシート】

個人ワークにより、ディスカッションを通じて得られた学び・気づき等を記入。さらに、研修の総括とこれからにむけての一言を記入する。

ディスカッション②【“命の選別” について考える】

シート No. 10

シート No. 10

言性もバツ死んでアヤン 命めえ限り (育ちがけ 生活がけ 家族 24歳まで...)

死ぬまで生きろ。やっさまで生きろ。 命を大切にしろ

自分やさんでイヤはよと相手もイヤ (大人いじめにつけてみる)

< 幸せに ほかの人の生活 >

みんな 幸せに ほかの人の 生きてる。

自分を好きになる → 自信をもち

「お母さん」 → 「しんじい」 「おやじ」 が 言う。

周りの人やさんでいふ → 相手を知らうとみる。

自分をいかに大切にしろ → 自分を大切にしろ。

お母さんやさん = 相手を大切にしろ。

自分を (お母さんやさん) 大切にしろ。

お母さんやさん = 相手を大切にしろ。

お母さんやさん = 相手を大切にしろ。

「お母さん」 と言う。

社会や 社会。

自己愛や 自己愛。

福祉 = 幸せ、幸福。

福祉 = 幸せ、幸福。

福祉 = 幸せ、幸福。

自分やさんでイヤはよと相手もイヤ (大人いじめにつけてみる)

子どもはこうな。 大人はこうな。

常になんか 幸せに 生きてる。

24

Ⅳ 「共生社会フォーラム」等の開催状況

1. 「共生社会フォーラム」の内容

■基本のプログラム

	内 容	対象者	所要 時間
一 日 目	表現活動 障害者による舞台表現等 支援者による活動に関する講演	一般参加者 研修参加者	60 分
	基調講演 共生社会の実現に向けて先駆的に取り組みを推進する実践者の講演		60 分
	映像 NHKスペシャル「ラストメッセージ この子らを世の光に」の視聴		60 分
	グループワーク研修① 内面に向き合うワークと語り合い	研修参加者	115 分
	i) 聴講プログラム・共生社会について考える	・福祉支援語り部グループ	
	ii) 福祉、障害、生きづらさ等についての語り合い	・学生・新任者グループ	
	グループワーク研修② 多様な意見と向き合う	研修参加者	35 分
	i) やまゆり園事件についてふりかえる	・福祉支援語り部グループ	
二 日 目	グループワーク研修②	研修参加者	240 分
	i) やまゆり園事件に関してテキストを活用したグループワーク：・感情の源泉の整理・「語りかけ」の方法・「問いかけ」を考える・「問いかけ」による言語化・ディスカッション等	・福祉支援語り部グループ	
	ii) 福祉、障害、生きづらさ等についての語り合い	・学生・新任者グループ	
	グループワーク研修③	研修参加者	80 分
	i) 実際に語りの場を考えるグループワーク：・語る相手を想定する・語りの場のコンセプト整理・アクションプラン案の作成	・福祉支援語り部グループ	
	ii) 福祉、障害、生きづらさ等についての語り合い	・学生・新任者グループ	

(1) 基本プログラムの概要

上表のとおり、一般参加者・研修参加者（福祉支援語り部養成グループ／学生・新任者グループ）は、共通プログラムの「表現活動と支援者講演の視聴」「基調講演の聴講」「映像の視聴」に参加し、研修参加者は、2日間のグループワーク研修に参加する。

(2) 基本プログラムの内容

- ①表現活動により、直感的に障害や障害者理解を深める。
- ②基調講演により、やまゆり園事件の受け止め方や先人の思想や言葉を知ることを学び、

共生社会を考えるうえでの示唆を受ける。

③ラストメッセージの映像により、今につながる福祉の原点を学ぶ。

④グループワーク研修について

- ・福祉支援語り部養成グループでは、1日目の午後は、①～③で学んだ共生社会の根幹にある普遍的価値を共有し、2日目に向けて、やまゆり園事件に対する多様な意見に向き合い、2日目の午前から午後にかけて、感情の源泉の整理と問いかけ・語り方を学び、2日目の午後は、現場や地域に働きかけるアクションプランを作成する。

(アクションプラン一覧表：参考資料3)

- ・学生・新任者グループにおいては、「生きている意味とは?」「障害とはそもそも何?」「福祉の仕事とは?」といった根源的な問いについて、時間をかけてディスカッションし、日々感じているがなかなか言葉にできない微妙な感覚や想いを言葉にしていく。

(3) 福祉支援語り部養成グループの研修プログラムの概要

1 グループ3人～5人にメンター1名を配置し、経験を重ねた者や助言者が複数のグループをサポートしながら進行した。メンターは、WGのメンバーと以前の研修に参加した経験者が参加するとともに、各開催地域の協賛法人からの推薦者が加わり研修のけん引役となった。全体の進行は、受託団体が事業を一部再委託したNPO法人とつながるちから研究所のスタッフが主として担当した。

今年度(令和4年度)の福祉支援語り部研修でメンターを担当した18人のうち12人(67%)がこれまでの経験者で、より経験を深め力量を高めて助言者や全体進行役としてステップアップした者もいた。また、今年度(令和4年度)の基本方針である「地域主体のフォーラム開催」の中軸として、各地域で新たにメンターを務めた者は、全21人中6人(33%)となっており、“語り部”活動の担い手の裾野が広がった。

(メンター・助言者・全体進行者 参加状況：参考資料1)

(4) 新型コロナウイルス感染予防対策の概要

各会場で新型コロナウイルス感染予防対策を講じた。

(新型コロナウイルス感染予防マニュアル&チェックシート：参考資料6)

2. 「共生社会フォーラム」「全体フォーラム」の開催日程

第1回 近畿・東海・北陸ブロック 令和4年(2022年)9月29日～30日
共生社会フォーラム in 静岡(静岡県静岡市)

第2回 近畿・東海・北陸ブロック 令和4年(2022年)11月22日～23日
共生社会フォーラム in 滋賀(滋賀県彦根市)・全体フォーラム

第3回 中国・四国ブロック 令和4年(2022年)12月5日～6日
共生社会フォーラム in 広島(広島県広島市)

第4回 北海道・東北ブロック 令和4年(2022年)12月19日～20日
共生社会フォーラム in 福島(福島県郡山市)

第5回 九州・沖縄ブロック 令和5年(2023年)1月27日～28日
共生社会フォーラム in 佐賀(佐賀県佐賀市)

3. 「共生社会フォーラム」の開催状況

(1) 共生社会フォーラム in 静岡

① プログラム

コース

共生社会フォーラムin静岡は大きく2つのコースに分かれています。

【コース①一般参加】対象：一般(福祉職・学生含む) 基調講演や映像プログラム

基調講演では共生社会の実現に向けて先駆的に取り組みを推進する2人の実践者からお話をうかがいます。映像プログラムでは、日本の障害福祉の父と言われる「糸賀一雄」の思想と実践について学びます。

*1日目14:15までのプログラムに参加

【コース②研修参加】対象：福祉職・学生 共生社会における語り部等養成研修

津久井やまゆり園事件を契機に、福祉に携わる人々の資質や対話のあり方が問われています。対象別に2つの分科会にわかれ、共生社会の基本理念について考え、普及啓発のための語り部を目指すプログラムです。

*コース①に加え、2日間すべてのプログラムに参加

タイムテーブル

▶▶ 1日目 令和4年9月29日(木) ※コース①は、14:15まで

コース①・②対象	10:00 - 10:05	開会あいさつ
	10:05 - 11:00	基調講演①「静岡県のある人たちの文化芸術活動の現状と展望、そして問題点」 遠藤 次郎 氏
	11:00 - 12:00	基調講演②「かけがえのないいのちの発信～福祉の思想の伝え方～」 野澤 和弘 氏
	13:00 - 14:15	映像 NHKスペシャル「ラストメッセージ この子らを世の光に(※)」
コース②対象	14:30 - 17:30	グループワーク研修①(第1分科会「福祉支援語り部」グループ/第2分科会「学生・新任者」グループ) いずれの分科会でも福祉の思想・普遍的価値の共有を目的として、基調講演や映像プログラムを題材に、個人の内面に向き合うワークとグループディスカッションを行います。

▶▶ 2日目 令和4年9月30日(金) ※コース②の受講者のみ対象

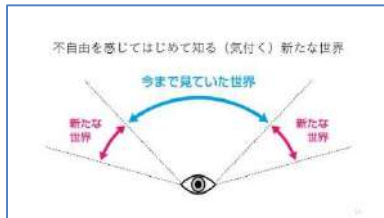
コース②対象	9:30 - 12:00	グループワーク研修②(第1分科会「福祉支援語り部」グループ/第2分科会「学生・新任者」グループ) 第1分科会では、やまゆり園での事件を題材に、“生きる意味のない命がある”“障害者は社会に不幸をもたらすだけ”という考えに同調する意見などに返す言葉をもつためのワークを行います。第2分科会では、NHK Eテレ「バリバラ」の出演などで知られる玉木幸則氏とともに、“そもそも障害とはなんだろう?”をテーマに率直に語り合います。
コース②対象	13:00 - 15:30	グループワーク研修③(第1分科会「福祉支援語り部」グループ/第2分科会「学生・新任者」グループ) 第1分科会ではグループワーク研修①や②を踏まえて、それぞれが自らの職場に戻って語りの場を持つことができるよう、メンターのサポートを受けながらアクションプランを作成します。第2分科会では、グループワーク研修②の議論を引き継ぎながら、玉木幸則氏とともに、“学生一人ひとりが抱える生きづらさ”を言葉にししながら、“福祉=幸せの追求”や“そもそも人が生きること”について、向き合います。
	15:30 - 16:00	全体共有・講評/まとめ・ふりかえり/閉会あいさつ

- ・開催日：令和4年9月29日（木）30日（金）
- ・会場：静岡県コンベンションアーツセンター グランシップ（静岡県静岡市）
- ・募集定員：84名（一般：60名/福祉職従事者/16名/学生・新任者：8名）
- ・参加人数：94名（一般：37名/福祉職従事者/18名/新任者：7名/講師：2名/関係者：30名）
- ・共催：開催委員会：静岡県手をつなぐ育成会 静岡県知的障害者福祉協会 静岡福祉大学
（特非）静岡県作業所連合会・わ （特非）オールしずおかベストコミュニティ

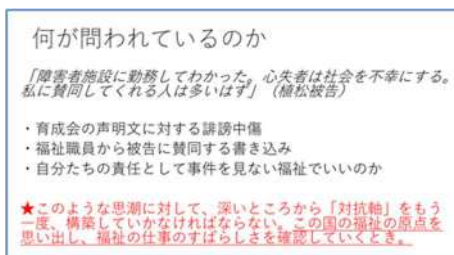
②レポート

〔共通プログラム〕

□表現活動①：デザイナーでギャラリーを運営する傍らアートを通して障がいのある人たちの素晴らしさや魅力を伝える活動を行っている遠藤次朗さん（NPO 法人アートコネクト しずおか理事）から、数多くの作品画像の紹介と講演があった。



□基調講演：講師の野澤和弘さん（静岡県熱海市出身 植草学園大学副学長・糸賀財団理事）から、2016年のやまゆり園事件の概要、死刑囚の確信を持った主張と当初考えられた原因、福祉関係者の視点等と、参加された神奈川県設置の検証委員会による調査の経緯と結果が紹介された。「犯人の主張（障害者施設に勤務してわかった。心失者は社会を不幸にする。私に賛同してくれる人は多いはず）に同調する人が多いことに、「嫌だな」と思う施設職員も多くいるが、自分自身を見つめなおして良い福祉に変えていくことが大事。このような新しい優生思想のような主張に対して、我々は深いところから“対立軸”をもう一度構築していかなければいけない。この国の福祉の原点を思い出して、福祉の仕事のすばらしさを確認しよう。」「“内なる優生思想”に対抗するためには、障害者固有の尊厳を認め合う思想を学び、かけがえのない“命”そのものを今の世の中に見せる意味がある。」という示唆があった。最後に、『親も社会も気づかず、本人も気づいていないこの宝を、本人のなかに発掘して、それをダイヤモンドのように磨きをかける役割が必要である』という糸賀一雄氏の言葉が紹介され、「それが福祉の仕事である。言葉のある障害者は、言葉で社会を変えていく。重度の障害者は、沈黙と微笑みで社会を変えていく。支援者は、自らの知性や想像力や芸術性や自覚された覚悟をもって重度障害者の沈黙と微笑の意味を社会に伝えていく。事件を忘れていくのではなく、この事件が投げかけているものを多くの人に問いかけていきたい。」という熱いメッセージが発信された。



□映像：NHKスペシャル第6集「この子らを世の光に」（2007年3月放送）の上映により、日本初の公的福祉施設である「近江学園」の設立に尽力した糸賀氏、池田太郎氏、田村一二氏らの取り組みが、今日の入所施設や地域での生活支援に受け継がれていることを紹介し、障害のある子どもたちと寝食を共にし、不断の研究と実践による考え方や言葉が、現代の福祉に通じる普遍的なものであることを学んだ。



[研修プログラム]

□学生グループは、新任者7人が参加し、NHK Eテレ・バリバラレギュラーの玉木幸則さん、とんがるちから研究所の近藤紀章さんおよび滋賀県（社福）グローの御代田太一さんが進行を務めた。開催地である静岡県に加え、埼玉県や三重県、滋賀県からの参加もあり、初日の基調講演の振り返りでは、アート活動をめぐってそれぞれの所属先で行っている取り組みや、アートを福祉領域で展開していくことの意味や価値を語り合った。2日目は、「最近の気になる福祉的ニュース」と「相模原事件に当時どのように感じたか」についての話し合いでスタート。事件後すぐに放送されたNHKの「バリバラ」の視聴や玉木さんが事件当時どのように感じたかについての話を聞いた上で、命を脅かされる不安や恐怖について語り合った。参加者から「明日からの研修を頑張りたい」「初めてこんなに深く障害について考えた」という感想が述べられ、2日間のグループワークの幕を閉じた。



□中堅以上の福祉職従事者を対象とする語り部養成研修には、事業所管理者・主任、サービス管理責任者、ソーシャルワーカー、就労支援員、生活支援員等18人が参加した。密を避けるため1グループ4～5人の受講者に限定し3テーブルに分かれ、各テーブルに1名ずつメンターを配置した。メンターは、滋賀県（社福）グローの大平慎太郎さん、鳥取県（社福）遊歩の林原愛さん、埼玉県（社福）ほっと未来 SOUZOU 舎の下里晴朗さんおよび熊本県（社福）清和会の木庭由香さんがつとめ、埼玉県（社福）清心会の岡部浩之さんと、とんがるちから研究所の竹岡寛文さんがワークシートとスライドを用いて進行した。また、実行委員会委員の久保厚子さん、WGリーダーの田中正博さんおよび埼玉県（社福）

昴の丹羽彩文さんが助言者として運営をサポートした。

研修の導入として、言語以外のコミュニケーション手段で誕生の月日順に並ぶというアイスブレイクがあり、初日は、①基調講演等を見て感じたこと、共生社会とは何か等の個人ワークと模造紙とポストイットを使用してのグループ共有、その状況についての発表がグループごとに行われた。翌日のセッションに向けて、やまゆり園事件を振り返り、様々な意見や価値観と向き合う時間を持ったあと、久保さんから「びわこ学園初代園長の岡崎英彦さんが職員からいろいろ聞かれると、”本人さんはどう思っているんやろう”と職員に返しておられた。私たちが物事を考えるときには、“障害のある人が中心にいるか” “その人がどう思っているか”ということが一番大事。」という熱いメッセージがあり、初日のセッションを終えた。



二日目は、②やまゆり園事件をどう受け止めるのか、全育連の声明への反応に対して各自が思うところをグループで共有するセッション③職場や地域で取り組む基本理念普及のアクションプランを各自が考え皆でブラッシュアップするセッションが行われた。



最後に、助言者の田中さんから「先月 8 月に国連の権利条約に関する日本の審査が行われた。この条約における障害のとりえ方の基本に『社会モデル』という考え方がある。今までは“障害は直さなければならないもの” “克服しなければならないもの”とされて

いた。しかし“特別なニーズを持った人”と捉えると、まずは、どんな特性があるのかと本人の状態を把握することが大事となる。その特性が生かされれば、その人の“能力”になるので、能力が評価されると講演にあったアート活動や音楽活動につながり、いろんな場面で活躍できる。それが用意されず特性が阻まれると“障害”になる。だから、障害がそもそも社会にあるのではないかと捉えるのが“社会モデル”。共生社会と呼べるか呼べないかは、一人ひとりを尊重すると言ったときに、本人の特性をどう受け止めているのか、という視点が大事になる。研修で議論したなかにその視点が含まれていたのかをもう一度振り返ってほしい。」という講評があった。



フォーラムの閉会にあたって、地元開催委員会事務局の増田吉則さん（静岡県手をつなぐ育成会事務局長）から閉会の挨拶があり、コロナ禍の中で参加者募集にご苦労ご心配されたことや、元同僚の参加者から「自分たちの仕事の意義が分かった気がする。この研修は、すべての人に受けてもらいたい。」という評価があったことと、「今日の出会いをぜひ大切に、いろいろと取り組んでいただきたい。」という受講者へのエールがあり、全てのプログラムが終了した。

③アンケートによる感想・意見

ア 一般参加者

【最も印象に残ったこと】

- ・野澤さんのやまゆり園のお話は、知らなかった事が多く、驚いた。情報の取り方には、注意深くあらうと思った。皆さんの笑顔の写真に泣いた。（40代・一般）
- ・やまゆり園の事件で被告の心情の移りかわり…。被告本人だけの問題ではなく、その環境がそうさせたのかと恐怖を感じた。（40代・介護福祉関係）
- ・やまゆり園が報道されなくなって、自分の中では終わっていた事を、野澤さんのお話は衝撃的でした。（60代・育成会員）
- ・今福祉には、デザイン（アート）が必要だという事。（50代・一般）
- ・遠藤氏のおかれている立場での、新しい角度の見方。（50代・学生）

【研修全体を通しての意見・感想】

- ・野澤先生の「福祉の原点を思い出し～」という言葉聞いて、ただただ今の延長線上として考えるのではなく、今一番立ち返る必要があるのだという意識が芽生えた。(20代・行政関係)
- ・野澤氏が語ってくださった福祉の真実、見方をもっともっと一般の方にも聞いてほしい。聞く機会を設けたい。(60代・知的障害者団体)
- ・遠藤さんのお話は、企業や事業所に、野澤さんのお話は、中高生に聞いてほしいと思う。(50代・一般)
- ・とても内容の濃いフォーラムだと思う。市町単位で気楽に見られるような機会もあったらいいと思う。(50代・その他)
- ・講演のスライド資料を配布して頂きたかった。(20代・行政関係)

イ 研修参加者（学生・新任者）

【聴講プログラム】

- ・遠藤さんや野澤さんについて、内容や時間も良かったが、省略したところも聞きたいという思いもある。(20代・介護福祉関係)
- ・遠藤さんのお話も野澤さんのお話も非常に聞きやすく、面白かった。特に、アートの分野では、所属する活動班にいる利用者さんの可能性をもっと広げていけたら良いのではないかと感じた。(20代・介護福祉関係)

【研修プログラムについて】

《セクションAについて》

- ・様々な意見や感想を聞くことが出来て、良い時間だった。それぞれの思いがある中で、「まだまだ話足りない」という気持ちになったので、時間がもう少しあれば尚良かった。(20代・介護福祉関係)

《セクションBについて》

- ・相模原事件については、当時働いていた先輩たちの話や玉木さんの話など、貴重な話が実際に聞けて良かった。(30代・介護福祉関係)
- ・皆さんの様々な考え方にプラスして、玉木さんの目から見た事件、そして制度の改革まで、勉強になった。自分で調べてみたいこと、確認したいことが出来た。(40代・介護福祉関係)
- ・事件のことについて、今まであまり話せていなかった部分を話し、いつも以上に深いところまで考えることができた。(20代・行政関係)

《セクションCについて》

- ・色々な意見（正解のない）が聞けて、とても学びになった。(30代・介護福祉関係)
- ・障害とは、福祉とは、を皆さんで議論することで、自分が今やることは、利用者さんの不安な気持ちに寄り添い、一緒に感じることだと思った。綺麗なことだけではなく、植松被

告のような考えの人もいて、共生していくことだとわかった。(40代・介護福祉関係)

【研修を通じて最も印象に残ったこと】

- ・「やまゆり園」での玉木さんの話。(40代・介護福祉関係)
- ・「最も」にまとめることは難しく、様々な言葉や考え、思い、捉え方、お話しが今の私にとってもものすごい影響を与える研修になった。受けることの大切さを改めて、2日目でも実感した。その中でも挙げるとするのならやはり「この子らを世の光に」の言葉が最も印象に残っている。(20代・介護福祉関係)
- ・仕事を続けて頑張りたい、と言われたこと。数ヶ月で実際辞めていく人もいる。勉強できたことを活かし、伝え、頑張る。(40代・介護福祉関係)

【研修を受ける前と後で変わったと感じること】

- ・自分の意見を述べたりすることが苦手だったが、今回のグループワークに参加できて、自分なりに意見を述べることで良くなった。(30代・介護福祉関係)
- ・日々の業務の中では鈍り始めていた「もっと出来ることがある」という感覚を強く覚えたこと。(20代・介護福祉関係)
- ・受ける前には不安や緊張感もあり、どのような研修になるのかと言った思いが強かった。そうした中で、様々なセクションを通じて多くの気づきや学び、意見などを通して、私の見つめ直しや振り返りが出来たことなどもあり、是非受けるべき研修という思いが強くなった点が一番変わったと感じた。(20代・介護福祉関係)

【研修全体を通しての意見・感想】

- ・自分や相手、ご利用者、職員、施設全体を守っていくために、大切なことを学ぶことができて良かった。みんな違ってみんな良いんだなと思い、充実した2日間になった。(20代・介護福祉関係)
- ・またこのような機会があれば、是非参加したいと思う。ありがとうございました。(30代・介護福祉関係)
- ・研修を通して多くのことを学び、気づき、振り返り、見つめ直すことが出来た。また、受けるべきであったり、受けなければならない、ちゃんと自分の事業所への報告、発表後のフォローをすることが必要といった強い思いについても研修を通して実感をする事が出来た。意見については特にはないが、今回は、「福祉支援語り部」への参加が出来るような存在を目指して、頑張っていきたいと感じることになった。(20代・介護福祉関係)
- ・明日からまた仕事を頑張ろうと思う。(20代・介護福祉関係)

ウ 研修参加者（語り部養成）

【聴講プログラムについて】

- ・野澤さんの話は、もっと長くても良かった。共生社会についての話も盛り込みながら。(40代・介護福祉関係)
- ・時間も内容も分かりやすく、良かった。(30代・介護福祉関係)

- ・自分の中で深入りできなかった事件について正面から向き合うことが出来た。(30代・介護福祉関係)

【研修プログラムについて】

《セクションAについて》

- ・共生社会について、グループ内での意見が違っていても否定する事なく、様々な視点で皆が考えている事を知る事が出来た。(無記入・介護福祉関係)
- ・改めて、言語化したりする機会は今までなく、研修に参加している様々な立場の人の価値に触れたから。(40代・介護福祉関係)
- ・もう少し余裕のあるプログラムでも良かったと思う。一つ一つのワークの時間が足りなかった。(20代・介護福祉関係)
- ・自分の中で当たり前だと思っていたことが、他の人からの意見をもらい、違う考え方もあるんだと新しい発見になった。(30代・介護福祉関係)

《セクションBについて》

- ・周りを気にせず、言葉を聞いて、受け止めてもらえる場がとても貴重だった。(30代・介護福祉関係)
- ・津久井やまゆり園事件について、改めて振り返ることが出来て良かった。様々な視点、価値観があることを知った。(40代・介護福祉関係)
- ・現場に持ち帰れる。問いかけ、語りかけ集の本を出してもアリだと思った。(40代・介護福祉関係)
- ・答えのない問の返答は、難しさを感じたが、一緒に考える姿勢と、それを考えるのが共生社会の一步かと思った。(40代・介護福祉関係)

《セクションCについて》

- ・研修の最大のテーマの実際のアクションについて、もっと共有しながら話してみたかったので、時間が短かったと思う。(30代・介護福祉関係)
- ・セクションCも少し、ワークの時間が短いように思えた。(20代・介護福祉関係)
- ・語る物をイメージしながら、プランニングしていく。具体的に取り組んでいきたい。(40代・介護福祉関係)

【研修を通じて最も印象に残ったこと】

- ・野澤さんの講演で「愛する人との感情の連なりの中で生きている。命は連なっている。」という言葉の中に植松的な考えの人に対する答え方のヒントを貰った。(40代・介護福祉関係)
- ・答えのない問に対する返答が難しかった。自分の思い、知識を豊かにしていきたい。(40代・介護福祉関係)
- ・やまゆり園に関する様々な背景を知ることが出来て、勉強になった。(40代・行政関係)

【研修を受ける前と後で自分が変わったと感ずること】

- ・誰かが動いてくれると思ったり、どこかで同じテーマの研修でみんなが参加すればいいと

思っていたが、自らが発信者になることをイメージできたし、他の参加者から勇気をもらった。(30代・介護福祉関係)

- ・研修前は、いつもの研修だと先入観があったが、始まってみるとイメージとは違い、意味のある研修だった。(無記入・介護福祉関係)
- ・共生社会を堅苦しく、難しく考えていたが、糸賀先生のことを知り、原点に戻って、福祉を見つめ直そうと思った。(30代・介護福祉関係)
- ・共生社会のヒントは、業務や普段の暮らしの中にある。まずは、それぞれ意識し、考えていきたい。(40代・介護福祉関係)

【研修全体を通しての意見・感想】

- ・この貴重な研修が開催場所や頻度が少ないことがもったいないくらい、参加して大変光栄に思う。課題の多さは研修の内容の濃さだったと知り、頑張ったかいがあった。(30代・介護福祉関係)
- ・とても勉強になり、楽しくワークでき、とても満足だ。また静岡でやって頂きたい。(40代・行政関係)
 - ・セッションCは、分詰まりのような感じ、時間をもっと付けてしっかりやるか、Cをやめて、A,Bを重点的にさせた方が良いと思う。(60代・特例子会社)
- ・ありがとうございました。個人的には、セッションBにもう少し時間があっても良かったと思った。深く考えていたテーマであるが、時間との勝負になっていた。全体的には、すごく良く、参考になった。(40代・介護福祉関係)
- ・帰って早速、皆に伝えたいと思った。(50代・介護福祉関係)

(2) 共生社会フォーラム in 滋賀・全体フォーラム 2022

① プログラム

コース

共生社会フォーラムin滋賀[全体フォーラム2022]は大きく3コースで構成されます。

【コース①一般参加】

表現活動・映像・シンポジウム

糸賀一雄記念賞音楽祭の映像や、とんとんかんてんワークショップグループによるパフォーマンスの鑑賞、「糸賀一雄」の思想と実践についてまとめたNHK番組の視聴をします。また、今回は全体フォーラムとしてシンポジウムも開催します。

*1日目14:30までのプログラムにご参加いただきます

【コース②研修参加】

語り部等養成研修

福祉施設で職員を指導・助言する立場にあり共生社会の基本理念を語り広める「福祉支援語り部」を養成する第1分科会、福祉分野に関心を持つ学生や福祉職新任者の方を対象とする第2分科会に分かれてのグループワーク研修を行います。

*コース①に加え、2日間すべてのプログラムにご参加いただきます

【コース③交流参加】

実践報告・交流会

これまで各ブロックで開催した研修の受講経験者とメンターによる実践報告・交流会を開催します。研修受講時に作成したアクションプラン等に基づき、職場や地域で行った実践例を情報交換し、各人の今後の展開について話し合います。

*1日目15:00～のプログラムにご参加いただきます

スケジュール

出演者やシンポジストの紹介は裏面をご覧ください。

▶▶ 1日目 令和4年11月22日(火) ※コース①は14:30まで

コース①・②対象	9:45 - 10:00	開会あいさつ
	10:00 - 10:50	表現活動(映像鑑賞) 糸賀一雄記念賞第20回音楽祭 表現活動 とんとんかんてんワークショップグループ 活動紹介 みんなでつくる“ぐるりまるごと劇場”プロジェクト
	11:00 - 12:00	映像 NHKスペシャル「ラストメッセージ この子らを世の光に」
	13:00 - 14:30	シンポジウム 「いのちに意味がある～共生社会フォーラムで何を大切にしてきたのか～」 シンポジスト 奥田 知志氏・玉木 幸則氏・大平 真太郎氏・田中 正博氏
15:00 - 17:30 コース②対象	グループワーク研修①(第1分科会「福祉支援語り部」グループ/第2分科会「学生・新任者」グループ) いずれの分科会でも福祉の思想・普遍的価値の共有を目的として、基調講演や映像&トークプログラムを題材に、個人の内面に向き合うワークとグループディスカッションを行います。	
	15:00 - 16:00 コース③対象	実践報告・交流会 これまでのフォーラムにおけるコース②受講経験者とメンター経験者を対象に実施します。

▶▶ 2日目 令和4年11月23日(水・祝) ※コース②の受講者のみ対象

9:30 - 12:00 コース②対象	グループワーク研修②(第1分科会「福祉支援語り部」グループ/第2分科会「学生・新任者」グループ) 第1分科会では、やまゆり園での事件を題材に、“生きる意味のない命がある”“障害者は社会に不幸をもたらすだけ”という考えに同調する意見などに返す言葉をもつためのワークを行います。第2分科会では、一般社団法人兵庫県相談支援ネットワークの代表理事でNHK Eテレ「バリバラ」の出演などで知られる玉木幸則氏とともに、“そもそも障害とはなんだろう?”をテーマに率直に語り合います。
13:00 - 15:30 コース②対象	グループワーク研修③(第1分科会「福祉支援語り部」グループ/第2分科会「学生・新任者」グループ) 第1分科会ではグループワーク研修①や②を踏まえて、それぞれが自らの職場に戻って語りの場を持つことができるよう、メンターのサポートを受けながらアクションプランを作成します。第2分科会では、グループワーク研修②の議論を引き継ぎながら、玉木幸則氏とともに、“学生・新任者一人ひとりが抱える生きづらさ”を言葉にしながら、“福祉=幸せの追求”や“そもそも人が生きること”について、向き合います。
15:30 - 16:00	まとめ・ふりかえり/開会あいさつ

- ・開催日：令和4年11月22日（火）23日（水）
- ・会場：滋賀大学 彦根キャンパス 講堂（滋賀県彦根市）
- ・募集定員：104名（一般：60名 福祉職従事者：16名 学生・新任者：8名
・実践報告交流会：20名）
- ・参加人数：90名（一般：22名/福祉職従事者：9名/学生・新任者：8名
/実践報告交流会8名）
講師：4名/出演者18名/関係者：21名）
- ・協力法人・機関：（社福）滋賀県社会福祉協議会（社福）グロー 国立大学法人滋賀大学
滋賀県健康医療福祉部障害福祉課

② レポート

【共生社会フォーラム・全体フォーラム 共通プログラム】

□表現活動①：糸賀一雄記念賞の受賞者を祝うことを目的に2002年度にスタートした音楽祭の映像を紹介した。毎年、母なる琵琶湖を抱きしめるように人々がつながり滋賀県内で開催される「うた」「打楽器演奏」「ダンス・身体表現」のワークショップが行われている。音楽祭では、ワークショップに参加する人たちのパフォーマンスと、総合プロデューサーの小室等さんはじめ多彩なゲストミュージシャンによる演奏とのコラボレーションによるステージの紹介があり、障害のあるなし等様々な垣根を越えたボーダレスで魅力あふれるステージを感じることができた。



□表現活動②：とんてんかんとんワークショップによる和太鼓パフォーマンスと音楽祭事務局の山口有子さん（社福グロー芸術文化部）により「みんなでつくる“ぐるりまると劇場”プロジェクト」の紹介があり、講堂で滋賀県の湖北地方で活動するとんてんかんとんワークショップにより、民族芸能「鍛冶屋（かじや）太鼓踊」に和太鼓の響きを加えた躍動感と創意あふれる舞台が披露され、「いのちに意味がある」をテーマとする本フォーラムのオープニングにふさわしく、コロナ禍を乗り越えて、命の輝きそのものが感じられるパフォーマンスが披露された。



□映像：NHK 厚生文化事業団の福祉ビデオライブラリーに昨年登録された NHK スペシャル・ラストメッセージ第6集「この子らを世の光に」（2007年3月放送）を上映した。日本初の公的福祉施設である「近江学園」の設立に尽力した糸賀氏と糸賀氏を支えた池田太郎氏や田村一二氏らの紹介と、今日の入所施設や地域での生活支援の取り組みの紹介があり、障害のある子どもたちと寝食を共にし、不断の研究と実践に基づき編み出された思想や残された言葉が、時代背景が異なるものの、現代の福祉に通じる普遍的なものであることを学んだ。一人でも多く、やまゆり園事件やコロナ禍における差別事象に象徴される社会の問題を我がこととして受け止め解決に取り組むためにも、時代を超えた普遍的な言葉や考え方を学び、身近な人々に伝えていくことが大切、ということを感じていただくことを願って午前中のプログラムを終えた。



□シンポジウム：

「～いのちに意味がある～共生社会フォーラムで何を大切にしてきたのか～」

基調講演の講師とフォーラムのプログラム企画や実践に取り組んだ3名のシンポジストにより意見交換し、本年度の取り組みを総括した。

[シンポジスト]

- 奥田 知志 （特定非営利活動法人抱樸理事長）
- 玉木 幸則 （一般社団法人兵庫県相談支援ネットワーク代表理事）
- 大平 眞太郎（社会福祉法人グロー法人事務局芸術文化部長）
- 田中 正博 （一般社団法人 全国手をつなぐ育成会連合会専務理事）

[フロアー発言者]

- 近藤 紀章（NPO 法人とんがるちから研究所代表理事）
- 丹羽 彩文（社会福祉法人昴理事長）



[発言要旨]

<奥田>

○～命の分断線～

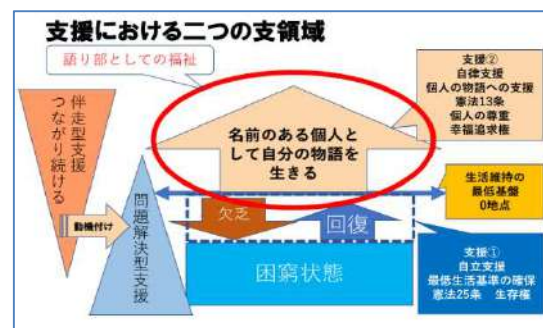
- ・共生社会フォーラムの語り部を作ろうという発想、現場で出会い、繋がり、物語っていく

ことが今大変大事。

- ・ やまゆり園事件は、意味のある命と意味のない命、生産性のある命、生産性のない命という基準値においての虐殺事件であったが、コロナ禍でのトリアージの議論と根底にあるものは繋がっており、日本社会は全然変わっていないと危惧する。
- ・ 事件を起こした彼が意味のある命と意味のない命との分断線を引いたと報じられているが、彼自身が分断線上にいたのではないか。彼個人の問題としてではなく、価値観の戦いの中で事件を捉えない限り、この世の中は変わらない。
- ・ 裁判の中で、彼は「こんなことをしないでいい社会を」と思わず言ったが、「こんなことをしなくてもいい社会だったら」と言いたかったのかもしれない。そういう社会はどのような社会かを考えることが、この事件を考えることになり、二度とこのような事件を起こさないことに寄与することになる。

○～人とのつながりが物語を生む～

- ・ 糸賀氏は、能力や生産性ではなく、実存、人間そのものの生命の尊重をおっしゃった。障害者への差別が第一義的な切り口ではあったが、その根底に流れている価値観とどう対峙するか、同時代人すべての課題である。
- ・ 「つながり」が大事。ホームレス支援には、問題解決のためのアプローチである解決型支援と、問題解決に関係なくつながり続ける伴走型支援の2つの支援がある。人と人とのつながりがなくなり孤立することは、生きる意欲がなくなることの大きなリスクとなる。外からのつながりから与えられる動機が大事。
- ・ 日本の社会保障は、現金給付もしくは福祉サービス等の現物給付である。制度は、福祉の器であって、人が関わり、人とのつながりの中で物語が生まれ、福祉となる。人とのつながりが、言葉を生み、物を物語に変える。
- ・ 糸賀さんの「この子らはどんなに重い障害をもっている、誰と取りかえることのできない個性的な自己実現をしているものなのである。人間と生まれて、その人なりの人間となっていく」の「なっていく」という言葉の重み。幸福追求とは、その人がその人なりになっていくこと。物語をつくる“語り部養成”を目的とする共生社会フォーラムの課題がここにある。



<田中>

- ・ 障害者権利条約についての日本国への国連勧告は、施設で収容する形での住まいの提供や特別支援学校での分かれた教育を行っていること等、障害のある人への対応としては致し方ないとの価値を植え付けているのではないかと懸念されており、奥田さんの指摘した問題とつながっている。
- ・ 勧告では、やまゆり園事件は障害者の尊厳と権利に関する意識を変えるチャンスであった、

との言及もあった。共生社会フォーラムでは、福祉従事者に価値を共有して深めていき、語り部となってもっと広めていただく、との思いで進めてきた。視点を広げ、福祉従事者のみならず、会社経営をされている層にも理念を広めていき、語り部養成を通じ、人の心の中に分け入っていくとの動きもある。糸賀さんに「自覚者が責任者である」との言葉があるが、社会に対して気づいた自覚者が気づいた問題を解消していくことが大事。

＜大平＞

- ・ やまゆり園事件が突き付けた基本的な価値観を考えるための中堅研修プログラムづくりは、福祉に携わっている我々がしっかりと価値観を語れるようにならなければとの思いで始まった。
- ・ 大きくは3つのパートに分かれており、まずは、共生社会の根幹にある福祉の思想等普遍的な価値を理解するためのプログラム。それを受け、やまゆり園事件に対するさまざまな意見から、多様な考え方と違いを理解するプログラム。返答に困るような問いにどう応えて言葉にしていくかのトレーニングを行う。そして、自分の職場をイメージしつつ、語りの場を実践するためのアクションプランを作成するプログラム。現状を整理し、気づき、具体的な動きを考えてもらうところまでをセットにしてプログラムを進めている。
- ・ グループワークの進行を手助けするためにメンターを置いている。メンターは、福祉の現場で支援しながら価値観を語れるモデルとなる人材であることが重要。
- ・ 福祉従事者は、価値観がある程度共有されているが、「企業人等価値観が共有されていない層にどうしていくのかを考えなければいけないのではないか」「そこに取り組んでいけるようなプログラムをどうすればよいか」を考え始めている。

＜玉木＞

- ・ 学生・新任者研修では、日頃あまり話す機会がないテーマ等を具体的に言語化していくため、話し合う場を作ってきた。当初はフリーハンドだったが、3年目ぐらいから基本的な流れを設定している。
- ・ 基本的には、やまゆり園事件を振り返りながら、障害とはどういうことか、福祉とはどういうことか、等分かっているようで分かっていないことを、家族や友人にどう伝えていくか等を考えていく。普遍的な問題をみんなで語っている。
- ・ 自分が曖昧にしていたことも明確になり、施設や現場での違和感に気づくことができ、その違和感を伝えていくことの必要なこと、また、まわりとつながって働くことの大切さも気づく。

学生・新任者グループは・・・①

2018年に共生社会フォーラムが始まってから、福祉支援語り部養成(中堅コース)同様に、ずっと実施している。

当初は、学生の参加も多く見られたが、最近では、平日開催などの理由で、新任者中心のグループになっている。

おそらく中堅コースのメンターも、学生・新任者グループで進めている具体的な内容をお知らせする機会もないまま、今日を迎えているような気がしている。

学生・新任者グループは・・・②

参加者と一緒に対話していることは、日頃、あまり話す機会がないテーマなど、具体的に言語化してこなかったことについて、ゆっくりと話し合う場所を作ってきた。

プログラムについては、当初、フリーハンドで進めてきたが、3年目あたりから、基本的な流れなどを設定しており、試行錯誤しながら、今年度は、次のようなプログラムで進めている。

受講生の可能性・・・

- ・ 語ることで見えてくる
- ・ 受講生同士の刺激
- ・ 初心者だからわかる「違和感」
- ・ 悩みを持ちながら、
聞くことが難しい・・・
- ・ おもしろさに気づき、働き続けること
- ・ ひとりじゃない など

- ・ この5年間の取り組みで、共に生きる社会が見えてきたかということ、フラストレーション

がたまっている。国連の勧告に政府が聞く耳を持っているのか、共生社会フォーラムはインクルーシブな社会を目指していると思っているが、このままでよいのかと考えている。

<丹羽>

- ・語り部養成の中堅研修では、メンターが研修生に語らなければならない、メンターが言葉をどんどん持っていくと感じている。いただいた金言を自分の中に取り込んで、研修生に返していき、また、地域での語りにも活用している。
- ・プログラムの中に、答えに窮する問いにどう答えるかを考えるワークがあり、メンターとして例示する私の物語がある。それは、重症心身障害のある車いすに座っている方を見た娘の問いへの対応であるが、それを例示している。研修生からどう語りかけるかを教えていただく等、自身もブラッシュアップされている。

<近藤>

- ・福祉の当たり前は社会の当たり前ではないこと、また、技術ではなく大切な思想・考え方を話し合うことに意義があることを踏まえて、メンターの皆さんや奥田さんの話の大事な部分をプログラムに反映させてきた。
- ・中堅研修はプログラムの大枠は決まっているが、進行役やメンター役、アドバイザー役それぞれのやり方で実施されており、同じものはなく、バージョンアップしてきている。
- ・学生・新任者研修は、玉木さんがフレームを作られているが、学生・新任者の方には、福祉だけの専門職にならないでほしいとの思いがある。メンターの皆さんは、福祉だけの顔を持っているわけではなく、違う側面も大事にしていこうとの考えから、プログラムの試行錯誤を毎行っている。



<大平>

- ・糸賀さんの実践、そして実践から生まれてきた思想に共感した。糸賀さんは施設をたくさんつくられてきたが、たぶん地域福祉をどんどん広げていこうと思っておられたのではないかと、糸賀さんの著書から読み取り、その続きを描いてみたい、と考え、滋賀で福祉の仕事に就いた。
- ・糸賀さん、池田太郎さん、田村一二さんは、すべての人の人権を大切にしようとの思いから、社会の課題に気づき、それを解決するための具体的な実践を行い、次につなげる活動をされてきた実践家である。私も、自分なりに目指していきたいとの思いをもって仕事をしてきた。
- ・共生社会フォーラムの取り組みは、こうした私の思いを確認することや、次の世代につなげていくためにも重要。

- ・ やまゆり園事件をきっかけにしているが、常日頃をどう振り返り、先を見据えて実践し、語っていくことがとても大事。

< 玉木 >

- ・ 全ての事柄に自分が当事者だったらどう考えるか、という視点を持つよう、意識的に伝えている。
- ・ 人権を守るために何をしなければならないかを丁寧に語り、考えていくしか方法はない。

< 奥田 >

- ・ 物語を美化すると、人を支配することにつながりかねず、そうならないようにすることが大事。未完の物語であることを前提とすべき。
- ・ 重度障害を持つ娘さんについての最首悟さんのインタビュー記事で、「無能力者は消えていいという思想は、彼の後継者を生みかねません。こうした社会の空気を変えるには、頼り頼られ、互いにいのちを生きていることを心に描くことが出発点だと思います。いのちを基盤にした関係性を考えつづけて思うのは、娘はわからないことだらけ。いのちもわからないということです。学問はわかれ、わかれと言いますが、わからない世界のほうが豊穡です。わかることが無理だとわかると、なりゆくいのちに身を任せるしかありません。」とあり、非常に感動した。
- ・ “生きる”とは、“次々になりゆくいのちをお互いが生きるなかで物語が更新され続けていくこと”であり、伴走型支援が目指しているつながりの世界だと思う。
- ・ 非常に辛い物語も物語であり、やまゆり園事件を起こした彼は辛くてしんどいことは不幸だと言いつつ、そうは思わない。辛くてしんどいことも、それなりの物語として我々に意味を与えてくれる。このことが、共生社会フォーラムでの語り部養成の取り組みの根底にあってほしい。

< 大平 >

- ・ 障害者雇用をきっかけにしながら、企業の方々に共生社会の理念・思想を理解いただけるような取り組みができないか、動き始めている。企業にとってどんなメリットがあるのかと問われることが多いが、何を語っていけるか、企業の方が求めていることにうまくマッチするような伝え方、提供の仕方はどのようなものかを考えているところ。

< 玉木 >

- ・ SDGs の「誰一人取り残さない」は、自分たちは取り残さないという上から目線の言い方である。「誰一人取り残されたい」と置き換えて使用している。そうすることで、すべてのことは自分事として考えるという思考が広がっていけばと思っている。

最後に進行の田中さんから「福祉のなかでも特に障害者への関わりは非常に多様なので、その価値観が社会の根底にあることが大事だということを、共生社会フォーラムではアピールし続けていく。」と締めくくるとともに、会場の参加者とシンポジストに感謝の言葉があり、幕が下りた。



【全体フォーラム 独自プログラム】

□実践報告・交流会：

これまでの共生社会フォーラム参加者や関係者がWEB会議でつながり、受講後の実践報告や今後の活動の抱負等、近藤紀章さんの進行により、メンター経験者の大平眞太郎さんと片岡保憲さんが助言者として参加し、意見交換した。

〔参加者〕

・群馬県 国立重度知的障害者総合施設のぞみの園	四方田さん	2021 年度群馬フォーラム参加
・滋賀県 株式会社グランデ	野間さん	2021 年度滋賀フォーラム参加
・北海道 社会福祉法人慧誠会	佐藤さん	2021 年度十勝/帯広フォーラム参加
・北海道 社会福祉法人慧誠会	福山さん	2021 年度十勝/帯広フォーラム参加
・滋賀県 草津市立障害者福祉センター	白波瀬さん	2021 年度滋賀フォーラム参加
・熊本県 社会福祉法人三気の会	今池さん	2021 年度熊本フォーラム開催ほか
・新潟県 社会福祉法人上越つくしの里医療福祉協会	山口さん	2020 年度新潟フォーラム参加
・熊本県 社会福祉法人清和会	木場さん	2021 年度熊本フォーラムほか参加



〔受講後の変化と実践〕

・四方田（群馬）：グループディスカッションの中で、他施設・事業所の方から色々な意見を聞いた。共に生きるという言葉の中でも色々な人の考えがあるんだなと、単純に感じた。その時、私の施設からは3名参加したが、その3人だけ話を聞くのはすごく勿体ないと思って、聞いたことを持ち帰り、所属している部署で話をした。

・障害者と本当に共に生きるということに対しての意識が、前に比べてより強くなったように感じる。また、働きかけ方・接し方というところで、皆の気持ちが変わっている、より優しくなったと感じる。

・その後、コロナが広がってきたので、なかなか研修自体ができなくなった。全職員に聞いてもらいたい、なかなかそれがまだできない。そのへんのもどかしさは、まだある

・片岡（助言者）：アクションプランを立てるまでに、受講生で持ち帰った時には、仲間とこういうフォーラムがあったという事を共有した。そしてしっかり喋れていなかったやまゆり園事件のことに、仲間と一緒に向き合う時間があった。四方田さんは、じゃあ、そこからどういうアクションを起こしていこうかというところで、モヤモヤとされている時期なのではないかなと察したところ。

・アクションプランを幾つも立てて、色々な研修会をやってみたり、イベントを開いてみたりということもした。

・野間（滋賀）：昨年、興味本位で参加したが、すごく楽しかった。本当は、昨日今日はもう1回再受講したかった。すごく新鮮な体験で良かったなと本当に思っている。

・「共生社会的なもの、そうじゃないもの」を研修でやって、日々、ちょっとしたことで共生社会っぽいとか、何か違うかな、というような目でものを見る時が少し増えたと思う。そういうことをフォーラムでやっている人がいっぱいいると思うと、ちょっとでもそこに参加できて良かったと思う。

・あの時に考えたアクションプランは、一緒に研修をしている事業者さんがあり、合同の研修会の時に、同じことは勿論できないが、いただいた糸賀先生の資料や、やまゆり園の資料等を使い、NHKの番組もビデオを借りて見て、「共生社会的なもの、そうじゃないもの」を模造紙に貼っていくワークを、うちと他所さん2社、僅か20人ぐらいだが、3つのテーブルにわかれてやった。

・自立支援協議会の放課後等デイサービスの部会が津市にあり、そこでもしたかったが出来ていないので、また今後できればいいなと思っている。

・片岡（助言者）：共生社会フォーラムで学んだことを、そっくりそのまま（研修会として）持ち出すということも一つ重要なものかもしれないが、それ以外の方法で地域の特性や自分の置かれている環境の状況等にあわせて、例えばやまゆり園事件の話をするようなフォーラムや研修ではないが何か共生社会について皆がまた前向きに考えることができるような計画等も考えていただくとよい。

・最近、芸術文化は、そのようなことを考えるプラットフォームとしてわかりやすい。誰もの周りにそのような文化や芸術という環境はある。そこに車いすのユーザーの人や視覚障害の人、聴覚障害の人が来る。座席がどうなっているのか、交通手段や道、会場等のハード面に加えて、どういう合理的配慮が必要なのか等をすごく考える機会になる。

・大平（助言者）：「共生社会ではない」といったいくつかのキーワードが出たなかで「そんな状況をどうしたら共生社会と言える状況に持っていけるのか」ということに焦点を絞

って議論するのはどうか。ある職員さんの「家族からこんなことを言われた」といった具体的な問いかけを例として、フォーラムの中で行った「こんな問いかけをされたらどうしよう」ということを皆で事例検討会的に深めていく。現状の整理をし、「じゃあ直面した時にどうしようか」と皆でシミュレーションしてみるのも面白い。

・佐藤（北海道）：語り部の養成研修に参加し、改めて自分の価値観と向き合う機会だったなと感じている。やまゆり園での事件のことを改めて自分の気持ちと向き合った時に、もちろん被害に遭われた方たちに対して辛いなとか酷いなとか気持ちもありつつ、事件を起こした方の気持ちとか背景を考えると、何処に焦点を向けていったらいいのだろうとすごく迷った記憶がある。自分と向き合ったり、色んな人の考えを聞きながら「正解ってないんだな」ととても感じた。

・研修が終わった後にほかの職員に「こんな研修でした」と報告はしたが、そこから何か深めることが実際にできていないので、何かできたらいいなと思いつつ、頭の中で止まっているような状況。ただ、参加できて良かったなとすごく思っているのもまた機会があれば参加したい。

・福山（北海道）：学生・新任者向けのグループワークに参加した。コロナ禍での就職ということもあって、これまで同年代の同じような福祉職に就いた人と関わる機会が本当になかったのが、同年代の人と関わるとか、「障害について」「福祉とは」等、根本的な事を一緒に考える機会が得られ、自分にとって大きな経験だった。

・「共生社会ってなんだろう」というディスカッションで一番印象に残っているのが、メンバーの人が「共生は共に生きるじゃなくて、強く制する、強制社会っていうふうにも捉えられるんじゃないか」とおっしゃっていた方がいて、とっても印象的だった。「いい言葉のようにも見えるけど、それを無理やり強いているようにはやりたくないよね」という話題も出て、それをすごく意識しながら、これまでやってきているのかなと思う。

・近藤（進行）：同じ職場の方が別のグループ（中堅と学生・新任）を受講して、この交流会に両方の方が一緒に参加するということ自体がなかったので、これも一つの新しいステップで、少しだけ前に進む。全く何もしてないと仰いましたが、「ああ、こんなの came。これに参加しよう」ということで、前に進んでいるとご自身を褒めてもいい。参加しようかという話になったところを大事にしてほしい。

・白波瀬（滋賀）：皆さん、私より若い人たちばかりだが、このような若い人たちと何か接点があればという気持ちで今日参加していて、すごく嬉しい。

・糸賀財団の企画（冊子『人と仕事』の編集等）や授賞式に、随分前から関わっていて、フォーラム自体には去年から参加している。ここ何年かで糸賀財団の取り組みが大きく斬新に変わり、その中でのキーワード「語り部」という言葉にすごくドキッとしている。個人的に密かに語り部をやっていて、以前から大木会が作られた『最後の講義』という小さい冊子を職場に配りまわったり、去年も、糸賀財団の『人と仕事』を配る等、そんな活動をしてきた。

・今池（熊本）：福岡(2018)で最初受講して、その後長崎(2019)と鹿児島(2020)でメンターをし、去年熊本で進行をした。少し立場の違うところから何回か参加させてもらった。2016年に熊本の地震があった後に、自分のアイデアで法人が地域食堂いわゆる子ども食堂を始めた。地域にある社会福祉法人として地域づくりというのが大切ということで地域食堂を始め、その中でこの研修とかに出あった。地域のことや人のこと等を色々考えていくなかで、今でも「どちらともいえない」といった状況がたくさんあって、白でも黒でもつけられないグレーな部分を調整したり、「これはこうだよな」って話しあってみたり、「取り敢えずやってみようか」とか、その結果「ああ、こうだったほうがよかったね」とか、「じゃあ次こうしていこうか」とか、そういうのは地域の方と話す中で結構重要だと思う。

・法人では、発達障害や重たい方の強度行動障害とかがメインになるが、療育施設なので、「療育方針の言語化」というか、虐待を生まない為にも自分たちがしていることをしっかり言葉にして伝えることが、この語り部の役割でもあると思う。エビデンス・根拠をしっかりと説明する。自分の事業所でよく言うのは、「障害あるなしはさておき、人としてどう接するかというところがまず大切」ということ。虐待防止法云々とかではなくて、「まずは人権」人としてきちんと接するかどうかということが先で、その後に、「障害の配慮とかを考えていこうね」ということを、この研修を通して、さらに強く感じた。

・事業の特性上、なかなか精神疾患の患者さんと接する機会が少なかったが、今はB型を担当していて、精神の方と接する機会がどんどん増えてきた。地域で暮らされている方が結構いらっしゃるので、トラブルとは言わないが、やっぱり地域で起こる。その時に、役場の担当課に行ったり、実際にお店の人等色々な人と話しをする。理解を一方向的に求めるということはないが、両方の意見を聞いて調整したり、人を巻き込んでいくこともあり、そういうときにもこの語り部研修をやったところが生きてると、今、振り返ると感じている。

・山口（新潟）：2年前に参加させていただいた時は、相談支援の事業所に勤めていて、そこから異動して今は就労系の事業所の法人本部にいる。当時、障害の相談で主に精神障害とか発達障害に関わる事が多く、やはり地域での支援の中で行き詰ることがあった。アパートを借りる時になかなか貸してくれないとか、新しいグループホームを立ち上げた時に「総論としたらいいんだけど、うちの裏だけはやめてくれ」という、よくある話だと思うが、そういうことがあって、啓発というか市民の方に正しい障害について理解をしていただきたいという思いがあって参加した。

・やまゆり園の事件について、改めて「障害とは」とか、生産性とか、優生思想についての議論もあり、自分の中でも自分の考えを振り返る機会となった。その研修を通じて得たことを持ち帰って事業所の中で優生思想について、自分たちの施設の中でも職員研修でやまゆり園事件のことを振り返る機会を設けた。

・自分が働いている社会のフレームも結局、生産性を求められている。今、就労系の事業所に勤めているが「1日何人来て報酬が入る」とか、「目標工賃定めて」というあたりを考

えると、矛盾しているというジレンマがずっとある。答えは見つかっていないが、ずっと考え続ける事が大事だと認識している。

- ・研修で立てたアクションプランは、今迄の関係者しか参加しなかったような啓発ではなくて、一般市民向けにわかりやすい敷居の低い啓発活動ができたらいいなという計画だった。金曜日の夕方の時間帯にちょっと負担にならない1時間か1時間半の枠の中で、お洒落な会場で参加していただいて、そこでアフターファイブで夜の街に遊びに行くというようなシチュエーションをイメージしながら計画して、何回か実施した。

- ・支援者が語るよりも障害当事者の方、主に今、精神障害の方とか発達障害の方に登壇していただくのがよいと思い、自分自身のリカバリーストーリーを語ってもらった。そこから発展して視覚障害の方とか身体障害の方にも登壇していただいて、「更に住みよい街になる為にはどうしたらいいか」といった話を今、年に3回4回ぐらいやっている。法人自体が2つの市に跨って事業所があるので、こちらの市の取り組みと同じものをこっちの市でもやってみようということをやっている。更に今年に入って、障害種別ではなくテーマにわかれて「働く」ということについてとか、或いは「災害の時にこういう支援・まちとしての働きがあるといいな」といったテーマ別の展開になってきている。

- ・一般市民の人向けに、どんな表現をしたらいいのかは非常に難しい。また、内部では「この啓発活動自体、収支的にどうなのか」「事業成果の報告あげなさい」といった感じであったり、市によって当事者への謝礼の取り扱いが違ったりと、葛藤を抱えている。

- ・木場（熊本）：メンターとしてしか参加してないのでプランを作っていないが、受講者を見習って作ればよかった。今年の年間計画に、共生社会のテーマを入れようかなと思って手を挙げたが、優先順位から漏れてしまってできないで終わっている。去年の全体フォーラムのこの実践報告会に参加して、同じ地域の今池さんから「何かしたらどうですか」という話をもらったので、今池さんに「何かしますか」と丸投げしたが、まだ実現していない。自分の地域でも出来る事、地元の特産品等を使って何かできればいいな、といった事を少し考えている。

- ・新職員等に「哲学対話」のようなことを毎年やっていて、テーマは「自分にとって働くとは？」のようなこと。「正解がある、ない」というようなテーマについて共生社会等絡めて考えると良かったかなと思うので、今度はそうしてみようと思う。

- ・長谷川式スケールを開発した長谷川さんの本に、認知症になった人から「なぜ私が認知症だったんでしょう？」「なぜ私なんですか？」のようなことを言われ、「何と返していいか」といったことが書いてあった。多分、障害の分野でもあるなと感じて、そういう問いを探すようになったという変化があった。職員とそういう話をする事で自分たちの仕事のやり甲斐とか、面白さとか、そういうのがわかっていくといいなというようなことを考えて過ごしている。

〔今後の活動の抱負〕

※詳細は、「参考資料2 受講後アンケート集計結果」(3)を参照。

近藤（進行）：共生社会フォーラムは、この後、広島、福島、佐賀と3回開催する。近くで開催される場合や可能などのご参加いただければありがたい。基調講演をされる奥田さんや野澤さんの話は毎年同じものではなくて少しずつ変わっており、我々がディスカッションしている話も少しずつ変わっている。学生・新任者の話も、玉木さんがその時々問題だと思うこと、今年は障害者の権利条約の話を取り上げている。手を変え、品を変え色々やっているのも、また木場さんに代表されるようにメンターになっていただくとか、進行役になっていただくとか、色々な形で関われると思うので、是非ともご参加並びにご協力の程よろしくをお願いしたい。

今後のみなさまの活躍を祈念して実践報告・交流会を終わりたい。



【共生社会フォーラム 独自プログラム】

□新任者グループは、7名の参加者が集い、玉木さんと御代田さんが進行した。初日は、プログラムでの振り返りを行い、「生の太鼓の演奏に感動し福祉と他文化の接点の創出の可能性を感じた」といった意見や、「役に立たなきやいけない、ということをしごく考えている」といった声も聞かれた。2日目は、「最近の気になる福祉ニュース」の共有からスタート。社会の大きな文脈の中で「福祉」や自分の仕事を捉え直したうえで、「障害とは？」「福祉とは？」が語り合われた。最後は、相模原殺傷事件をどう受け止め、何をそこから考えたか、というディスカッションへ。玉木さんの問題提起を起点にした事件当時の救急救命体制状況の深堀等も経て、それぞれの思考が深められた。最後に語り合う時間では、「こういう時間を持てて良かった」「諦める思考に陥っていた自分に気づけた」等の感想があり、各人がとても実りある気づきを得られたことが感じられた。



□中堅以上の福祉職従事者を対象とする語り部研修には、WGメンバーの所属法人の職員、日中一時支援事業所の管理者、障害者グループホームの経営者や職員、手をつなぐ育成会の役員、社会就労事業を振興・支援する法人の理事長、公立児童施設の管理職や職員等9人が参加した。密を避けるため受講者は、1グループ3人までと人数を限定し、3つのテーブルに1名ずつメンターを配置した。メンターは、いずれも滋賀県（社福）グローの大平眞太郎さんと齊藤誠一さんおよび岡山県（社福）旭川荘の川西大吾さんの3名がつとめ、

とんがるちから研究所の竹岡寛文さんが進行した。また、実行委員会委員の久保厚子さんとシンポジウムで登壇されたWGリーダーの田中正博さんが助言者として運営をサポートした。



川西グループ

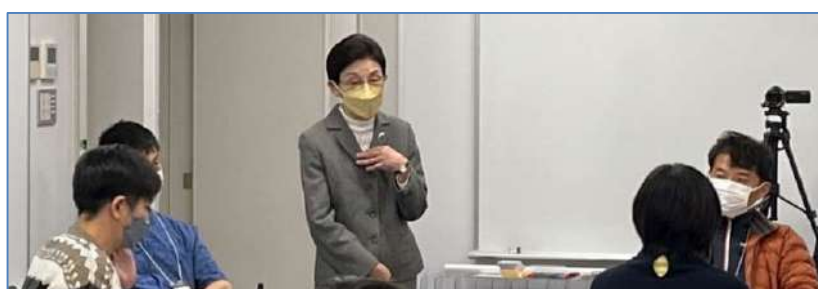


斎藤グループ

言語以外のコミュニケーション手段により誕生の月日順に並ぶ、という恒例のアイスブレイクでグループメンバーの関係づくりから始まり、初日は、①基調講演等を見て感じたこと、共生社会とは何か等の個人ワークと模造紙とポストイットを使用してのグループ共有、その状況についての発表がグループごとに行われた。



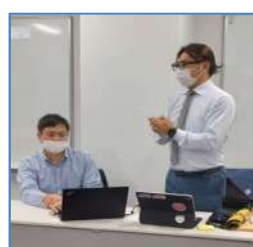
初日のおわりには、翌日のセッションに向けて、相模原障害者殺傷事件を振り返り、様々な意見や価値観と向き合う時間を持った。講評が助言者の久保さんからあり、「社会一般の方は、障害のある人たちのことをあまりよくご存知ない。だから、どうしても異質に見えていて、排除しようとするような感じがする。私達親も、ここにおられる支援者の方も、そして、そこから広がる周りの方々も、“障害のある人たちを一人の人権を持った人として見る”という、“私達の目が大事”。犯人が施設の職員でありながら事件を起こしたのは、その施設の支援の仕方自体が彼をそのような方に向けたのではないかなと思う。やはり施設もそうだが、私達支援者自身が障害のある人たちをきちんと“人権のある一人の、自分と同じ対等の一人の人間なのだ”ということを自覚しながら、支援をしていく。それが施設のカラーとなっていくってことがないと、犯人のような職員が生まれてくることになる。施設を地域から塀で閉ざしてしまうと、近所の人が見守ってくださっていることも閉ざしてしまう。私達親の中でもやはり無意識で、よその子と自分の子を比べる、そういうことをしてしまう。親であってもちょっと差別的な意識が自分の体の中にもどこかに少しはある。皆さんの中にも気付いてないけれども、あるのではないかなという思いで、これから明日の議論を深めていただきたい。そして「どういうふうにしていったらいいか」ということを持って帰っていただくとありがたい。」という受講者へのエールがあり、初日の幕を閉じた。



2 日目は、恒例のアイスブレイク「かたちをことばに、ことばをかたちに」で、視覚を使わずに情報（カードに描かれた図形）を伝える体験と、体と心の調子を両手で表すチェックインがあった。プログラムは、②やまゆり園事件をどう受け止めるのか、全育連の声明への反応に対して各自が思うところをグループで共有することから始まり、自らの感情の源泉を探り、答えに窮する語りかけを行うセッション ③職場や地域で取り組む基本理念普及のアクションプランを各自が考え、グループでブラッシュアップするセッションが行われた。



二つ目のセッションでは、昨日の終了前に行ったやまゆり園事件に対するさまざまな意見から多様な考え方と“違い”の理解を踏まえて、「問いかけ」を言語化し、共感のためのいくつかの「語りかけ」を言語化するという作業を、ワークシートを用いて、個人ワークとグループでの共有を繰り返し、じっくりと時間をかけて行った。まずは、「感情と源泉の整理」として、自らの感情が沸き起こった源泉を言語化するために、「自分の内面（感情・思考）と向き合う」「“もやもや”との対話」という客観的整理を行った。次に「問いかけ」と「語りかけ」による対話を理解し実践する時間を取り、三つの「答えに窮する問いかけ」事例に対して各人が「語りを言語化していく語りかけ」を行った。



最後のセッションでは、研修終了後に職場や地域を対象とする語り部活動のアクションプランづくりに取り組んだ。終了後、助言者の田中さんから、二日間のフォーラム全体の講評があり、最近の活発に展開している障害者芸術に関するヘラルボニー社の活動の紹介や、奥田さんの基調講演から得たヒントについて話があった。また「2日間、脳みそにいっぱい詰め込んで、最後、吐き出す場としてアクションプランを作られた。是非、持ち帰って、出会う人たちに伝えていただきたい。言葉が持つ力というのは結構大きい。今、コンフリクト（対立・衝突）で悩んでいる方にとっても、この人たちを守っていくという思いと、自分の拠って立つところを持っていたいただきたい。職員で『ちょっと犯人の気持ちがわかる気がする』という足元がぐらついている人には、一緒に足元が安定するように話しかけてあげると、足場がしっかりしていく。今日の研修は、その意味で、皆さんの礎となる。いっぱい詰め込んだ思いを吐き出して、輪をつくる事にアクションプランを活かしていただければ非常にありがたい。」という参加者へのエールがあった。

フォーラムの終了に際して、中堅職員グループ進行役の丹羽さんから「皆さんがモヤモヤを自分の中に抱えながら、いつかそこに辿り着く、いつかそれが花開く、いつかその共生社会に辿り着くという事を信じて抱え続ける力というのをネガティブ・ケイパビリティと言う。これはアメニティフォーラムで精神科医の元フォーククルセダーズの北山修さんがそういうお話をされていた。それこそが我々福祉の専門職としての1番の専門性ではないかという問いかけだった。共生社会は、成しそうで中々成さない。しかし、それを追い求めないといつまでも実現しない。やはり、それを皆で色んなアプローチで取り組んでいき、いつか誰も排除されない、生きることが否定されない、そのような社会を皆さんと一緒に作りあげていけたらと思う。」という締めくくりがあり、全てのプログラムが終了した。



③アンケートによる感想・意見（滋賀）

ア 一般参加者

【最も印象に残ったこと】

- ・奥田さんが仰っていた、「物に人が関わる事で、物が物語化する」という言葉が印象に残っている。私は、事務職員（not 福祉職）の為、個別のケースに深く関わる機会はどうしても少なくなってしまうが施策や制度を運用する際には、その先にいる一人一人の物語（人生）に思いを馳せられるような人間になりたいと、改めて感じた。（20代・行政関係）
- ・何度も視聴しているが、NHK アーカイブ「ラストメッセージ」の映像は、糸賀氏のみならず、池田氏、田村氏の実践と現在に通じる思想が伝わり、見るたびに感動がある。（60代・介護福祉関係）
- ・制度は器でしかない。（制度を識る）確かに、近年制度も地域に合わせたものになっている。「誰一人取り残さない」とは表面上、社会的にも口にされてきた。しかし、人材が少なくなってきた、人間関係を他者に伝える事は難しくなってきた。「仕草」も器である。視点の柔軟性として、こうしたフォーラムは必要だと思った。（50代・介護福祉関係）

【感想・意見】

- ・フォーラムに参加して、学ぶことが多かったと思うが、シンポジウムについてもう少し登壇者同士の意見交換などがあれば良かったと思う。（30代・行政関係）
- ・糸賀一雄氏について、今回映像で詳しく知ることができ、勉強になった。（50代・行政関係）
- ・勉強になった。継続した取り組みを期待する。（50代・行政関係）

イ 研修参加者（学生・新任者）

【聴講プログラムについて】

- ・分かりやすい資料や実際に見る芸術などが沢山あり、入りやすく、分かりやすかった。（20代・介護福祉関係）

【研修プログラムについて】

《セクションAについて》

- ・玉木さんからの返答（物語）が伺えたのが、私の一番の収穫でした。（50代・介護福祉関係）
- ・アイスブレイクで打ち解けて議論できる状況で、話しやすくて良かった。（20代・介護福祉関係）

《セクションBについて》

- ・福祉や障害について、現場で働いてみると、他の人の意見や考え方に触れる機会がなく、今日、改めて自分なりの考えを言葉に出来た。（20代・介護福祉関係）
- ・難しい内容だったが、面白かった。（50代・介護福祉関係）

- ・ やんわりした「福祉」、「障害」という言葉について、色んな人の考えを聞けて良かった。
(20代・介護福祉関係)

《セクションCについて》

- ・ 人それぞれの気持ちや思いの背景が聞けて、自分の知る事のない事を広く知れた。(20代・学生)
- ・ 具体的に今の日本で不足している考え方、仕組みについて学べた。(20代・介護福祉関係)

【研修を通じて最も印象に残ったこと】

- ・ やまゆり園の事件から、普段の仕事や周りの事を見つめ返すと、当たり前にあることだと感じた。事件から変わったことは少ないと思う。(20代・介護福祉関係)
- ・ 枠組みが私にあり、それが自分の可能性を潰していると思った。(20代・学生)

【研修を受ける前と後で自分が変わったと】

- ・ 現場の業務からの視点から、色々諦めていたことに気がついた。沢山の人の考え、思いを共有するといった場を自ら作れる存在になれればと思う。(20代・介護福祉関係)
- ・ 学校にあるバリアフリーの視点で、障害について見ていきたいと思った。(20代・学生)

【研修全体を通しての意見・感想】

- ・ 自分で考え続けようと思う。(20代・学生)
- ・ 始まる前や休憩前に、トイレの位置や食堂の位置等の説明が欲しかった。(20代・介護福祉関係)

ウ 研修参加者（語り部養成）

【聴講プログラムについて】

- ・ 太鼓がとても迫力があり、良かった。(30代・介護福祉関係)
- ・ ラストメッセージをもっと多くの人に見て欲しい。(60代・介護福祉関係)
- ・ 事前に質問を募集し、その内容に関してクロストークをして頂きたい。(30代・障害福祉)

【研修プログラムについて】

《セクションAについて》

- ・ 一分、二分という時間制限の中でまとめて話す必要があり、学びになった。間伸びをすることなくテンポよく進むので、興味関心が持続出来た。(50代・障害児入所施設)
- ・ 自分の考えを見る事で、自分の気持ちに向き合っていると感じた。(60代・介護福祉関係)
- ・ 共生に関して、理解が深まるとともに福祉外の方にどのように伝えれば広がるのか分からなくなった。(30代・障害福祉)

《セクションBについて》

- ・ 自分の考えや周りの人の語りかけを聞く中で、キーワードが分かってきたように感じる。

相手を説き伏せるのではなく、共感し、共に考えるスタンスでいいのだと感じた。(50代・障害児入所施設)

- ・実際に問いかけや語りかけのスタイルを学ぶ事が出来た。(60代・介護福祉関係)
- ・もやもやすることを自分の考え、自分の言葉で表現することの難しさを感じた。(40代・無記入)

《セクションCについて》

- ・自分のやりたい事、やらなければならない事が明確になった。(40代・介護福祉関係)
- ・自分がやることを十分にできないかもしれないが、動いていこうと思った。(60代・介護福祉関係)

【研修を通して最も印象に残ったこと】

- ・太鼓の迫力が最も印象に残っている。(30代・介護福祉関係)
- ・伝える事の難しさ、語り部としての使命、受け取る側の難しさ。(40代・介護福祉関係)
- ・意見について答えを出すのではなく、考え続ける事が大切との意見に対して、非常に共感した。(30代・障害福祉)

【研修を受ける前と後で自分が変わったと】

- ・二回目の参加だった。自分の想いを話す事で、変われることを実感している。続けていきたい。(30代・介護福祉関係)
- ・激的に変化したとは言えないが、まずは職場の人達に、今までの自分の実践を語りたいと思う。(50代・介護福祉関係)
- ・自分が動かなければならないと思った。(60代・介護福祉関係)

【研修全体を通しての意見・感想】

- ・テンポ良く進み、内容も充実していて満足した。(50代・障害児入所施設)
- ・「ひもとき」ではなく、「各々の主観を述べてOK」の研修は珍しく、焦ることなく心に余裕を持ちながら参加できたと思う。(30代・介護福祉関係)
- ・どんどん書き進められるプログラムが、よく出来ていると感じた。(60代・介護福祉関係)
- ・非常に有意義な研修となり、素晴らしい方々と知り合うことが出来た。研修の機会を設けて頂きありがとうございました。(30代・障害福祉)

(3) 共生社会フォーラム in 広島

① プログラム

コース

共生社会フォーラムin広島は大きく2つのコースに分かれています。

【コース①一般参加】対象：一般(福祉職・学生含む) 基調講演や映像プログラム

基調講演では共生社会の実現に向けて先駆的に取り組みを推進する2人の実践者からお話をうかがいます。映像プログラムでは、日本の障害福祉の父と言われる「糸賀一雄」の思想と実践について学びます。

*1日目14:15までのプログラムに参加

【コース②研修参加】対象：福祉職・学生 共生社会における語り部等養成研修

津久井やまゆり園事件を契機に、福祉に携わる人々の資質や対話のあり方が問われています。対象別に2つの分科会にわかれ、共生社会の基本理念について考え、普及啓発のための語り部を目指すプログラムです。

*コース①に加え、2日間すべてのプログラムに参加

タイムテーブル

▶▶ 1日目 令和4年12月5日(月) ※コース①は、14:15まで

コース①・②対象	10:00 - 10:05	開会あいさつ
	10:05 - 11:00	基調講演①「共生社会に求められるアダプテッド・スポーツの重要性」 加地 信幸 氏
	11:00 - 12:00	基調講演②「いのちに意味がある ～私たちは何を大切にしてきたのか～」 奥田 知志 氏
	13:00 - 14:15	映像 NHKスペシャル「ラストメッセージ この子らを世の光に(※)」
14:30 - 17:30 コース②対象	グループワーク研修①(第1分科会「福祉支援語り部」グループ/第2分科会「学生・新任者」グループ) いずれの分科会でも福祉の思想・普遍的価値の共有を目的として、基調講演や映像プログラムを題材に、個人の内面に向き合うワークとグループディスカッションを行います。	

▶▶ 2日目 令和4年12月6日(火) ※コース②の受講者のみ対象

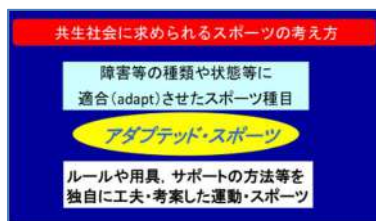
9:30 - 12:00 コース②対象	グループワーク研修②(第1分科会「福祉支援語り部」グループ/第2分科会「学生・新任者」グループ) 第1分科会では、やまゆり園での事件を題材に、“生きる意味のない命がある”“障害者は社会に不幸をもたらすだけ”という考えに同調する意見などに返す言葉をもつためのワークを行います。第2分科会では、NHK Eテレ「バリバラ」の出演などで知られる玉木幸則氏とともに、“そもそも障害とはなんだろう?”をテーマに率直に語り合います。
13:00 - 15:00 コース②対象	グループワーク研修③(第1分科会「福祉支援語り部」グループ/第2分科会「学生・新任者」グループ) 第1分科会ではグループワーク研修①や②を踏まえて、それぞれが自らの職場に戻って語りの場を持つことができるよう、メンターのサポートを受けながらアクションプランを作成します。第2分科会では、グループワーク研修②の議論を引き継ぎながら、玉木幸則氏とともに、“学生一人ひとりが抱える生きづらさ”を言葉にししながら、“福祉=幸せの追求”や“そもそも人が生きること”について、向き合います。
15:00 - 16:00	全体共有・講評/まとめ・ふりかえり/閉会あいさつ

- ・開催日：令和4年12月5日（月）6日（火）
- ・会場：広島県社会福祉会館（広島県広島市）
- ・募集定員：84名（一般：60名/福祉職者：16名/学生・新任者：8名）
- ・参加人数：90名（一般：35名/福祉職：12名/学生・新任者：8名/
講師：2名/関係者：33名）
- ・共催：開催委員会：広島県知的障害者福祉協会（一社）広島県手をつなぐ育成会
（社福）広島県社会福祉協議会 ここすまネット

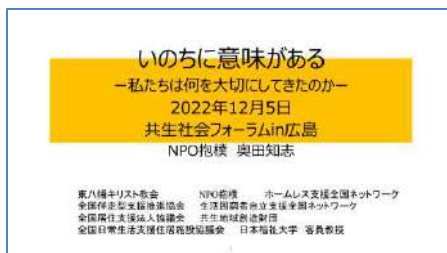
① レポート

[共通プログラム]

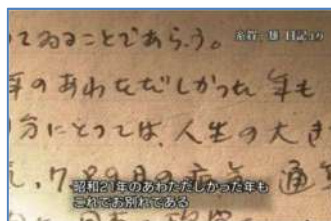
□基調講演①：加地信幸さん（広島文化学園大学 教授）から、表現活動に関する基調講演「共生社会に求められるアダプテッド・スポーツの重要性」があった。講演では、注目度の高いパラスポーツ・障害者スポーツだけでなく、16年間の取り組みにより、ルールや用具、サポートの方法等を独自に工夫し考案された、全ての人のためのスポーツ“アダプテッド・スポーツ”の考え方や内容、様々な感動を生む実践の様子がスライドや動画で紹介された。



□基調講演：講師の奥田知志さん（NPO 法人抱樸理事長）から、最初に、共生社会フォーラムの目的は「福祉の思想を学ぶ」「それを実践する」「語る人＝語り部になる」であり、「物語る」という確認があり、伴走型支援の由来や課題解決型支援との関係、ご夫婦で寝食をとにする等伴走型支援をされた実例等の紹介があった。続いて、「人間がもう一度その気になる」ことについて、動機の2つのパターン（内発的動機と外発的動機）があるが、後者による“人との繋がり”に注目すべきことと、ホームレス支援の実践で得た「人が繋がることにより生まれた言葉が物語を生み出す。そこに生きる意味、その人が生きていく意味を見いだす。」という示唆があった。また、糸賀氏の『生涯寝たきりであっても、きっとそこには新たな充実があるに違いなく、どんなに重い障害があっても万人の道を歩み不断の自己表現・個性化がある。』『人間とうまれて、その人なりの人間となっていくのである。その自己実現こそが創造であり、生産である。』という言葉を紹介され、「その人がその人になっていくということにおいて、欠かせないものは“他者との繋がり”」と強調された。最後に、会場の受講者に向けて「もしも、やまゆり園の犯人と会ったとしたら、彼に何と言うのか。『お前は、もう生きる意味がない。』と言ったら、彼が言ったことを今度は自分が彼に言うことになる。何を私たちはこのあと語っていくのか。」という宿題が出され、基調講演が終了した。



□映像：NHKスペシャル第6集「この子らを世の光に」（2007年3月放送）の上映により、日本初の公的福祉施設である「近江学園」の設立に尽力した糸賀氏、池田太郎氏、田村一二氏らの取り組みが、今日の入所施設や地域での生活支援に受け継がれていることを紹介し、障害のある子どもたちと寝食を共にし、不断の研究と実践による考え方や言葉が、現代の福祉に通じる普遍的なものであることを学んだ。



[研修プログラム]

□新任者グループは、8人が参加し、バリバラレギュラーの玉木幸則さんと、とんがるちから研究所の近藤紀章さんが進行を務めた。初日は、自己紹介からはじまり、続いて一般プログラムから得た学びや気づきを一人ずつ語り、疑問や違和感を交換した。また、ディスカッションを通じて得られたことや、翌日に向けて「研修を受ける前との変化、研修で得られた学びや気づき」をワークシートに記入して振り返った。2日目は、『『やまゆり園事件』と『命の選別』『障害』と『福祉』『福祉』の普通』『福祉』で『働くこと』』というテーマで進行。普段、何気なく使っている言葉を掘り下げるところから、この仕事の意味を見つめ直す時間となった。玉木さんからのレクチャーやライフヒストリーの紹介を挟みながら、最後は「何をもって共生社会と呼ぶのか？」というテーマでディスカッションした。



□中堅以上のグループには、福祉施設・サービス提供事業所の法人代表、管理者、児童発達支援管理者、相談支援専門員等12人が参加した。密を避けるために、受講者は1グループ3名とした。4テーブルに分かれ、各テーブルに1名ずつメンターを配置した。メンターは、昨年から研修を受けてこの日に備えていただいた地元広島県の倉信一さん、角田芳郎さん、近藤直子さんおよび檀上雅紀さんの4名がつとめ、とんがるちから研究所の竹岡さんのサポートのもと、岡山県の川西大吾さんが全体進行した。また、実行委員会委員の久保厚子さんとWGリーダーの田中正博さんが助言者として、埼玉県（福）清心会の岡部浩之さんと高知県（特非）脳損傷友の会高知青い空の片岡保憲さんがテーブルサポーターとして参加し、運営をサポートした。



最初に、言語以外のコミュニケーション手段により誕生の月日順に並ぶ、という恒例のアイスブレイクでグループメンバーの関係づくりから始まり、初日は、①基調講演等を見て感じたこと、共生社会とは何か等の個人ワークと模造紙とポストイットを使用してのグループ共有、その状況についての発表がグループごとに行われた。



2日目に向けて、やまゆり園事件を振り返る時間を設けた。助言者の久保さんから受講者に向けて、「まさか日本でこんなにたくさんの人が一気に殺されたということがなかなか信じられなかった」という事件直後の久保さん自身の心情の話があり、「どんな障害を持っていても、大事な家族。確かに子育てにしんどい部分もあるが、親としては、この子がいるからこそいろんな人と知り合え学ぶこともできた。家族は“いらない命”だとは絶対思っていない。」という思いから声明文を出したが、それに対してひどい言葉で批判する声や犯行に賛同する声が多数寄せられ、犯人と同じような考え方をする人がたくさんいることを痛感したという話があった。一方、「同じ重度の障害の子供をもっている親であっても、気づかないうちに、心の奥底の方に差別的な意識がある」という話があり、「皆さまの中にもひょっとすると、心の奥底の自分が気づいてないところに差別的意識があるかもしれない。研修を通じて自分のそういう奥底にあるものに気づく経験をし、“自分は、それでも障害のある人たちを支援し、この人たちと寄り添っていく”という思いを持って、是非、語り部になってほしい」という熱いメッセージがあり、初日の幕を閉じた。



2日目は、②やまゆり園事件をどう受け止めるのか、全育連の声明への反応に対して各自が思うところをグループで共有するセッション ③職場や地域で取り組む基本理念普及のアクションプランを各自が考え、グループでブラッシュアップするセッションが行われた。



助言者の田中さんから「今回の研修では、誰かに何かを伝えなくてはいけない時にどうするのか、自分の中でいろいろ持っている思いをたくさん整理されたので、それをもとに決意表明されると思う。共生社会に関して今回、国連が権利条約に関して日本へ勧告した。「収容型の施設と特別支援学校は、9月にやめるように」という文書が出たが、直ちにはやめられない。やめる方向に舵を切れという勧告だった。何故それが出されたかと言うと、分けるのが当たり前になっているから。障害があるうえに、分けたところで教育を受ける。教育を受ける段階から分かれているということが、大人になって施設に行くことの流れを作り出すということになる。それで、「一緒にいるのが当たり前という社会をどう作っていくのか」というのが共生社会の根本。皆さんの基準と照らし合わせて、いろいろと確認していく作業が、この後の研修の作り方になっていく。最後に、一番大事なのは、「障害がある人は保護されがちだが、主体性を持って社会に参加する場をどう用意するのか」ということなので、そういった視点で決意表明を語ってほしい。」というアドバイスがあった。



閉会にあたって、地元開催委員会委員長の米川晃さん（広島県知的障害者福祉協会会長）から閉会の挨拶があり、フォーラム参加者へのお礼と研修受講者への労いの言葉が述べられるとともに、時間管理された研修プログラムに対する感想と評価、運営に協力された方々への謝辞があった。また、受講者に向けて「それぞれの施設や事業所にもち帰って皆さまに伝え、我々が日々やっている「語る」ということを広めていただきたい。」というメッセージがあり、全てのプログラムが終了した。

③アンケートによる感想・意見

ア 一般参加者

【最も印象に残ったこと】

- ・加地先生の講義の中で、「世の中にある何気ない事一つを取っても、大きな影響を与えられる可能性がある」という事がとても印象に残った。（20代・介護福祉関係）

- ・アダプテッドスポーツについて、全国の同じ考え方を持っている方と手を繋いで、広がったと思った。(60代・一般)
- ・奥田さんのお話は、とても心に響いた。社会の在り方と自分のすべきことを改めて知らされた気がした。(50代・介護福祉関係)
- ・改めて、糸賀先生の動画を見て考えさせられた。奥田先生の話を生で聞けて良かった。(50代・行政関係)

【感想・意見】

- ・共生社会の実現に向けて、このような場が多く開催され、一般の方々にも知る機会になればと思った。共生社会に向けて、社会資源の充実化、福祉の社会的地位の見直し等、課題が多い取り組みだと感じた。(30代・介護福祉関係)
- ・ありがとうございました。色々な条件が揃ったから来ることができ、聴くことが出来た。講演は、もう少し伺いたかった。自分の感じていたことを先生方にまとめてもらったおかげで、心の整理が出来ました。(50代・保護者)
- ・福祉に携わる人間として、入職当時に持っていた情熱を思い出す研修だった。日々の業務で福祉を考える時間、熱が失われていくのを自分自身感じていたが、この研修を通して、福祉の深さを改めて学ぶことが出来た。(20代・介護福祉関係)

イ 研修参加者（学生・新任者）

【聴講プログラムについて】

- ・私は、特別支援学校での実習経験や野宿者への炊き出し弁当の提供をしたことがあり、二つの講演は分かりやすく興味深い内容だった。質問時間や問いかけの時間があると、より自分事として受け止められると思った。(20代・介護福祉関係)
- ・奥田さんの話をもっと聞いてみたかった。(20代・介護福祉関係)

【研修プログラムについて】

《セクションAについて》

- ・先輩方のお話を聞かせて頂き、立場が違っても思っている事や悩んでいる事が、それぞれにあるんだと感じた。(20代・介護福祉関係)
- ・全員が意見を言いやすいようにルールを出してもらったので、話しやすかった。色々な意見が聞けて面白かった。(20代・介護福祉関係)
- ・新任の職員に向けて内容を分かりやすくして頂き、聴きやすかった。(30代・介護福祉関係)

《セクションBについて》

- ・福祉の中でも大きな事件であり、全ての事件の中でも記憶に残る事について考えることが出来て良かった。事件だけでなく、その中の命の選別という事や今後の仕事に活かせる考え方があり、とても勉強になった。(30代・介護福祉関係)
- ・福祉のことだけでなく、人として働く上で大切なことだったり、良い考え方を学んだ。「幸

せになるための法則」は、とても心に響いた。自分を大切に、これから働いていく。
(20代・介護福祉関係)

《セクションCについて》

- ・知らない所で差別をしてしまっていた事に気づけて良かった。共に生きていく社会で大事な事をディスカッション出来た。(30代・介護福祉関係)
- ・福祉の当たり前が社会の当たり前ではないということ、命の選別について考えることもでき、無駄な命はないという事とこの話でも考えることが出来た。(20代・介護福祉関係)
- ・教育の分野においても、変化が求められているのかと思った。(20代・介護福祉関係)

【研修を通じて最も印象に残ったこと】

- ・結果を求める問題解決型の支援だけでなく、すぐに結果は出ないが時間をかけて寄り添う伴走型の支援が必要だという事が印象に残った。(40代・行政関係)
- ・「どうでもいい命はない」ということ、「人と比べる必要はない」ということ。(20代・介護福祉関係)
- ・命の選別（トリアージ）について考える事があり、正解はないし、どちらも助ける事が大切で諦めないことを聞き、最後まで本人と向き合えるようになっていきたいと思う。(20代・介護福祉関係)

【研修を受ける前と後で自分が変わったと感ずること】

- ・自分の中で消化できずにもやもやとしていたものが、研修を通して言語化することができた様に感じた。一歩踏み出していきたいと思った。(20代・介護福祉関係)
- ・多角的に物事を捉えようと思うようになった。(20代・介護福祉関係、学生)
- ・専門職の相談は、社会資源や福祉サービスを提供するだけでなく、ただ一緒に寄り添うことがその人にとって生きる力の力になると思えるようになった。(40代・行政関係)

【研修全体を通しての意見・感想】

- ・【福祉】について、改めて考える事が出来た二日間だった。日々のもやもやした思いが少し軽減した様な気がした。今後、現場に戻ってから活かしていきたいと思った。(20代・介護福祉関係)
- ・研修では、知識を増やすことができ、多くの話を聞くことができ勉強になった。グループの話し合いでは、他者の意見を聞くことで、一人一人違う意見を持っていたので色々と勉強になった。仕事でも第三の考えなどをもって望んでいきたいと思う。(20代・介護福祉関係)
- ・初めて対面での研修でとても刺激があり、有意義な時間だった。今後も様々な研修にも参加していけたらと良いと思う。(30代・介護福祉関係)

ウ 研修参加者（語り部養成）

【聴講プログラムについて】

- ・①「共生に求められるアダプテッド・スポーツの重要性」②「いのちに意味がある～私た

ちは何を大切にしてきたのか〜」、映像ともに心に響いた。映像は、特にこの仕事に携わる者として見せて頂き嬉しかった。(50代・介護福祉関係)

- ・基調講演は、あっという間に終わってしまった感がある。もう少し先生方のお話を伺いたかった。せめて、あと10分でもいいですから…。加地先生の取り組みは、すぐにでもやってみたいですし、奥田さんのプロジェクトは、もっと知りたいと思った。(50代・介護福祉関係)

【研修プログラムについて】

《セクションAについて》

- ・「言葉」のもつ意味、価値観、そしてバイアス、「違い」を理解し、誰もが「同じ」である為には、その「言葉」を聞いてコミュニケーションを図らなければならない。更に、それを考えさせるには何が必要なのか、大いに考えるきっかけになった。(50代・介護福祉関係)
- ・充実した内容だった。(30代・介護福祉関係)
- ・少しゆっくり考える時間があると嬉しかった。(40代・介護福祉関係)

《セクションBについて》

- ・本当に難しかった。自らを知るのは、怖さもあり、日々することのない作業でしたが、良い機会でした。(50代・介護福祉関係)
- ・普段考えない事をしっかり考えたり、意見交換が出来て良かった。自分の語りかけに、色々な見方を教えてもらえて良かった。(40代・介護福祉関係)
- ・頭の回転が、なかなか追いつかなかった。もう少し時間が欲しかった。(50代・介護福祉関係)

《セクションCについて》

- ・これだけ充実した研修だからこそ、今も想いを忘れぬためにも宣言することは、自分にとっても大切でした。(50代・介護福祉関係)
- ・私にとっては少し難しかったが、具体化するのはいと実感出来た。整理する機会もなかなかないので、貴重な時間だった。(50代・介護福祉関係)
- ・もう少しゆっくり取り組めたらと思う。(40代・介護福祉関係)

【研修を通して最も印象に残ったこと】

- ・「ただ一緒にいるだけ」色々あっても、この気持ちが必要だと思った。(50代・介護福祉関係)
- ・普段考える機会のない、福祉や共生社会について、改めて考えることができ、意見交換ができ、とても良い機会だった。(40代・介護福祉関係)
- ・参加者の方の深い意向に少しへこんだ。(40代・介護福祉関係)

【研修を受ける前と後で変わったと感じること】

- ・自分のこれまでの考えの枠が小さいものだと分かったり、言語化して伝えることの苦手さ

が発見出来た。実は何も変わっていなかったが、意識は変わったと思う。(40代・介護福祉関係)

- ・自分がどういう感情があったのか。何故自分はこう思ったのかというように、考える癖をつけていきたいと思った。(40代・介護福祉関係)
- ・福祉の原点を忘れたくないと思った。(40代・介護福祉関係)

【研修全体を通しての意見・感想】

- ・とても難しい研修だった。是非、園内に持ち帰り、広めたいと思うが、まだ自分の中で噛み砕けていない。時間がかかると思うが、何とか形にしていけたらと思う。(50代・介護福祉関係)
- ・本研修を受講してみて、一度や二度受けただけではいけない。繰り返し受講することで、自分にはない多くの価値観、考え方に触れる事ができたと気づいた。その位、本テーマは深いものと理解しましたので、今後も機会を見て、積極的に参加したいと思う。(50代・介護福祉関係)
- ・参加させてもらい本当に良かった。Zoom研修も多い中、やはりグループワークは良い。これから若いスタッフにも参加してほしい。(50代・介護福祉関係)

(4) 共生社会フォーラム in 福島

① プログラム

コース

共生社会フォーラムin福島は大きく2つのコースに分かれています。

【コース①一般参加】対象：一般(福祉職・学生含む) 表現活動鑑賞や基調講演、映像プログラム

表現活動グループの発表を鑑賞し、基調講演では共生社会の実現に向けて先駆的に取り組みを推進する実践者からお話をうかがいます。映像プログラムでは、「糸賀一雄」の思想と実践について学びます。

*1日目14:15までのプログラムに参加

【コース②研修参加】対象：福祉職・学生 共生社会における語り部等養成研修

津久井やまゆり園事件を契機に、福祉に携わる人々の資質や対話のあり方が問われています。対象別に2つの分科会にわかれ、共生社会の基本理念について考え、普及啓発のための語り部を目指すプログラムです。

*コース①に加え、2日間すべてのプログラムに参加

タイムテーブル

▶▶ 1日目 令和4年12月19日(月) ※コース①は、14:15まで

コース①・②対象	10:00 - 10:05	開会あいさつ
	10:05 - 11:00	表現活動 ブラジル打楽器演奏 HANA
	11:00 - 12:00	基調講演 「いのちに意味がある ～私たちは何を大切にしてきたのか～」 奥田 知志 氏
	13:00 - 14:15	映像 NHKスペシャル「ラストメッセージ この子らを世の光に(※)」
14:30 - 17:30 コース②対象	グループワーク研修①(第1分科会「福祉支援語り部」グループ/第2分科会「学生・新任者」グループ) いずれの分科会でも福祉の思想・普遍的価値の共有を目的として、基調講演や映像プログラムを題材に、個人の内面に向き合うワークとグループディスカッションを行います。	

▶▶ 2日目 令和4年12月20日(火) ※コース②の受講者のみ対象

9:30 - 12:00 コース②対象	グループワーク研修②(第1分科会「福祉支援語り部」グループ/第2分科会「学生・新任者」グループ) 第1分科会では、やまゆり園での事件を題材に、“生きる意味のない命がある”“障害者は社会に不幸をもたらすだけ”という考えに同調する意見などに返す言葉をもつためのワークを行います。第2分科会では、NHK Eテレ「バリバラ」の出演などで知られる玉木幸則氏とともに、“そもそも障害とはなんだろう?”をテーマに率直に語り合います。
13:00 - 15:00 コース②対象	グループワーク研修③(第1分科会「福祉支援語り部」グループ/第2分科会「学生・新任者」グループ) 第1分科会ではグループワーク研修①や②を踏まえて、それぞれが自らの職場に戻って語りの場を持つことができるよう、メンターのサポートを受けながらアクションプランを作成します。第2分科会では、グループワーク研修②の議論を引き継ぎながら、玉木幸則氏とともに、“学生一人ひとりが抱える生きづらさ”を言葉にしながら、“福祉=幸せの追求”や“そもそも人が生きること”について、向き合います。
15:00 - 16:00	全体共有・講評/まとめ・ふりかえり/閉会あいさつ

- ・開催日：令和4年12月19日（月）20日（火）
- ・会場：郡山市総合福祉センター（福島県郡山市）
- ・募集定員：84名（一般：60名/福祉職従事者：16名/学生・新任者：8名）
- ・参加人数：94名（一般：22名/福祉職従事者：9名/学生・新任者：8名/
講師：1名/関係者：39名・出演者：15名）
- ・共催：開催委員会：（社福）安積愛育園（社福）郡山コスモス会（特非）スケッチブック
（特非）オハナ・おーえんじゃー（特非）ぴいかあぶう
（特非）地域福祉ネットワークいわき（特非）ソーシャルデザインワ
ークス（一社）8色 郡山市障がい者基幹相談支援センター
（社福）ほっと福祉記念会

②レポート

〔共通プログラム〕

□表現活動：ブラジルの打楽器を使って演奏される22年の活動歴があるHANA（（社福）安積あさか愛育園・郡山市）のグループセッションがあった。コロナ禍で月2回の練習がリモートで行わなければならない等制約を受けていたが、この9月から対面での練習が出来るようになったとのこと。3年ぶりの人前での演奏で、最初は、メンバーみんなは緊張気味だったが、徐々に緊張がほぐれていき、会場参加者からのリクエストに応じて演奏する等、出演者と会場参加者との一体感あふれる楽しい演奏が披露された。



□基調講演：講師の奥田知志さん（NPO 法人抱樸理事長）から、二つの“時”の概念（クロノスとカイロス）の話があり、「支援には、何時から始まって何時で終わるといったものではないカイロスという感覚が必要。その日が来るまでは繋がり続けるしかない、というのが伴走型支援の考え方。解決型と伴走型は、支援の両輪で、両方とも大事。」と説かれ、『この子らはどんな重い障害を持っていても、誰と取り替えることのできない個性的な自己実現をしているものなのである。人間と生まれてその人なりの人間となっていくのである。その自己実現こそが創造であり、生産である。』という糸賀氏の言葉を紹介され、「その人がその人になるというのはカイロス。その時が来るのを待ちながら、その人がその人になっていく。その時に生まれる物語を我々は楽しみながら、お互い語っていく。」と説かれた。また、ホームレス支援をするなかで「人がもう一度生きよう、もう一度立ち上がろうと“その気になる”には何が必要なのか。答えは“人との繋がりだ”としか言いようがない。」という話があり、“どうでもいい命”と言わざるを得ない人生を歩んだ女性とご夫婦で寝食をともにする等伴走型支援をされた実例の紹介があった。次に、「国の社会保障は、現金給付か福祉サービス等を含む現物給付によって行われる。福祉サービスを担っているのは人。人との繋がりの中で物語が生まれる。まさに、国が提供した

そのお金と物を物語に変えられるか、というのが福祉現場の人の存在。だから語り部が必要。」という話があり、共生社会フォーラムの意義を「単に知識や技術を上げて、福祉職のプロフェッショナルをつくるという話ではなく、配られたお金や物を物語に変えていく福祉の世界の人をつくること」であると強調された。最後に、「もしもやまゆり園事件の犯人に会ったとしたら彼に何と言うのか。」という宿題が受講者に向けて出され、『お前はもう生きる意味がない、お前なんか死んでしまえ』と言いたいのは自然でよっぽど普通なのかもしれない。でもそれを言うと、かつて彼が言ったことを今度は自分が言うことになる。この答えのない問いの中で呻吟し続けていく、あるいは我々が現場の中で思想を学び、実践し、我々の出会いの中での物語を語り続ける。そこに本当に普遍的な価値とは何なのかということが見出されるのではないか。」という話で基調講演が終了した。

□映像：NHKスペシャル第6集「この子らを世の光に」の上映により、日本初の公的福祉施設である「近江学園」の設立に尽力した糸賀氏、池田太郎氏、田村一二氏らの取り組みが、今日の入所施設や地域での生活支援に受け継がれていることを紹介し、障害のある子どもたちと寝食を共にし、不断の研究と実践による考え方や言葉が、現代の福祉に通じる普遍的なものであることを学んだ。



〔研修プログラム〕

□学生グループは、8名の参加があり、バリバラレギュラーの玉木幸則さんと、とんがるちから研究所の近藤紀章さんが進行を務め、丹羽彩文さんが助言者として運営をサポートした。初日は、自己紹介からはじまり、続いて一般プログラムから得た学びや気づきを一人ずつ語り、疑問や違和感を意見交換。また、ディスカッションを通じて得られたことや、翌日に向けて「研修を受ける前との変化、研修で得られた学びや気づき」をワークシートに記入して振り返った。二日目は、中堅職員のディスカッションや救急対応を通して「やまゆり園事件」と「命の選別」について、最近気になる福祉的ニュースをふまえて「障害と福祉」、「福祉の普通」、「福祉で働くこと」というテーマでディスカッションした。普段、何気なく使っている言葉を掘り下げ、この仕事の意味を見つめ直した。また、玉木さんからのレクチャーやライフヒストリーの紹介を挟み、「何をもって共生社会と呼ぶのか？」というテーマで話し合われた。



□中堅以上の福祉職従事者を対象とする語り部養成研修には、福祉施設・サービス提供事業所の所長、管理責任者、サービス管理責任者、相談支援専門員等 9 名が参加した。密を避けるため 1 グループ 4 人～5 人の受講者に限定し、2 テーブルに分かれ、各テーブルに 1 名ずつメンターを配置した。メンターは、滋賀県（社福）六心会の奥村昭さんと宮城県（一社）宮城・仙台障害者相談支援従事者協会の太田勇樹さんがつとめ、下里晴朗さんと、とんがるちから研究所の竹岡寛文さんが進行した。また、実行委員会委員の久保厚子さんとWGリーダーの田中正博さんが助言者として運営をサポートした。

研修の導入として、言語以外のコミュニケーション手段で誕生の月日順に並ぶというアイスブレイクがあり、初日は、①基調講演等を見て感じたこと、共生社会とは何か等の個人ワークと模造紙とポストイットを使用してのグループ共有、その状況についての発表がグループごとに行われた。



翌日のセッションに向けて、やまゆり園事件を振り返り、様々な意見や価値観と向き合う時間を持ったあと、助言者の久保さんから「結婚や同棲するには不妊治療をしないとだめ、というニュースが流れている。“優生思想的な考え方はだめ”と今でも争点や議論になっているのに、いまだに普通にやっていることにショックだった。」「びわこ学園の初代理事長の岡崎先生が、職員から『こんなことをどうしたらいいんですか』ということを知ると、『本人さんはどう思っているのか、常に自分の中で確認し問いかけながら支援をしないとダメですよ、ということをおっしゃっていた。』というお話がありました。また、「親の中にも自分の子供よりも重いお子さんを見たときに、無意識に比べて可哀そうに思う差別的な意識がある。皆さんの中にも社会の中にも無意識の差別的な考え方がまだまだあると思う。だから、それをどう変えていくのか。共生社会というのは、なかなか難しい先の長い話ではあるが、無意識にある差別的な考え方を変えないと、本当の共生社会は訪れない。」「自分の中にも、そういう無意識の差別的な考え方があるということをしっかり受け止めながら、確認することが大事と思っている。明日はさらにちょっとややこしい、もやもやしたような思いをもちながら議論していただくことになる。」という熱いメッセージがあり、初日のセッションを終えた。



二日目は、②やまゆり園事件をどう受け止めるのか、全育連の声明への反応に対して各自が思うところをグループで共有するセッション③職場や地域で取り組む基本理念普及のアクションプランを各自が考え皆でブラッシュアップするセッションが行われた。



講評では、助言者の田中さんから「この共生社会フォーラムでは、福祉の思想に学び、実践し、語る人に、ということなので、いよいよ語る人になっていただく段取りとなる。この2日間、頭の中にいろんな情報を詰め込んだと思うが、これを是非思い切り吐き出していただく。私は、報道されている北海道江差町の社会福祉法人の人と『なぜ断種を迫ったのか』ということについて語りたい。何かあった時に、自分の価値観と照らし合わせて「これは許せない」というような時に伝えるということもあるが、今回の研修ではもう少しマイルドな感じで、いろんな人に自分が思っている価値観を伝えて共有したいといった設定で、身近な人に自分の思いを聞いてほしいというレベルでもいい。8月に、国連の障害者権利条約についての対日審査があり、強い言葉で「入所施設はやめてください。教育を分けてやるのをやめてください。」という勧告がでた。これは、教育の時点で子供の頃から分けてしまうと大人になっても分けて施設で暮らすことになり、山奥にある施設が多いので、社会の一員と言うには、なかなか難しい。そういう視点で分けるのが当たり前にしている仕組みは改めてください、ということが強く迫られたもの。「すぐに入所を廃止して特別支援学校も無しにしてください」ということではなくて、考え方として「一緒にいるのが当たりだ」ということをもっと強調してやれることをやってください、というのが今回の勧告。”特性に応じた支援と配慮”ということを積み上げてきており、そのことを社会の人に知ってもらうときに、糸賀さんの「この子らを世の光に」という言葉が有効。まさに一人一人に個性があって、それに応じた対応をすれば、光輝く存在、人としての尊厳が保たれる、ということが言われている。糸賀さんの「自覚者が責任者である」という言葉があり、是非それも持って帰っていただきたい。今日この場で研修を受けて「誰に何を伝えたくなっているか」という自分の中の気持ちに少し探りを入れて、話したいことから話し始めていただきたい。」というエールがあった。



フォーラムの閉会にあたって、地元開催委員会委員長の今泉俊昭さん（（特非）ソーシャルワークデザインワークス）から閉会の挨拶があり、フォーラム参加者とアドバイザーや地元福島の協力法人へのお礼と研修受講者への労いの言葉が述べられるとともに、「研修で様々な難しい話題に対して、各人がどんどん語れる人になっていくという点が印象深かった」という感想があり、全てのプログラムが終了した。

③アンケートによる感想・意見 （福島）

ア 一般参加者

【最も印象に残ったこと】

- ・ HANA の演奏が素敵だった。基調講演は、どんどん奥田先生の話に引き込まれた。小さい頃の生い立ちは、その後とても大きな影響がある。（50代・その他）
- ・ 奥田氏の人との繋がりという言葉が最も印象に残った。伴走型支援。繋がり続ける。横にいる支援。（50代・介護福祉関係）
- ・ 奥田氏の講演であった話の「問題を解決するだけでなく、繋がりを増やす支援」という言葉を聞き、改めて考えなおすきっかけになった。先を行くのではなく、隣に寄り添える支援者（人）になっていきたいと感じた。（30代・介護福祉関係）

【感想・意見】

- ・ 奥田先生の話は、また聞きたくなる程引き込まれた。また機会があれば、是非お願いしたい。（50代・その他）
- ・ 日々の関わりの中で、支援という言葉の圧を意識できず、「そのままじゃダメだ」と感じさせられた場面もあったのではないかと、非常に振り返る機会となった。「この子らを世の光に」の言葉の生まれた背景を知り、凄く考えさせられた。フォーラムを通じて出来た言葉や考え方がとても心に残った。（30代・介護福祉関係）
- ・ 60を過ぎて、福祉の仕事に関して知らなかったことが多く、改めて一つ一つ繋がりを大切

にすること。これからの人生、今日の共生社会のフォーラム参加を忘れることなく、生きて行こうと思う。(60代・介護福祉関係)

イ 研修参加者(学生・新任者)

【聴講プログラムについて】

- ・どのプログラムも、とても学ぶ事が出来る自分を成長させてくれるプログラムだった。特に奥田さんのお話は、もう少し聞きたかった。(20代・学生)

【研修プログラムについて】

《セクションAについて》

- ・経験をしているからこそ出る意見を聞けて、とても良かった。中堅研修を見学して、当時働いていた人たちの考えを知り、怖い思いだったり、違う教えを知ることが出来た。(20代・学生)
- ・緊張してしまって、話したいことがあまり言葉に出来なかった。(20代・学生)

《セクションBについて》

- ・やまゆり事件について、もう少し深掘して、他の人の意見も聞きたかった。(30代・相談員)
- ・障がい者差別について、考える機会となり、もっと意見を交わしたいと感じた。(30代・介護福祉関係)
- ・相模原事件は知っていたが、深く考える機会はなかったので、考えさせられる良い時間だった。(20代・学生)

《セクションCについて》

- ・基本的な概念なので深く考えることが少なかったが、基本的だからこそ考えをつめる必要があると思った。(20代・介護福祉関係)
- ・自分の仕事について改めて考えさせられ、混乱するくらい考える事が多く、大切なことについて再認識した。これも同様にもっと意見を交わしたいと思った。(30代・介護福祉関係)
- ・疑問をそのままにせず、発言して、助言をもらうことが出来た。(20代・学生)

【研修を通じて最も印象に残ったこと】

- ・命の選別について、選別されることがあっていいのか。また、選択肢について、障害のある方だけにあるのは平等でないという話が印象に残った。(20代・介護福祉関係)
- ・様々な人がいるが、何にも区別されことなく、みんな幸せになれる社会を作っていくこと、そういう仲間を増やせるように語っていく。(30代・介護福祉関係)
- ・玉木さんの「幸せになるための法則」にとっても納得した。(20代・学生)

【研修を受ける前と後で自分が変わったと感ずること】

- ・研修を受ける前は、漠然と考えていたことや疑問に思うことがなかったことも、研修を受けてより深く考える事が出来た。(20代・学生)
- ・言葉で表現することが苦手なのだが、今回研修を受けて素直に言葉にすることができ、成長出来たと思った。(20代・学生)
- ・周りに伝えたいと思うようになった。当事者の方が思っていることは何か、ご本人の立場になって考える意味が分かった。(20代・学生)

【研修全体を通しての意見・感想】

- ・とても自分にとって学び、考える事が出来る有意義な時間だった。言葉にすると書ききれないくらいあるので、二日目での学びを回りに語っていきたいと思う。(20代・学生)
- ・考えていくことの大切さを学んだ。向き合う、支え合うことが、とても必要な福祉の世界であると思い、とても良い時間を過ごせた。(20代・学生)
- ・様々な意見を聞き、自分の考えと向き合い、新しい価値観について考えることが出来た。貴重な経験が出来た。(20代・学生)

ウ 研修参加者（語り部養成）

【聴講プログラムについて】

- ・奥田さんのお話はとても良かった。一緒にいるだけでいい。伴走型支援の話をもっと聞きたい。(50代・介護福祉関係)
- ・糸賀一雄先生の考え、想いを、研修を通して知ることが出来て良かった。(30代・介護福祉関係)

【研修プログラムについて】

《セッションAについて》

- ・どんなところを共生している していないのか、具体的な例を挙げて行うのは、難しいと思った。捉え方で変わると思った。(40代・介護福祉関係)
- ・共生社会のことをじっくり考え、皆さんと共有、話し合うことが出来る時間をもらえて良かった。(50代・介護福祉関係)
- ・グループワークを通じて、視点の広がりがあり、頭も柔らかくなった。(30代・介護福祉関係)

《セッションBについて》

- ・考えがまとまらず、上手く文章にする事が出来なかった。皆さんの意見が聞けたことは、とても良かった。(50代・介護福祉関係)
- ・今までの問いかけについて、真剣に考えることをしてこなかったが、今回向き合う事により、語りかけが少しだが出来るようになった。(無記入)
- ・言葉は難しいと思った。これであっているのかモヤモヤし、それはどうなのかと、色々な感情と向き合う時間が楽しくもあり、厳しい。未熟な自分を見ることがあっても、なかなかない機会です、とても勉強になった。(20代・介護福祉関係)

《セクションCについて》

- ・考える時間がもう少し欲しかった。とても難しい内容だった。でも考えることが出来て良かった。(30代・介護福祉関係)
- ・アクションプランの作成は難しいが、考えることが出来る貴重な場となった。(30代・介護福祉関係)
- ・これが出来たら楽しいと思い、ウキウキしてしまった。(無記入)

【研修を通して最も印象に残ったこと】

- ・沢山の言葉が残っている。奥田さんの講演を、もっと聞きたかった。(40代・介護福祉関係)
- ・GWの語り部プログラム。(30代・介護福祉関係)
- ・共生社会の目指すことが何となくだが、自分の中で理解出来た。伴走型支援とクロノスという言葉についても考えさせられた。(30代・介護福祉関係)

【研修を受ける前と後で変わったと感じること】

- ・解決型から伴走型の支援をしたいと思ったこと。(40代・介護福祉関係)
- ・初心に帰る事が出来た。この仕事を改めて面白いと感じ、楽しんでいこうと思った。(無記入)
- ・共生社会についてあまり考えていなかったが、これからは少しずつ周りの方々に理解を出来るようにしたい。(30代・介護福祉関係)

【研修全体を通しての意見・感想】

- ・少人数の研修で、アドバイザーやメンター等も行き届いており、プログラムがよく練られていたので疲れたが、とても興味が湧く内容だった。(30代・介護福祉関係)
- ・準備シートへの記入から二日目終了まで気持ちの余裕が全くなかった。自分の中に落とし込む為の復習をしないと自分のものに出来ない。頑張る。(40代・介護福祉関係)
- ・仕事から離れて考える時間、皆さんと話をする時間を持てたことは、とても良い経験だった。今後は、研修でなくてもこのような時間を持てればと思う。(50代・介護福祉関係)
- ・是非地域の他法人の方にも、参加して頂きたい内容だった。(20代・介護福祉関係)

(5) 共生社会フォーラム in 佐賀

② プログラム

コース 共生社会フォーラムin佐賀は大きく2つのコースに分かれています。

【コース①一般参加】対象：一般(福祉職・学生・新任者含む) 基調講演や映像プログラム

表現活動と基調講演では共生社会の実現に向けて先駆的に取り組みを推進する実践者の演奏・講演を聴講します。映像プログラムでは、日本の障害福祉の父と言われる「糸賀一雄」の思想と実践について学びます。

*1日目12:30までのプログラムに参加

【コース②研修参加】対象：福祉職・学生・新任者 共生社会における語り部等養成研修

津久井やまゆり園事件を契機に、福祉に携わる人々の資質や対話のあり方が問われています。対象別に2つの分科会にわかれ、共生社会の基本理念について考え、普及啓発のための語り部を目指すプログラムです。

*コース①に加え、2日間すべてのプログラムに参加

タイムテーブル

▶▶ 1日目 令和5年1月27日(金) ※コース①は、12:30まで

27日は会場にて福祉事業所によるお弁当やパンなどの販売を行います。ぜひお求めください！

コース①・②対象	9:30 - 9:40	開会あいさつ
	9:40 - 10:10	表現活動 Vivimos (ヴィヴィモス)
	10:10 - 11:20	映像 NHKスペシャル「ラストメッセージ この子らを世の光に(※)」
	11:20 - 12:30	基調講演 「いのちに意味がある ～私たちは何を大切にしてきたのか～」 奥田 知志 氏
コース②対象	13:30 - 16:30	グループワーク研修①(第1分科会「福祉支援語り部」グループ/第2分科会「学生・新任者」グループ) いずれの分科会でも福祉の思想・普遍的価値の共有を目的として、基調講演や映像プログラムを題材に、個人の内面に向き合うワークとグループディスカッションを行います。

▶▶ 2日目 令和5年1月28日(土) ※コース②の受講者のみ対象

コース②対象	9:30 - 12:00	グループワーク研修②(第1分科会「福祉支援語り部」グループ/第2分科会「学生・新任者」グループ) 第1分科会では、やまゆり園での事件を題材に、“生きる意味のない命がある”“障害者は社会に不幸をもたらすだけ”という考えに同調する意見などに返す言葉をもつためのワークを行います。第2分科会では、NHK Eテレ「バリバラ」の出演などで知られる玉木幸則氏とともに、“そもそも障害とはなんだろう?”をテーマに率直に語り合います。
コース②対象	13:00 - 15:00	グループワーク研修③(第1分科会「福祉支援語り部」グループ/第2分科会「学生・新任者」グループ) 第1分科会ではグループワーク研修①や②を踏まえて、それぞれが自らの職場に戻って語りの場を持つことができるよう、メンターのサポートを受けながらアクションプランを作成します。第2分科会では、グループワーク研修②の議論を引き継ぎながら、玉木幸則氏とともに、“学生一人ひとりが抱える生きづらさ”を言葉にしながら、“福祉=幸せの追求”や“そもそも人が生きること”について、向き合います。
	15:00 - 16:00	全体共有・講評/まとめ・ふりかえり/閉会あいさつ

- ・日時：令和5年1月27日（金）28日（土）
- ・会場：アバンセ [佐賀県共同男女参画センター]・佐賀市文化会館（佐賀県佐賀市）
- ・募集定員：84名（一般：60名/福祉職従事者：16名/学生・新任者：8名）
- ・参加人数：137名（一般：58名/福祉職従事者：20名/学生・新任者：10名）
講師：1名/関係者：33名・出演者：15名
- ・共催：開催委員会：（社福）はる （社福）スプリングひびき （社福）ともしび
（社福）まごころ会 （一社）碧生会 （一社）ミラクル5
（特非）佐賀中部障がい者ふくしネット

②レポート

[共通プログラム]

□表現活動：音楽好きの仲間たちで結成されたバンド Vivimos ヴィヴィモスによるオリジナルソング「しあわせのうた」、本フォーラムでも耳なじみのある「ワンダフル世界」およびオリジナルソング「素敵な僕ら」の演奏があり、エネルギッシュでパンチの効いた演奏と一人ひとりの個性が輝くダンスにより、出演者と会場参加者とが一体となった楽しいパフォーマンスが披露された。



□映像：NHKスペシャル第6集「この子らを世の光に」（2007年3月放送）の上映により、日本初の公的福祉施設である「近江学園」の設立に尽力した糸賀氏、池田太郎氏、田村一二氏らの取り組みが、今日の入所施設や地域での生活支援に受け継がれていることを紹介し、障害のある子どもたちと寝食を共にし、不断の研究と実践による考え方や言葉が、現代の福祉に通じる普遍的なものであることを学んだ。



□基調講演：講師の奥田知志さん（NPO 法人抱樸理事長）から、最初に、共生社会フォーラムの目的は「福祉の思想に学び、実践し、語る人、物語る人、語り部を作ること」という確認があり、障害者、高齢者、ホームレス者等の「者別」でものを見る大元にある「制度」に当てはめて人を見るのではなく、「一人一人の人に、生きていく上での価値や物語があり、丁寧に繋がりながらお互いが語りあう関係」の大事さの話があり、「支援技術も大事だが、福祉の現場で本当に大事なものは“人と人との繋がり”であり、そこに物語が生まれ、その人そのものの“生きる意味”がある」と説かれた。そして「相模原事件では“生

きる意味のない命”だと犯人が言い切ったが、逆に我々が、その人が生きてきた“意味＝物語”をきちんと受け取ってきたのか。」と問われた。さらに、長年のホームレス支援から「人間をその気にさせ立ち上がる動機には、2つのパターン（内発的動機と外発的動機）があるが、死んだ方がいいと追い詰められた人が、もう一度立ち上がるには、自分の中から湧いてこない外から差し込んでくる光である外発的動機が必要」と説かれた。また、作家の高橋源一郎さんとの対談で語られた「人の繋がりが言葉を生み、物が物語化していく」（ホームレスの人達が残飯を『餌』と言い、炊き出しを『弁当』と言い分ける）ことが紹介され、福祉現場の職員に求められるのは「お金や物（国の制度＝現金給付か福祉サービスを含む現物給付）に人が繋がることによって物語を生み出す役割」と強調された。ここで、糸賀氏の『生涯寝たきりであっても、きっとそこには僅かな充実があるに違いない。人間と生まれて人間となっていく、万人の道を歩んでいる。不断の自己表現があり、個性化がある。』という言葉を紹介され、「“個性化”というものは、人と人との繋がりの中に紡がれる言葉でしか生まれない」と解説された。さらに、会場の受講者に向けて「犯人に死んでしまえと言うのは、彼が言ったことを今度はこっちが言うことになる。そうではない言葉はあるのか」という問いが出された。最後に、糸賀氏の「生命あるものは輝いている。それは一片の感傷でもなく、文学でもない。現実だ。」という言葉の紹介があり、「現実が物語を作っていく。物語をどうするかというのが、共生社会フォーラムのメインテーマ。」「一人一人との間の繋がりが、一人一人の物語を生んでいく。これがやまゆり園事件で“意味がない”と言い切った彼に対する抵抗運動・カウンターカルチャーである。」と、共生社会フォーラムの視座を明らかにされた。

[研修プログラム]

□学生グループは、新任者9名と学生1名が参加し、バリバラレギュラーの玉木幸則さん、とんがるちから研究所の近藤紀章さんおよび御代田太一さんが進行し、滋賀県（社福）グローの斎藤誠一さんが助言者として参加した。初日は、共有プログラムを振り返り、「縦の発達／横の発達」というテーマや基調講演にあった「物語」という言葉の意味について意見交換した。最後に、中堅グループに合流し、相模原殺傷事件を当時どう受け止めたのかを聞いた。2日目は、「最近の気になる福祉ニュース」のシェアからスタート。社会の大きな文脈の中で「福祉」や自分の仕事を捉え直したうえで、「障害とは？」「福祉とは？」を語りあった。最後は、相模原殺傷事件をどう受け止め、何をそこから考えたか、というディスカッションへ。玉木さんの問題提起を起点にした事件当時の救急救命体制等について、それぞれの思考を深めた。「二日間を通して「SDGs」「共生社会」「オリンピック／パラリンピック」「合理的配慮」等多くのキーワードについて、その言葉の真の意味を考え、深く掘り下げる時間となった。



□中堅以上の福祉職従事者を対象とする語り部養成研修には、福祉施設・サービス提供事業所の所長、管理責任者、サービス管理責任者、生活支援員、職業指導員等 20 名が参加した。密を避けるため 1 グループ 4 人の受講者に限定し、5 テーブルに分かれ、各テーブルに 1 名ずつメンターを配置した。メンターは、鹿児島県（社福）ゆうかりの水流源彦さん、片岡保憲さんおよび下里晴朗さんの 3 名と、事前研修や他フォーラムへの研修受講等万全の準備で臨まれた地元佐賀県の（社福）ともしびの野口直子さんおよび（社福）スプリングひびきの宮原里美さんの 2 名がつとめ、埼玉県（社福）清心会の岡部浩之さんと、とんがるちから研究所の竹岡寛文さんが進行した。また、実行委員会委員の久保厚子さんとWGリーダーの田中正博さんおよび丹羽彩文さんが助言者として運営をサポートした。

研修の導入として、言語以外のコミュニケーション手段により誕生の月日順に並ぶ、という恒例のアイスブレイクでグループメンバーの関係づくりから始まり、初日は、①基調講演等を見て感じたこと、共生社会とは何か等の個人ワークと模造紙と付箋を使用してのグループ共有、その状況についての発表が行われた。



宮原グループ



野口グループ



下里グループ



片岡グループ



水流グループ



翌日のセッションに向けて、やまゆり園事件を振り返り、様々な意見や価値観と向き合う時間を持ったあと、久保さんから受講者に向けて、「親の中の意識しない心の奥底の方に差別的意識がやっぱりある。ということは、皆さんの中にもひょっとすると気づいていないだけで有るのではないかなと思う。私たちは自分の中にも「そういうものがあるかもしれない」ということを自覚しながら、それでもこの人たちと共に歩む。この人たちと『支援をしながら一緒に生きていく』ということを感じていただきたい。そして実行していただきたい。寄り添っていただきたい。」「本人の身になって考える、寄り添って考える、試行錯誤しながら探って行って本人に丁度いい支援を見つけましょう、ということが私たちに必要とされていて『本人を見る私たちの目が問われている』と思う。是非、明日はやまゆり園のことを通しながら、モヤモヤしつつ、そういうことに気づき、次からの支援に生かすとともに、自分が感じたことを周りの人に広めていただきたい。」という熱いメッセージがあり、初日のセッションを終えた。

二日目は、②やまゆり園事件をどう受け止めるのか、全育連の声明への反応に対して各自が思うところをグループで共有するセッション③職場や地域で取り組む基本理念普及

のアクションプランを各自が考え皆でブラッシュアップするセッションが行われた。



講評では、助言者の田中さんから「この二日間いろいろな経験を通して自分の中でモヤモヤはしたが、それなりにこういった価値観が自分にとっては大事なんだな、ということを得たのではないかなと思う。糸賀さんの言葉で言えば『この子らを世の光に』ということが、障害で割り引かれないように一人一人の命を大事にするということで、人間の尊厳を大事にする、その人を尊重するということになる。そういったことを自分は掲げていきたいというような柱でもいい。『自覚者が責任者』という言葉もある。気がついた不正を育成会の立場ではやまゆりの時も声明を出したが、この間の北海道の江差町のカップルに断種を迫るときも出した。直近では昨日も共同通信が発表したけど、農園ビジネスということで雇用率を買ってしまうような、共生社会とは少しずれるようなことは直すべきだというような視点で声明文を発した。国連からも昨年の夏に日本の方向性は間違っていないということで2つ厳しい指摘があった。“入所施設はなくす方向で検討し、教育も分けてやるのはやめなさい”ということであった。これらも共生社会とは反する方向であるから、ということからの指摘だと思う。ただ、直ちに入所施設を壊せとか、特別支援学校を潰せというような過激な話ではなく、“共生社会に向かうにはどうしたらいいかをみんなで考えましょう”というような感覚だったので、私たち自身にも返されている問なのではないかなと思う。皆さんも、自分の中にある価値観を探り、大事にして、みんなに伝えていく場を検討していただきたい。」というエールが送られた。



フォーラムの閉会にあたって、地元開催委員会の（社福）はる理事長の福島龍三郎さんから、フォーラム参加者とアドバイザーや地元佐賀の協力法人へのお礼と研修受講者へ

の労いの言葉が述べられるとともに、「日本では命大切にすることは当たり前だとそれまでも思ってきたのが、相模原事件でそうじゃないということを突きつけられた。当たり前だと思っていたことが当たり前にあるわけではなく、“命を大切にする”ということを意識し、きちんと話し、語り、しっかりと発信していかないと、“命を大事にする”社会は出来ない。この共生社会フォーラムは、そのような機会だった。“命を大事にする”ことと同じように、例えば、“今日を大事にする”とか、“人を大事にする”とか、“自分を大事にする”、そういうこともただ黙って実現するわけではない。やはり、みんなで語ったり、その話しをする、そういうことをやって初めて実現していく。この二日間、疲れたと思うが、命とか、人とか、自分のこととか、色々考えていただいた。それ自体が自分にとっても、事業所にとっても、社会にとっても、すごく大事なこと。どうかこれからもいろんな人たちと話をしたり、自分の中で考えたり、吸収したりして、利用者の人たちも自分も大事にしてもらいたい。これからも、福祉という素敵な仕事をみんなと一緒に頑張っていきたい。」という閉会の挨拶があり、全てのプログラムが終了した。

③アンケートによる感想・意見（佐賀）

ア 一般参加者

【最も印象に残ったこと】

- ・人間が人間らしく、人として生きるということは何なのか？その人のもつ光をどう見つけ、伸ばしていくことが出来るか？自分に何が出来るか、とても考えさせられた。今後、日々の生活の中で自問自答しながら、少しずつ答えを見つけていければと思う。（40代・介護福祉関係）
- ・親であり、支援者であるが、自分の立ち位置や今後どうすべきかを考えていたが、「語り部になる」の言葉は、とても印象に残った。今後、仕事をする時のよいアドバイスとして受け止められた。（50代・介護福祉関係）
- ・奥田氏の講演はとても分かりやすく、気づかされる事が沢山あった。（30代・無記入）
- ・ヴィヴィモスの音楽が力強く、楽しかったことに驚いた。奥田さんのテレビを見て、関心があったので良かった。（70代・一般）

【感想・意見】

- ・今回限られた人の参加だったが、一人でも多くの方がこの研修してもらえると願う。私にとって福祉の仕事は、大変な時もあるが不幸ではなく、生きがいという事が分かった。今後も続けて欲しい。（60代・介護福祉関係）
- ・講演や映像、共に丁度良い時間配分だった。ただ寒かった。（40代・一般）
- ・参加して、視野が広がったような気がした。とても有意義な時間を過ごせた。同様の機会があれば、是非参加したい。（30代・一般）

イ 研修参加者（学生・新任者）

【聴講プログラムについて】

- ・奥田さんの講演を初めて聞いたが、とても良かった。(40代・介護福祉関係)
- ・もっと色々な方の話を聞きたい。一日通してでも良いのではないか。色々な立場の方の経験談、考えを聞いてみたい。(40代・無記入)

【研修プログラムについて】

《セクションAについて》

- ・午前中のプログラムをもとにそれぞれの現場での感覚で感想を交えて、自分の見聞を広げる良い機会だった。もっと時間があれば、一つの議論をより深く話し合えた気がした。(20代・介護福祉関係)
- ・相模原事件の犯人の意見を聞いた奥田さんの話を聞いて、とても興味深かった。(20代・無記入)

《セクションBについて》

- ・事件の内容は、人が襲われたことや病院が受け入れを拒否したことなど、聞いているとしんどいのだが、当時福祉の現場で働いていた先輩方がどう感じ、利用者さんの変化など知ることが出来た。自分だったらどうしたかを考えられた。職場でもして欲しい。(40代・無記入)
- ・こういう事件を防ぐために何が出来るかみんなで考えていくこと、この事件に限らず、考え続けることの重要性を強く感じた。(30代・介護福祉関係)
- ・その当時は気づかなかったことにも気づかされた。(40代・介護福祉関係)

《セクションCについて》

- ・福祉、障害、共生とは何か、本当の意味を自分は理解できていなかったと思った。「共生社会」が特に印象的で、最初の分離が一生の分離と言われたのが、自分の過去にも思い当たることがあり、教育の場から変えていかなければと思った。(40代・無記入)

【研修を通じて最も印象に残ったこと】

- ・玉木さんが話された、障害は、その人の状態を指すものでなく、何かしにくいと感じる社会の仕組みを指すということを押さえられていて、とても腑に落ちた。(40代・無記入)
- ・玉木さんのパラリンピックの話が、本当に目から鱗だった。(40代・就労支援)
- ・一日目の午前中、表現活動や映像、基調講演の三つが最も印象強く、参考になった。(30代・介護福祉関係)
- ・縦の成長と横の成長。(40代・介護福祉関係)

【研修を受ける前と後で自分が変わったと感ずること】

- ・支援の中で利用者さんとの関係性に悩むことが多々あり、同じ立ち位置から見れていたか、考えられていたか、反省した。(40代・無記入)
- ・一日目と比べると、二日目、人前でスムーズに話すことが出来た。また、一日目よりも二日目は、研修会の中に入っていった感じがした。より福祉に興味が湧いてきた。(30代・

介護福祉関係)

- ・情報を鵜呑みにせず、自分なりに捉え直したり、違和感を流さずによく考えてみるように意識するようになったと思う。(20代・介護福祉関係)
- ・与えられたことに対して、素直に受け止めていた事に少し疑問をもって、考えられる様になったと思った。(40代・介護福祉関係)

【研修全体を通しての意見・感想】

- ・ディスカッションの機会が多かったのは良かった。(20代・介護福祉関係)
- ・もっと研修を受けてみたいと思った。働くにあたって、今日の研修で学んだことを活かして仕事をしていきたい。まず、事業所で研修のことについて聞きたいと言っていた職員に伝えたいと思う。(30代・介護福祉関係)
- ・とても勉強になった。また機会があれば、参加したい。(20代・介護福祉関係)

ウ 研修参加者（語り部養成）

【聴講プログラムについて】

- ・ヴィヴィモスの演奏から元気をもらった。(30代・介護福祉関係)

【研修プログラムについて】

《セクションAについて》

- ・共生社会について、どちらとも言えないことの大切さ、怖さ、気づき。(50代・一般)
- ・深く共生社会について考えたことがなかったので、実際に考えてみると、まだまだ出来ない事が沢山あるなと思った。(20代・介護福祉関係)
- ・共生社会という普段意識しない言葉を改めて考え、これからの福祉に繋げていこうと思った。(20代・介護福祉関係)
- ・自分の考えを伝える難しさを感じつつ、頷いてもらったり、共感してもらい、発信して良かったと思えた。グループ内のメンバーの話も沢山聞いた。(40代・介護福祉関係)

《セクションBについて》

- ・グループの方や、他のグループの方のリアルな問いかけがとても良かった。語りかけは難しかったが、有意義な時間となった。(20代・介護福祉関係)
- ・自分じゃ出てこない、良い語りかけ、言葉に出会えた。(40代・介護福祉関係)
- ・自分自身と向き合っていくことで、どんなことに疑問を思ったか？どんなことでモヤモヤしたか？どんな考え方で向き合っていくのか、他の方と意見を交えながら出来て、良い機会と思った。(30代・介護福祉関係)

《セクションCについて》

- ・どんな風に語っていくのか、プラン作成には時間が足りない感じがしたが、とても良い時間だった。(30代・介護福祉関係)
- ・アクションプランの発表はあっても、良かったのではと思う。(50代・一般)

- ・もう少し時間があれば、より具体的で実現できるプランが作成出来ると思う。(40代・介護福祉関係)

【研修を通して最も印象に残ったこと】

- ・「社会とは、健全に傷付くための仕組みである」という奥田氏の言葉。(50代・一般)
- ・奥田さんの「大変だけど面白い」、「大変だけど楽しい」、「生きる事に意味がある」(50代・介護福祉関係)
- ・自分の内面の感情を知る事。ヴィヴィモス。奥田知志氏の基調講演。(40代・介護福祉関係)
- ・こんな研修があるんだと思えるぐらいの密度だった。自分にこんなに向き合う研修は、初めてだった。(40代・介護福祉関係)

【研修を受ける前と後で変わったと感ずること】

- ・自分の違和感を、自信をもって話せるようになった。(20代・介護福祉関係)
- ・自分が職場で語っていく立場にならなければと感じた。(40代・介護福祉関係)
- ・共生社会という事への意識が変わった。(30代・介護福祉関係)
- ・これから結論が出なくても良い。モヤモヤして良いという気持ちを持てると思った。(40代・介護福祉関係)

【研修全体を通しての意見・感想】

- ・是非定期的に行って下さい。(40代・介護福祉関係)
- ・やや書類が多い気がした。グループの力を借りるところと、自身と対話するところ。書く時間ばかりなので、静かに瞑想する時間があっても良いと思った。(50代・一般)
- ・とても有意義な研修だった。人の意見に触れる研修というのは、あまり受けたことがなかったので、とても良かった。(30代・介護福祉関係)
- ・一度だけでなく、二度三度参加するとより分かると感じた。(40代・介護福祉関係)
- ・今日の語り部では、メンターの方を始め、メンバーさんに恵まれた。とても良い研修だった。(50代・介護福祉関係)

5. 参加状況およびアンケート結果

(1) 参加者について

会場に会場して参加した人は、283 人（一般参加者 174 人、研修参加（中堅）68 人、（学生・新任者）41 人）※運営関係者は、延べ 214 人参加

【会場参加者数】

開催地	日程	参加者				運営 関係者
		計	一般	中堅	新任等	
静岡	9 月 29 日～30 日	62	37	18	7	32
滋賀	11 月 22 日～23 日	39	22	9	8	43
広島	12 月 5 日～6 日	55	35	12	8	35
福島	12 月 19 日～20 日	39	22	9	8	55
佐賀	1 月 27 日～28 日	88	58	20	10	49
合計		283	174	68	41	214

※上表のほか、実践報告・交流会で 8 名が Web 参加した。

一般参加者は、12 都府県（青森、福島、茨城、埼玉、東京、静岡、滋賀、京都、奈良、広島、福岡、佐賀）から、県・市町村等の官公庁 24 人（13.7%）、福祉施設・事業所 118 人（67.4%）、一般・その他 33 人（18.9%）であった。

【参加者の属性】

○ 一般参加者

属 性	静岡	滋賀	広島	福島	佐賀	合計
官公庁（国・県・市・町等）	8	9		4	3	24
福祉施設・事業所	15	11	34	16	42	118
一般	7	2	1	1		11
その他（不明含む）	7			1	13	21
合 計	37	22	35	22	58	174

○ 研修参加者（福祉支援語り部コース）（福祉職等研修会）

属 性	静岡	滋賀	広島	福島	佐賀	計
官公庁（国・県・市・町等）	1		2			3
福祉・医療事業所	17	9	10	9	20	65
合 計	18	9	12	9	20	68

○ 研修参加者（学生・新任者コース）

属 性	静岡	滋賀	広島	福島	佐賀	計
学生		1		3	1	5
新任者	7	7	8	5	9	36
合 計	7	8	8	8	10	41

(2) アンケート結果（当日参加者）について

プログラムの成果を検証するために、当日の参加者にアンケートを実施した。

【一般参加者】

時間配分に関し、表現活動及び基調講演・シンポジウム・映像について 75%～90%の参加者が「ちょうどよかった」又は「短かった」と回答している。また、プログラムの内容に関し、表現活動、基調講演・シンポジウム・映像については約 80%以上の参加者が、「とてもよかった」又は「よかった」と回答した。一般参加者に対するアンケート結果において全体的に高い評価であった。

(時間配分)	長かった		ちょうどよかった		短かった		無回答	
表現活動	2	1.7%	92	80.0%	15	13.0%	6	5.2%
基調講演・シンポジウム	3	2.6%	69	60.0%	30	26.1%	13	11.3%
映像	6	5.2%	84	73.0%	4	3.5%	21	18.3%

(内容)	とてもよかった		よかった		あまりよくなかった		よくなかった		無回答	
表現活動	84	73.0%	22	19.1%	1	0.9%	0	0.0%	8	0.0%
基調講演・シンポジウム	89	77.4%	12	10.4%	1	0.9%	0	0.0%	13	11.3%
映像	73	63.5%	19	16.5%	1	0.9%	0	0.0%	22	19.1%

【研修参加者：中堅】

時間配分に関し、表現活動及び基調講演・シンポジウムについて 85%以上の参加者が「ちょうどよかった」「短かった」と回答している。グループワーク研修の時間配分については、セクション A で 85%以上、セクション B で 70%以上の参加者が「ちょうどよかった」と回答しているが、セクション C では、「ちょうどよかった」が約 50%となった。また、プログラムの内容に関し、基調講演・シンポジウムについては、90%以上、表現活動・映像については 85%以上の参加者が、また、研修プログラムのセクション A と B においても 90%以上の参加者が「とてもよかった」又は「よかった」と回答した。研修参加者に対するアンケート結果において全体的に高い評価であった。

(時間配分)	長かった		ちょうどよかった		短かった		無回答	
表現活動	0	0.0%	59	86.8%	6	8.8%	3	4.4%
基調講演・シンポジウム	1	1.5%	51	75.0%	15	22.1%	1	1.5%
映像	2	2.9%	62	91.2%	2	2.9%	2	2.9%
(研修プログラム)								
セクション A	0	0.0%	58	85.3%	8	11.8%	2	2.9%
セクション B	2	2.9%	48	70.6%	16	23.5%	2	2.9%
セクション C	1	1.5%	37	54.4%	29	42.6%	1	1.5%

(内容)	とてもよかった		よかった		あまりよくなかった		よくなかった		無回答	
表現活動	40	58.8%	20	29.4%	0	0.0%	0	0.0%	8	11.8%
基調講演・シンポジウム	55	80.9%	8	11.8%	0	0.0%	0	0.0%	5	7.4%
映像	38	55.9%	22	32.4%	0	0.0%	0	0.0%	8	11.8%
(研修プログラム)										
セクション A	37	54.4%	27	39.7%	0	0.0%	0	0.0%	4	5.9%
セクション B	43	63.2%	22	32.4%	0	0.0%	0	0.0%	3	4.4%
セクション C	29	42.6%	32	47.1%	0	0.0%	0	0.0%	7	10.3%

【研修参加者：学生・新任者】

時間配分に関し、表現活動については95%の参加者が、基調講演・シンポジウム、映像について85%以上の参加者が「ちょうどよかった」と回答している。グループワーク研修のセクションの時間配分については、「ちょうどよかった」と80%以上の参加者が回答している。また、プログラムの内容に関し、表現活動、基調講演・シンポジウム、映像については90%以上の参加者が、研修プログラムのセクションCにおいては100%の参加者が、セクションAとBについては90%以上の参加者が「とてもよかった」又は「よかった」と回答した。研修参加者に対するアンケート結果において全体的に高い評価であった。

(時間配分)	長かった		ちょうどよかった		短かった		無回答	
表現活動	0	0.0%	38	95.0%	0	0.0%	2	5.0%
基調講演・シンポジウム	1	2.5%	34	85.0%	3	7.5%	2	5.0%
映像	1	2.5%	35	87.5%	2	5.0%	2	5.0%
(研修プログラム)								
セクションA	1	2.5%	33	82.5%	4	10.0%	2	5.0%
セクションB	0	0.0%	37	92.5%	2	5.0%	1	2.5%
セクションC	1	2.5%	35	87.5%	3	7.5%	1	2.5%

(内容)	とてもよかった		よかった		あまりよくなかった		よくなかった		無回答	
表現活動	30	75.0%	7	17.5%	0	0.0%	0	0.0%	3	7.5%
基調講演・シンポジウム	33	82.5%	5	12.5%	0	0.0%	0	0.0%	2	5.0%
映像	31	77.5%	7	17.5%	0	0.0%	0	0.0%	2	5.0%
(研修プログラム)										
セクションA	27	67.5%	12	30.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	2.5%
セクションB	29	72.5%	8	20.0%	1	2.5%	0	0.0%	2	5.0%
セクションC	32	80.0%	8	20.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

(3) アンケート結果（福祉職従事者）について

受講後、職場や地域で研修（問いかけ・語りかけ）等の実施の有無、可能性についてアンケートを行った結果、回答者は、多数の人が「実施済み」、「予定・計画がある」又は「意向・希望がある」との回答であった。今年度のアンケートでは、

- ・市自立支援協議会の部会で30名を対象に、「共生社会というものについて考える」というテーマで、「糸賀先生の語録」「やまゆり園事件の資料」を事前に読み、NHKスペシャルを手配したので視聴し、模造紙に「共生社会と考えるコト・モノ」を書き出していくグループワークを行う予定。“答え無し”でいろいろ話すことを目的とする。
- ・職場内の職員（15名、スタッフ2名）を対象に、「いろんな角度から物事を見てみよう！」というテーマの研修を施設内のホールで実施予定。
- ・職場内の職員（参加者20名を2回に分けて）を対象として、「共生社会のあり方について」というテーマの研修を職場活動室で実施予定。
- ・内定者（参加者6名、スタッフ4名）を対象に、内定者研修「地域の一員として」というテーマの研修を行う予定。直近として内定者向けに研修内のいちプログラムとして取り組むが、今後も経験年数や階層別を考慮しながら段階を踏んでつないでいきたい。
- ・地域一般や対人援助職（参加者20名、スタッフ8名）を対象に、「共に生きる〇〇

郡へ～相模原障害者殺傷事件を振り返る～」というテーマでの研修を行う予定。
 ・職場内の職員（参加者 6 名、スタッフ 6 名）を対象に、「頭の中」というテーマで、事業所内での職員のミーティングで、ワークを行う予定。
 等の報告が寄せられており、普及・啓発の取り組みが今後、職場や地域へ広がることが期待される。

回答者数 146 人（令和元年度～4 年度累計 令和 5 年 3 月 10 日現在）

受講後の研修(問いかけ・語りかけ)等の実施済み・予定あり		未定		対象(複数回答)		
実施済み	予定・計画あり	意向・希望あり	意向・希望なし	職場内職員	地域一般	その他
42	42	53	9	52	11	13
28.8%	28.8%	36.3%	6.2%	68.4%	14.5%	17.1%

・受講後に「問いかけ・語りかけ」の取り組みを実施した人	42人(回答者の28.8%)	}	137人(回答者の93.9%)
・「問いかけ・語りかけ」の取り組みを具体的に予定・計画している人	42人(回答者の28.8%)		
・「問いかけ・語りかけ」の取り組みの意向・希望を持つ人	53人(回答者の36.3%)		
・「問いかけ・語りかけ」の取り組みの意向・希望がない人	9人(回答者の6.2%)		

(受講後アンケート集計結果：参考資料 2)

(受講後のアクションに関するアンケート一覧表：参考資料 3)

V 事業の成果と課題

1. 事業の成果

(1) 開催委員会の組織化による地域主体のフォーラム開催

- 初年度（平成 30 年度）は、実施体制が単一であったことから、幾つものフォーラムを同時並行で準備を進めることの困難性をはじめ、参加者募集に十分な時間が掛けられなかったことや事業コストが増嵩したこと等の課題が浮き彫りになった。
- それらの課題への対応として、開催二年度（令和元年度）から、「地域主体のフォーラム開催に向けた実施体制の構築」を目標に掲げ、各ブロックにおいて組織した開催委員会がフォーラムの実施者となり、これらに対して全国的な支援組織（事業受託者）がフォローするという厚みのある実施体制を敷くこととし、今年度（令和 4 年度）もその体制を踏襲した。
- なお、一昨年度（令和 2 年度）以降は、新型コロナウイルス感染症の拡大により、広域的な人の移動を前提とするフォーラム開催が難しい状況であった。そのため、開催委員会の組織は、分野や立場を網羅した総合型ではなく、主として、過去のフォーラムでメンターとして開催を支えてきた施設・事業所を運営する法人の職員等で構成される実践型の組織にする形で実施した。今後においても、企画・準備・実施を推進する母体となる開催委員会を各地域で組織することで、地域主体のフォーラムが開催され、事業の一層の普及に結び付くことが期待できる。

(2) プログラムの改良

- 初年度（平成 30 年度）にWGと実行委員会での検討を経て構成したプログラム（①表現活動、②基調講演、③ラストメッセージの映像と講演、④グループワーク研修）を基本に今年度（令和 4 年度）も開催した。

④のグループワーク研修で中堅向けでは、①から③のプログラムやテキスト資料を参考にしつつ、独自に開発したワークシートを用いて、多様な見方・解釈がある「共生社会」をテーマに掘り下げ、「わからないこと・もやもやすることを言葉であらわす」、「感情が沸き上がった源泉を言語化する」、「尋ねられると答えに悩む問いを考える」、「答えがない問いに向き合い、語りかけを言語化する」という「自己の内面に向き合う」プログラムとなっている。

研修全体のプログラムは、研修の都度、メンターや全体進行役の意見・感想に基づき、「どのようにして“対話の仕組み”をつくるのか」を命題にしてワークシートの修正や進行の改良を重ねており、昨年度（令和 3 年度）からは、二日目の「語りかけ」を演習するセッションで「語りかけ練習シート」を 3 種類用意した。これは、これまでのグループワークで受講者から提出された特徴的なものから考えていく必要があるという意見を踏まえて改良したものである。今年度（令和 4 年度）は、これまでの受講者やメンターの実例をもとに例題を二つ入れ替えた。

- 一昨年度（令和 2 年度）に新型コロナウイルス感染予防対策として実施した 1 日

開催プログラムについては、参加者から「受講決定してから研修当日までの期間が短く YouTube を見たり、ワークシートを作成する時間が短かったので、日常業務と並行して行うのが大変だった。」「興味深い内容ばかりだが、とにかく資料と映像のボリュームがあり過ぎて、短時間で事前課題を挙げねばならず、じっくり見聞きし、よく考える時間が取れなかったことが非常に残念。(要約)」という意見等があったため、昨年度（令和 3 年度）と今年度（令和 4 年度）は、従来の 2 日開催を基本とした。

(3) 事業の波及効果

一般参加者を対象とした普及啓発と併せて、中堅以上の福祉職従事者や事業経営者を対象として共生社会の基本理念を施設・事業所内、さらには地域で実践し語り広める人を養成するという二つのねらいがあったが、研修受講後に何らかのアクションを起こしたのか、あるいは起こそうとしているのかを確かめるため、毎回、受講後のアンケートを実施している。

その結果、回答のあった 146 人（うち 107 人が昨年度（令和 3 年度）までの回答）のうち、調査時点で既に 42 人（うち 36 人が昨年度（令和 3 年度）までの回答）が職場や地域で何らかのアクションを起こしていた。また、42 人（うち 37 人が昨年度（令和 3 年度）までの回答）が具体的な計画がある、53 人（うち 30 人が昨年度（令和 3 年度）までの回答）が今後取り組む意向があるという回答があった。

このように、多くの研修受講者が研修の成果を持ち帰って、実地に活かし、あるいは活かそうとしており、事業の波及効果が既に現れていることが確認できた。

(4) 事業の波及効果を高めるための中核的人材の確認

当初、不安と戸惑いがあったメンターも、ブロック別研修を積み重ねるなかで、事業の意味合いを理解し、研修カリキュラムの運用やワークシートの活用手法を着実に身に付けている。

今年度（令和 4 年度）の基本方針である「地域主体のフォーラム開催」の中軸として、各地域の中堅研修でメンターを務めた者は 18 人であった。そのうち 12 人（67%）がこれまでの経験者で、より経験を深め力量を高めて助言者や全体進行役としてステップアップした者もいた。また、初めてメンターを務めた者は、6 人（33%）となっており、“語り部”活動の担い手の裾野が広がったことが確認された。初めての人も熱意をもってグループワークを進行し、個人のワークにおいても相談・助言役となるメンターとしての役割を果たした。

受講者からは、「少人数の研修で、アドバイザーやメンター等も行き届いていた。」「メンターの方を始め、メンバーさんに恵まれた。とても良い研修だった。」「共生社会、一言では伝えきれない奥の深さを知れた。グループの方、メンターのおかげで楽しく参加出来た。」「メンターやアドバイザーの方のおかげで、ゆったりとした気持ちでグループワークに参加できた。」といった感想が寄せられた。

今後、これらのメンターが各ブロックにおいて、意欲ある研修受講者や他のメンターとともに、本事業で開発した研修カリキュラムやワークシートを駆使しながら普及啓発の語り部活動を実践する中核的人材になることが期待される。

2. 課題と対応策

(1) 共生社会等に関わる多方面の分野との協働・連携

一般参加者のうち福祉事業所に所属する人が 67.8%（昨年度（令和 3 年度）58.0%、一昨年度（令和 2 年度）59.5%、開催二年度（令和元年度）59.2%、初年度（平成 30 年度）70.7%）であったが、研修参加者については、95.6%（昨年度（令和 3 年度）100.0%、一昨年度（令和 2 年度）84.4%、開催二年度（令和元年度）90.9%、初年度（平成 30 年度）97.2%）が福祉事業所に所属していた。比率は、初年度（平成 30 年度）よりも一般参加者で 2.9 ポイント低く（昨年度と比べて+9.8 ポイント）、研修参加者で 1.6 ポイント低かった。（昨年度と比べて△4.4 ポイント）ただし、今年度（令和 4 年度）も、新型コロナウイルスの影響もあり、一般参加者数は限定的で、研修は、狭い意味での福祉の枠組みに留まったと言える。

実践報告・交流会では、「地域にある社会福祉法人として地域づくりというのが大切。地域のことや人のこと等を色々考えていきたい。」という意向が表明され、また、「研修で立てたアクションプランは、今迄の関係者しか参加しなかったような啓発ではなくて、一般市民向けにわかりやすい敷居の低い啓発活動ができればいいな」という内容で、実際に何回か実施した。次に、精神障害の方や発達障害の方に登壇していただき、自分自身のリカバリーストーリーを語ってもらった。そこから発展して視覚障害の方や身体障害の方にも登壇していただいて、「更に住みよい街になる為にはどうしたらいいか」という内容で、年に 3~4 回行っている。」という報告があった。また、全体フォーラムでは、メンター・助言者経験者のシンポジストから「障害者雇用をきっかけにしながら、企業の方々に共生社会の理念・思想を理解いただけるような取り組みができないか、動き始めている。企業にとってどんなメリットがあるのかと問われることが多いが、何を語っていけるか、企業の方が求めていることにうまくマッチするような伝え方、提供の仕方はどのようなものかを考えている。」という発表があった。

共生社会等の基本理念等の普及啓発の出発点が福祉分野であったとしても、共生社会に関わるのは、生きづらさのある方々に関わる様々な分野であり、福祉分野以外の分野にまで共生社会の基本理念が共通のものとして浸透することが肝要である。

(2) 開催地域の拡大

これまで、ブロック内の幅広い関係者で構成された開催委員会を組織化した地域においては、その組織に対して国・事業受託団体が一定の関わりを持つことにより、地域主体のフォーラムが展開されることが期待できたが、一昨年度（令和 2 年度）以降、新型コロナウイルス感染症の拡大の影響により、その流れは一時停滞を余儀なくされた。

今後は、感染拡大の収束状況や With コロナの研修形態を見極めつつ、実績のある地域を中心にした開催だけでなく、ブロック内の他地域においても、既存の開催委員会のネットワークの活用や新たな実施体制の構築等により、共生社会フォーラムを開催できる機会を増やし普及啓発のスピードを速めていく必要がある。

なお、開催二年度（令和元年度）の実行委員会で「開催地域や開催実行委員会の役割について標準化するべき」、「開催委員会へ再委託する予算が限られており、経費の内容

を検討すべき」という趣旨の提案を受けており、今年度（令和 4）も開催委員会の役割の明確化と標準経費の設定を行い、各地域の協力法人とも収支バランスを前提に開催協議を行っており、今後も継続的に行う必要がある。

(3) 研修プログラムの改良

参加者から一昨年度（令和 2 年度）に「これから取り組む内容について説明や進行が主催者本位だった。具体的でわかりやすい指示やポイントの復唱は、より大切にしてほしい。」「説明が早くて要点をつかみ損ねることが多くあり、追いつかなくなってしまった。」といった意見があり、昨年度（令和 3 年度）も「時間が限られているため適切な配分だと思うが、もう少し意見交換の時間が欲しかった。」「問いについて精査しないで事例検討やクレーム対応になってしまうと感じた。ディスカッションを深める際にメンターの方の協力がもう少し欲しかった。」という感想があったことから、プログラムの改良に反映し、進行上も配慮しているが、引き続き、福祉支援語り部研修プログラムの改良や運営方法の改善について検討し、実施する必要がある。

(4) 研修受講者のモチベーションの維持・向上

研修受講者の多くが受講後、各自の職場や地域で何らかのアクションを起こしたか、今後起こす意向ありというアンケート結果であったが、多忙な日常業務に埋没して継続が難しい状況に置かれていたり、一緒に取り組む仲間がおらず職場や地域で孤立している等、アクションを起こしにくい環境にあるという報告も届いている。そのような状況であっても、研修受講者が継続的にアクションを起こせるよう、その実践をフォローし、モチベーションを維持・向上するための実践報告会や交流会等の機会があることが求められる。

そのことから、開催二年度（令和元年度）に全体フォーラムのプログラムの一つとして交流集会（ミニシンポジウムとフリーな情報交換会）を開催し、一昨年度（令和 2 年度）以降、今年度（令和 4 年度）も、全体フォーラムのプログラムに全国各地で実践している受講経験者やメンターが集う「実践報告・交流会」をプログラムに加えて開催した。いずれも WEB 開催となったが、時間や移動の制約が少なく感染予防の観点や参加のしやすさではプラス面を感じる一方、一体感や手ごたえ感の物足りなさ、人となりを知る機会の面ではマイナス面もあると感じられたことから、より良い開催方法を検討する必要がある。

(5) メンターの“語り部”活動への支援

福祉支援語り部としての実践者は、意識の高い研修受講者に可能性があるばかりではなく、メンターとして参加したメンバーに大いに期待できることが、今年度（令和 4 年度）の研修でも確認できた。

しかし、メンター自身が、“語り部”として社会活動に踏み出すことができるためには、自身の自覚のみでは難しく、共生社会フォーラムを経験した者同志の繋がりを維持・強化する必要があるため、力量を高め合うための情報共有基盤の整備や、共生社会フォーラムに継続して参画できるための配慮、語り部活動の意欲が高まる交流会の定例開催等、

各人による主体的な活動への支援があることが望ましい。

(6) 開催時期の適切な設定

開催二年度（令和元年度）は、共生社会フォーラムのスタートが8月で、2月までに月1回～2回のペースでの開催となったため、応募受付が錯綜する等事務的に混乱したことから、「円滑なフォーラムの開催のために、月1回以下のペースで開催する」という対応策を提示し、一昨年度（令和2年度）は、遅くとも6月にはフォーラムをスタートできるよう各種の準備を始める予定であった。しかしながら新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、結果として9月下旬のスタートとなり、さらには10月に4会場でのミニフォーラムの開催が集中し、受付等の混乱や受講者決定の遅れ、事前学習期間の短さ等多くの不都合が認められた。昨年度（令和3年度）以降は、感染拡大の状況を踏まえて、早い時期からWGを立ち上げ、開催時期の検討、受講者等から指摘のあった研修プログラムや運営方法の改良、地元協力法人との協議、開催委員会の開催調整等に取り組んだ結果、当初計画では、より適切な開催時期の設定ができた。

今後とも、新型コロナウイルス感染に関して、拡大状況や感染法上の位置づけの見直しの動向等を考慮しつつ、適切な開催時期の設定が望まれる。

VI 今後の事業のあり方について

前章で掲げた「共生社会等に関わる多方面の分野との協働・連携」、「開催地域の拡大」、「研修プログラムの改良」、「研修受講者のモチベーションの維持・向上」、「メンターの“語り部”活動への支援」、「開催地域・時期の適切な設定」の6つの課題を解決するための方策として、以下のように、国と民間法人・組織の役割と機能を段階的に見直すことが考えられる。

i. 初年度の実施体制（平成30年度、実施済み）

- ・国が普及啓発事業の主体となり、民間法人へ事業を一部委託
- ・受託法人が事務局を担い、WGメンバー、地元法人等の協力を得て事業実施①
研修プログラムの開発
 - ②研修ツール（研修テキスト・テキスト資料・ワークシート）の開発
 - ③地域フォーラムと全体フォーラムの開催

ii. 二か年目～五か年目の実施体制（令和元年度～令和4年度実施済み）

- ・引き続き、国が普及啓発事業の主体となり、民間法人へ事業を一部委託
- ・受託法人が支援組織の事務局を担い、地域の実施組織に業務を一部委託
 - ①多分野との協働・連携の試行（大学との連携）
 - ②地域主導の基盤づくり（開催委員会の組織化）
 - ③研修受講者の活動支援（事後フォロー：実践報告・交流機会の提供）
 - ④メンターの活動支援（事前研修の開催・交流機会の提供）
 - ⑤研修プログラムの充実
 - ⑥研修ツールの改良（研修テキスト・テキスト資料・ワークシート）
 - ⑦地域フォーラムと全体フォーラムの開催

iii. 五か年目以降の実施体制案

- ・引き続き、国が普及啓発事業の主体となり、民間法人へ事業を一部委託
- ・受託法人が支援組織の事務局を担い、地域の実施組織に業務を一部委託
 - ①多分野との協働・連携による展開（経済界、教育等との連携）
 - ②地域主導の展開（地域主体を応援または共催するフォーラムの開催）
 - ③研修受講者の活動支援（実践報告・交流機会の提供 等）
 - ④メンターの活動支援（事前研修の開催・専用WEBサイトによる情報共有 等）
 - ⑤研修プログラムの充実・改良
 - ⑥研修ツールの改良（研修テキスト・テキスト資料・ワークシート）
 - ⑦全体フォーラムの改良

iv. 将来的な実施体制

・自治体および民間法人・組織が普及啓発事業の主体となり、国が一定支援

- ①研修の制度化の調査・研究
- ②多分野との協働・連携の確立
- ③研修受講者およびメンターの活動支援
- ④研修プログラムおよび研修ツールの改良・開発
- ⑤地域主体のフォーラム開催への間接的支援（情報提供 等）
- ⑥全体フォーラムの開催

参考資料1 メンター・助言者・全体進行者 参加状況

		静岡フォーラム				滋賀フォーラム				広島フォーラム				福島フォーラム				佐賀フォーラム					
		9月29日(木)・30日(金)				11月22日(火)・23日(水)				12月5日(月)・6日(火)				12月19日(月)・20日(火)				1月27日(金)28日(土)					
		1日目 午前	1日目 午後	2日目 午前	2日目 午後	1日目 午前	1日目 午後	2日目 午前	2日目 午後	1日目 午前	1日目 午後	2日目 午前	2日目 午後	1日目 午前	1日目 午後	2日目 午前	2日目 午後	1日目 午前	1日目 午後	2日目 午前	2日目 午後		
中堅職員グループ																							
久保 厚子 (一社)全国手をつなぐ育成会連合会 会長		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
田中 正博 (一社)全国手をつなぐ育成会連合会		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
1	水流 源彦 (社福)ゆうかり																	○	○	○	○		
2	岡部 浩之 (社福)清心会 さやかグループ 法人本部	○	全体進行								○	○	○	○	○	○			○	全体進行			
3	丹羽 彩文 (社福)昂	○	○	○	○	○	全体進行								○	○					○	○	
4	下里 晴朗 (社福)ほっと未来SOUZOU舎	○	○	○	○	○	全体進行				○	○	○	○	○	全体進行				○	○	○	○
5	片岡 保憲 (NPO)脳損傷友の会高知青い空					○	○	○	○	○	○	○	○					○	○	○	○		
6	川西 大吾 (社福)旭川荘					○	○	○	○	○	全体進行												
7	太田 勇樹 (一社)宮城・仙台障害者相談支援従事者協会													○	○	○	○						
8	大平 眞太郎 (社福)グロー 法人事務局	○	○	○	○	○	○	○	○					○	○	○	○						
9	齊藤 誠一 (社福)グロー ひのたに園					○	○	○	○									○	○	○	○		
10	奥村 昭 (社福)六心会													○	○	○	○						
11	林原 愛 (社福)遊歩	○	○	○	○																		
12	木庭 由香 (社福)清和会	○	○	○	○																		
13	倉 信一 (社福)広島市手をつなぐ育成会									○	○	○	○										
14	近藤 直子 (社福)平成会									○	○	○	○										
15	壇上 雅紀 (社福)中国新聞社会事業団									○	○	○	○										
16	角田 芳郎 (社福)柏学園									○	○	○	○										
17	野口 直子 (社福)ともしび																	○	○	○	○		
18	宮原 里美 (社福)スプリングひびき																	○	○	○	○		
計		6	6	6	6	6	6	6	6	8	8	8	8	6	6	4	4	7	7	8	8		

学生・新任者グループ

1	玉木 幸則 (一社)兵庫県相談支援ネットワーク	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
2	御代田 太一 (社福)グローひのたに園	○	○			○	○	○	○									○	○	○	○
	近藤 紀章 (特非)とんがるちから研究所	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

全体進行

	竹岡 寛文 (特非)とんがるちから研究所	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
--	-------------------------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

参考資料 2 受講後アンケート集計結果

共生社会フォーラム福祉支援語り部養成研修（福祉職従事者対象）受講後における「問いかけ・語りかけ」の実施（予定）の有無、意向・希望の有無等についてアンケート調査を受講者に対して行った。

1. 回答者数 146 人（令和元年度～4 年度累計 令和 5 年 3 月 10 日現在）

2. 集計結果

受講後の研修(問いかけ・語りかけ)等の実施済み・予定あり		未定		対象(複数回答)		
実施済み	予定・計画あり	意向・希望あり	意向・希望なし	職場内職員	地域一般	その他
42	42	53	9	52	11	13
28.8%	28.8%	36.3%	6.2%	68.4%	14.5%	17.1%

3. 実施・予定の例（令和 4 年度実践報告・交流会での発表事例）および助言

○熊本県 社会福祉法人三気の会 今池さん（2021 年度熊本フォーラムを開催ほか）

・大きなテーマとして「地域づくり」というのを、もうこの数年自分で掲げてきている。「障害がある・ない」はさておきというところで。この間、サッカーが強い大津高校というのがすぐ近くにあり、先ほど言った子供食堂の企画で、プレミアリーグという高校生の試合があったときに、おにぎりを 300 個差し入れした。そういう福祉施設の取り組みから他のところを巻き込んでいって自分たちが地域をつくっていく。

・創設者等から昔の話聞いていると、やっぱりどこもそうだと思うが、私財を投げうって地域の批判浴びながらやられてきたところが結構多い。熊本地震の時に法人設立 30 年ぐらいの節目だったので、地域にお世話になってきた分を地域に返していく。地域が過疎化とか高齢化してきたので、法人が地域をつくっていくというなかで、障害がある方をどんどん巻き込んでいく。障害があるなしに関わらず巻き込んでいく等、そういうことを今細々とやっている。B 型でパン屋等しているのが、販売の仕掛けでそういう事を頭に入れながらやっているところなので、少しずつ広めていきたい。

○北海道 社会福祉法人慧誠会 佐藤さん（2021 年度十勝/帯広フォーラムに参加）

・皆様の話を聞いていて、市民の方と色々な話ができたらいいなという事をすごく思った。意外にそういう機会が無いなと思ったので、そういうことを考えた。

○北海道 社会福祉法人慧誠会 福山さん（2021 年度十勝/帯広フォーラムに参加）

・共生社会について疑問を持ち続けることと、今池さんがおっしゃったような「色んな人を巻き込んで地域をつくっていく」というのがいいなと思った。私共のだいち（十勝障害者就業・生活支援センター）も、「地域づくり」を大きな目標を掲げているので、これからも頑張っていきたい。

○滋賀県 株式会社グランデ 野間さん（2021 年度滋賀フォーラムに参加）

・地元の自立支援協議会の中で研修の場を持てたらいいと思うのが一つ。できたら来年度に実現したい。それとほんとうに夢っぽい話、なんとなくふわっと思うだけだが、うちの放課後等デイサービスに子供さんがいっぱいいるので、そこに地元の爺ちゃん婆ちゃんが遊びに来てくれるようなイメージを持っている。

○新潟県 （福）上越つくしの里医療福祉協会 山口さん（2020 年度新潟フォーラムに参加）

・出来れば、教育機関、学校とかにお邪魔して一緒に考えながら色々やれたらいい。一緒にお子さんと地域でイベントが運営できたらいいと思う。

○滋賀県 草津市立障害者福祉センター 白波瀬さん（2021 年度滋賀フォーラムに参加）

・12 月で定年となる。定年後は地域で福祉の事業所に所属せず、障害のある方に関わろうと思っていた。しかし、市立の福祉センターで基幹相談や地域生活支援拠点、自立支援協議会や地域の福祉のネットワークづくりを担当し、重要な時期にきている。センターの職員と一緒にチームの力を地域全体に繋げていける仕事をやりたい。

○熊本県 社会福祉法人清和会 木場さん（2021 年度熊本フォーラムほかに参加）

・地域にはたらきかけ、地域と一緒に何かをする時に、利用者さんが何かの役割を担うようなことをしていきたい。守られる存在ではなくて自分たちにも何か役割があるような取り組みを地域と一緒にしていきたい。

○群馬県 国立重度知的障害者総合施設のぞみの園 四方田さん（2021 年度群馬フォーラムに参加）

・私の施設は、群馬県高崎市にあるが、住んでいるところは埼玉県。施設の中で研修等ができれば、と思っていたが、自分の住んでいるところでも、地域に公民館もあるので、地域の人たちとそういうお話ができればと、思う。

〔助言〕

・大平（助言者）：難しい問題だとは思うが、要は、生産性のようなことを軸に考えるのはとても大事。ただ、生産性というものが善か悪かのような考え方でいくと、なかなか答えはない。医療モデルと社会モデルのような言葉もあるが、あれも医療モデル VS 社会モデルではなくて、どうバランスをとるかということだと思う。

・企業等でも、やはりその人の力をぐんぐん引き出しながら生産性を上げよう、といったところで頑張られている。頑張られている企業さんもあれば、そこに障害のある人がいればいいんだ、くらいの感じでやっているところもある。単純にそこだけ比較すると、生産性というところも視点におきながらやってらっしゃる企業さんのほうが、より進んだ取り組みをされている場面もあったりする。これは答えが出ない一つの例。そういうこともあるので、生産性を考えるのが駄目かということ、そういうわけではない。我々がみんなでやっていこう、考えていこう、このような事のバランスをどうとっていくのかがとても大事と思う。

・今、糸賀一雄記念財団と一緒に仕事をしており、「一般企業の方角けにこの共生思想のよ

うなものをどう広げていけるのか」という取り組みをやり始めている。そういったところにしっかりと働きかけて理解が少しでも広まっていけば、より一般の人たちにも伝わりやすい「何か」というものができるのではないかなと思うので、私としてはそこに取り組んでいきたい。

・片岡（助言者）：皆さんの話を聞いて、改めてまた先ほど言われていた生産性とか効率性という話については、自分なりに考えてみたいと思う。

・今日のこの会場で行われたシンポジウムでは、奥田さん等が糸賀一雄先生の言葉の引用をされており、その中で、「人間と生まれてそれなりの人間となっていくのである」という言葉を引用されていた。解決に向けての方法論とか支援とか、いわゆるテクニカルな話ではなく、その根幹に根づく思想とか、そういったものをしっかり考えていくことはすごく重要と話されていた。

・その話を受けて、玉木さんが、『なっていくのである』という言葉で奥田さんすごく強調されていて、いい言葉だと言われていた。そこには共感できたが、その「なっていく」為に、やはり全員が自分事として想像を膨らませる必要がある。ある種これも「その人になる」というか「その状況に自分になってみる」ということに引かかるなと思いながら聞いていたところ。そういう根幹をしっかり話しあっていくことは、今後も絶対大事だと思った。

・もう一方で、いつもの NHK スペシャルの糸賀先生のビデオメッセージも今日流れていて、何回も何十回も見ている。改めて見て、ちょっと言葉を選ぶのは難しいが、あのナレーションはすごく大切なメッセージだと改めて思った。あのナレーションのあり方とか構成のあり方が、自分が二十歳ぐらいの時とかに見たら、どう思ったんだろうなっという事を、二十歳の自分になってみて考えた。もしかしたらちょっと重たいなと感じたかも、こんな責任の強い仕事・世界に足踏み入れるのか、なんかちょっとドキドキするな、ということも感じたかもしれない。

・そういう意味では、障害がある人とか、生きづらさを感じている人になってみるという想像を膨らますことも大切なのだろうが、昔の自分、若かった頃の自分等になってみて想像を膨らませて考えることも大事。やっぱりこの共生社会フォーラムに、自分なりの今後のあり方についての話ではあるが、ちょっとずらして笑うような場面を設定する事や、自分たちが主催するイベントに、もうちょっと面白味みたいなエッセンスをふりかける事がどうやったら出来るんだろう、と今後考えてみたい。

参考資料3 受講後のアクションに関するアンケート一覧表

※福祉支援語り部（中堅職員）研修 受講後の実施予定（受講後1か月の調査への回答）

令和元年度～令和4年度

（アンケート回答時：実施済み）

NO	参加地域	実施年月日	語りの対象	内容・感想	参加人数	場所	備考
1	埼玉	令和元年8月25日	20代の看護師 経験の浅い保育士	寝たきりになった高齢者や発達障害のある子どもたちに対する思いや悩みなどを話す機会を設けた。 アールブリュットの作品集やYou-tubuで湖南ダンスワークショップ"しがのイチオシ"などを見ていただき、共生とはどんな社会かをそれぞれ考える時間をもつことができた。			
2	埼玉	令和元年9月21日	事業所内の職員	【ワークB-1】を行った。事前に相模原障害者施設殺傷事件に関する市民の声を読んでもらうなどしてから、グループワークを行った。 それぞれ職員も事件や自分自身について考える機会となった。	参加者13名	事業所内	
3	埼玉	令和元年9月10日	事業所内の職員	昼食を一緒に食べながら、和やかな雰囲気の中で意見交換や共生社会フォーラムで学んだことを話した。 支援についてや虐待についてなど、様々な話題を話してきた。今後もこのような機会を続けていきたい。	参加者6名	事業所内	
4	埼玉	令和元年8月23日	職場内の職員 地域一般	「一番近い人と考える」	参加者15名 スタッフ5名	施設	
5	埼玉	令和元年8月29日					（研修受講の感想） 普段の業務の中で、じっくりと他の職場の方と事件について話す機会がなかったので、貴重な体験をした。研修を通じて事件に向き合うことができた。
6	埼玉	令和元年8月24日	職場内の職員				（研修受講の感想） 本当に深く学べる機会となり、計画・実現（企画・実施）して下さった皆様に感謝です。
7	埼玉	令和元年9月17日					
8	鳥取	令和元年11月24日	地域一般	「障がいを持っている人がどんな働きをしているか、工場見学してみよう」	参加者20名 スタッフ3名		自治子供会との取り組み
9	鳥取	令和元年11月9日10日	地域一般	「福祉をかける「アート化」セミナーin〇〇2019」	参加者40名 スタッフ20名	〇〇市文化センター	次に開催するセミナーの予定もある。もう少し小さい規模のものも開催したい。
10	兵庫	令和元年12月15日	職場内の職員		参加者20名	職場内 部門別	外部からの講師もお願いし、5・6月に予定している。 50年前キャンセルになっているので、〇〇の地でなんとか糸賀一雄先生の理念と思想を伝える機会を設けたい。
11	兵庫	令和元年12月25日	職場内の職員	研修発信として開催した。	参加者21名	職場内	
12	岩手	令和2年1月28日	職場内の職員	OJT研修 共生社会について（伝達研修） 伝達研修後に、各支援員室にDVDを置く。（共生社会に関する動画を各職員に見てもらう）	参加者5名 スタッフ1名	職場内	
13	岩手	令和2年1月20日					

NO	参加地域	実施年月日	語りの対象	内容・感想	参加人数	場所	備考
14	岩手	令和2年1月31日	職場内の職員	受講内容の伝達研修(共生社会をみんなで考える)	参加者9名 スタッフ2名	職場内	所内研修として毎年定例的に開催したい。 内容については相模原事件関連や他の共生社会に関すること。
15	長崎	令和2年1月20・21・23・24・28日	職場内の職員	研修内容を発信をして、皆で考える。	参加者20名	職場内	生きることの大切さ、命の重さについて再確認。限られた時間でコミュニケーションを図ることができるか。
16	長崎	令和2年1月20日	職場内の職員	研修発信として開催した。	参加者10名	職場内	
17	長崎	令和2年2月18日	職場内の職員	研修報告	参加者7名	事業所内	
18	長崎	令和2年2月12日	職場内の職員	「〇〇〇 共生を語る」	参加者11名	事業所内	参加者から「難しかった」との意見があったのでわかりやすい発表の仕方を勉強したい。
19	岡山	令和2年1月25日	職場内の職員	「ちょっとだけゴミ拾いしてみよう」	参加者(入居者)4名 スタッフ2名	事業所周辺	活動中にすれ違う地域の人からの視線を感じる。スタッフが共生社会の意識を持った関わり方ができていたかなど、今後は相互で確認する振り返りの期間を持つことにする。
20	岡山	令和2年2月26日	職場内の職員	人権について考えるフォーラムin〇〇	参加者14名 スタッフ9名	事業所内	(開催趣旨) グループディスカッションを通して障害のある人達の「生命」をしっかりと受け止め「存在の意味」に対して自分の言葉で言語化する力を育成することを目的とする。
21	岡山	令和2年2月21日	職場内の職員 保護者	共生社会の実現とやまゆり園			(開催趣旨) 育成会の声明に対しての意見を知り、今の障害者への理解を知り、これからどのように共生社会を招くか模索する。
22	鹿児島	令和2年11月7日	同僚	社会福祉士の同僚とランチをしながら「相模原障害者施設殺傷事件」について共有	参加者4名		(本人感想) 「問いかけ・語りかけ」の取り組みになっていたかは疑問
23	鹿児島	令和2年10月1日	職場内の職員	「なりきってみよう」	参加者8名 スタッフ8名	事業所内	自分以外の人の思いを知ることで優しい気持ちになれた。 (参加職員の感想) 普段は、行動だけを観察し利用児がなぜそうしたのか。なぜそう言ったのか。ということまで考えていなかった。
24	宮城	令和2年11月11日					詳細は確認中
25	新潟	令和3年1月7日	職場内の職員	地域住民の気持ちになる	参加者5名 スタッフ1名	職場内	
26	千葉	令和3年1月19日	沖縄県警察	障害がある方が届け出や相談のために警察署を訪問した際などに対応する場合の配慮すべき事項等について	参加者31名 スタッフ1名 (警察内研修担当)	警察学校	フォーラム参加前から依頼があった研修。条例等の紹介から障害特性を理解し、合理的配慮の仕方について学ぶ内容となっている。
27	鹿児島	令和2年11月20日	職場内の職員 就労継続支援事業に関わる職員	「共生社会を考える」	参加者13名 スタッフ2名	〇〇YMCA	鹿児島フォーラムでの研修の短縮版で実施した。各グループで情報をシェア、話し合う時間に余裕をもって進めた結果、共生社会についての着地点はそれぞれ異なったものの、満足感と達成感が見られた。
28	鹿児島	令和3年1月20日	職場内の職員	「共生社会と聞いて 思い浮かぶこと」	参加者3名 スタッフ3名	オンライン	

NO	参加地域	実施年月日	話りの対象	内容・感想	参加人数	場所	備考
29	千葉	令和3年2月27日	職場内の職員	相模原事件を振り返り、グループワークをして、自分の意見、これからできること等を話し合った。また、当事者の方がやまゆり園を出て、一人暮らしをするドキュメントを動画研修とした。		事業所内	
30	宮城	令和3年1月25日					
31	宮城	令和3年1月26日	職場内の職員	「研修報告会 共生社会フォーラム」	参加者15名	事業所内	一度の研修会では、伝えたい内容を伝え、参加者同士で話し合うには時間が足りないと思った。研修後に、職員から「こういう研修をやりたいかった」と言われたこともあり今後も継続したい。
32	新潟	令和3年3月12日	地域一般	「こころのバリアフリートーク」	来場者 21名 登壇者 4名 スタッフ 8名	駅前広場 〇〇	(添付資料あり)
33	帯広	令和3年10月28日	娘さん(17歳)の友達	「やり直しがきく人生」	参加者2名 スタッフ1名	娘さんの 友達の自 宅	子どもなりに考え、子どもなりに悩んでモヤモヤしてくれていました。
34	熊本	令和3年12月13日	職場内の職員	研修報告	参加者10名 スタッフ10名	職場内	
35	滋賀	令和3年12月20日	職場内の職員	「共生社会と呼べる状況、呼べない状況についてそれぞれの意見をポストイットに書き上げる」	参加者12名	法人会議 室	共生社会という言葉はよく耳にするが、共生社会とはどのような状態なのかについては職員間の考えが異なり、意見を交わすことにより職員にとって大きな勉強となったようである。
36	静岡	令和4年11月11日	職場内の職員	「共生社会について語り合おう」	約50名	法人内	研修の際に考えたテーマ、対象とは異なるが、研修で学んだことを職員にも広めたいと思い職場内で実施した。時間は30分と短かったが共通理解が持てたと思う。
37	広島	令和4年12月10日 令和5年1月13日	職場内の職員	「脱・高級レストラン！目指せ！フードコート」	参加者6名 スタッフ6名	法人内	月一度のミーティングの際に実施。参加者の許可を得てアンケート回答用紙を添付。
38	福島	令和5年1月11日	職場内の職員	「気になる児童いますか？」	参加者5名 スタッフ5名	事業所内	話し合いの準備として、テーマに沿ったコンセプトを整理し挙げてもらうことで、それぞれの“自分はこうしたい。こうなってほしい。”ということが伝わりやすく、共有しやすかった。“研修中のルール”を大切にすることができた。
39	福島	令和2月1日					今後も、「問いかけ・語りかけ」を実施していきたい。
40	佐賀	令和5年2月10日	職場内の職員	「共生社会フォーラムに参加して語りかけとは」	参加者8名	事業所	
41	広島	令和5年1月21日	職場の職員	「グループホームは共生社会と呼べる？呼べない？」	参加者12名 スタッフ12名	公民館	(添付資料あり)

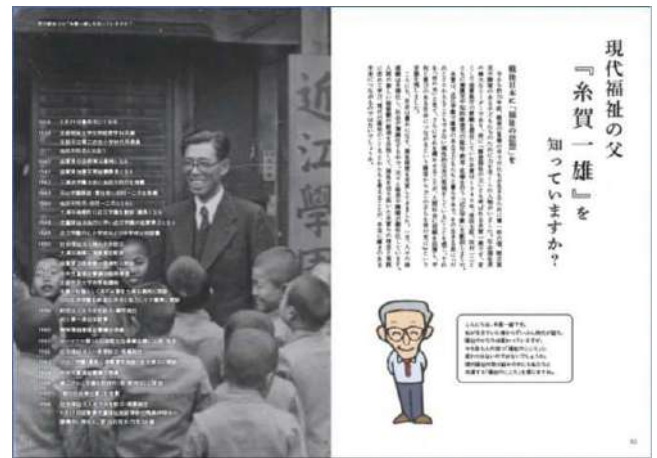
(アンケート回答時：実施予定)

NO	参加地域	実施予定	語りの対象	内容・感想	参加人数	場所	備考
1	埼玉	令和元年12月	職場内の職員	語りあい	参加者10名 スタッフ2名	職場	
2	埼玉	令和元年10月12日	職場内の職員	共生社会について考える	参加者20名 スタッフ3名	法人内	
3	埼玉	令和元年10月9日 12月12日		共生社会を考える～心の声を表現しよう～	参加者30名 スタッフ3名		
4	埼玉	令和元年10月21日	職場内の職員	地域福祉・相談支援連絡会	参加者10名 スタッフ1名	他地域支援 事業所内	
5	埼玉	令和2年1月11日頃	職場内の職員		参加者10名	事業所内	(研修受講の感想) 伝える事、あたりまえに理解していただける事の難しさを痛感いたしました。少し安易に考える事を反省した研修でした。
6	埼玉	令和元年11月16日	自立支援協議会メンバー 幼稚園・保育園・学校・ 放課後等デイサービス 等のスタッフ	「ともに育ちあう を考える研修会」 第一部「みんな学校」映画上映 第二部「わたしの町の みんなの保育園・ 幼稚園・学校」というテーマの実践発表。 地域の方々と共生社会について考える 機会にしたい。	参加者100名 スタッフ20名	〇〇市総合 会館	(アンケート回答用紙は、実施済に編綴)
7	埼玉	令和元年11月23日	地域一般	ギャラリートーク 展覧会名「PATH OF ART -表出から表現へ-	参加者15～ 20名 スタッフ5名	アートミュー ジウム〇〇	以前から決まっていたイベントなので、受講後の取り組みとは言えないかもしれないが、アクションプランの内容と同じである。もっと積極的に地域の方を巻き込める取り組みをしたい。
8	鳥取	令和2年11月頃	社協・福祉施設職員等	福祉語り部実践講座 来年度の予算要求を現在行っているところであり、内示がなされなかった際は、現行のセミナー等で企画に加味することも視野に入れたい。	参加者30名 スタッフ3名	〇〇県中部 地区	(受講後の感想) 障がいの理解を通じた今回のフォーラム参加は、とても有意義だった。業務を進める上で研修の進め方等を含めてとても参考になった。 また、県内に仲間が増えていくことは、とても財産となった。
9	鳥取	令和元年11月27日	職場内の職員	共生社会とは ～わからないことをわかりあう～ (仮題)	参加者5名 スタッフ1名	施設	
10	兵庫	令和2年2月25・26日 3月2・3日	地域一般	差別相談員研修会	参加者150名 スタッフ4～5名	〇〇全県 (5圏域)	(受講後の感想) 今回兵庫での共生社会フォーラムは、大変参考になりました。今後、県内市町村の差別相談員向け研修会に活用したい。
11	岩手	令和2年1月25日	職場内の職員	共生社会フォーラム語り部養成研修	参加者20名	施設	
12	長崎	令和2年4月	保護者	まもってあげ隊	参加者20名 スタッフ5名	施設会議室	
13	長崎	令和2年2月13日	職場内の職員		参加者4名 スタッフ4名	事業所内	
14	長崎	令和2年8月末日	介護の専門学生	福祉の未来を担う人材(学生)と「共生社会」について語らい合う	参加者22名 スタッフ1名	〇〇専門学 校	
15	岡山	令和2年9月5日	利用者の保護者 地域教育・保育の先生	ドラえもんの世界から～同じもいいね、違いもいいね～	参加者10名 スタッフ3名		
16	鹿児島	令和2年11月6日 令和2年12月4日	職場内の職員	「問いかけQ & ディスカッション絆バージョン」	参加者7名	事業所内	職場の全体会議の時間を使い取組みたい。2回の予定をしているが毎日のミーティングでも話していきたい。
17	鹿児島	令和2年10月20日	職場内の職員		参加者15名 スタッフ5名	オンライン	

18	宮城	令和3年3月	職場内の職員 地域一般				
19	新潟	令和3年3月12日	地域一般				
20	千葉	令和3年1月25日	職場内の職員	共生社会について	参加者20名 スタッフ20名	リモート会議	今後、外部の連携会議で共生社会について議論できればと考えている。 (現在はコロナ禍のため実施時期は未定)
21	令和元年度 鳥取	令和3年1月7日	職場内の職員 地域一般 その他	トークセッション 福祉教育実践者×社会教育実践者	参加者50名 スタッフ3名	〇〇セミ ナールーム	(テーマ) ともに生きる これからの福祉教育～福祉の 心で人とつながり、地域に広がる～ (添付資料あり)
22	鹿児島	未定	職場内の職員	職場内の研修会	参加者50名 スタッフ60名	食堂ホール	
23	鹿児島	令和2年10月20日	職場内の職員	オンライン開催	参加者15名 スタッフ5名		
24	鹿児島	令和2年11月6日 令和2年12月4日	職場内の職員	「問いかけQ & ディスカッション絆バージョ ン」	参加者7名	事業所内	2回の予定をしているが、毎日のミーティング でも話していきたい。
25	千葉	令和3年1月25日	職場内の職員	「共生社会について」	参加者20名 スタッフ20名	法人の リモート会議	今後は、外部の連携会議等で「共生社会」 を議題にしたい。
26	宮城	未定	職場内の職員		参加者25名	地域交流 ホール (施設内)	
27	宮城	令和3年3月	地域一般 職場の職員	未定	スタッフ21名	職場内 地域	
28	千葉	令和3年4月14日	セミナー参加一般企業 担当者	「これからの障害者雇用の動向と対策」	参加人数未定 スタッフ3名	ZOOMまた は法人会議 室(税理士 事務所内)	税理士法人の開催するセミナーからの依頼 で、講師として現場の声や現状を中小企 業、人事担当者へ講義する。
29	帯広	令和3年12月7日	職場の職員	共生社会のあり方について	参加者13名 スタッフ3名	事業所内	
30	群馬	未定	職場の職員	未定	参加者4名 スタッフ1名	職場内	受講したことをまとめられていないが、職場 内からひろめていこうと検討中。
31	群馬	令和3年12月29日	職場内の職員	「共生フォーラムを振り返って」	参加者5名	職員室	研修の冒頭から「もやもや」という言葉が繰 り返し使われていたが、その通り「もやもや」 が残る研修だった。決して悪いことではなく 考えさせられる機会となった。
32	熊本	令和4年1月21日	地域一般 市町村行政スタッフ	〇〇会	参加者6名 スタッフ2名	居酒屋	市町村行政スタッフは福祉担当 会費制での〇〇会
33	熊本	令和4年2月頃	地域一般	「広げようやさしいサポート 地域の輪」	参加者30名 スタッフ3名	社会福祉協 議会	
34	滋賀	令和4年2月18日	他事業所との合同研修	「共生社会というものについて考える」	参加者 10～15名	〇〇市	「糸賀先生の語録」「やまゆり園事件の資 料」を事前に読み、NHKスペシャルを手配し たので視聴し、模造紙に「共生社会と考える コト・モノ」を書き出していくグループワーク を行う予定。“答えなし”でいろいろ話すこと を目的とする。
35	滋賀	令和4年4月頃	〇〇市自立支援協議会 の部会	「共生社会というものについて考える」	参加者30名	〇〇市	「糸賀先生の語録」「やまゆり園事件の資 料」を事前に読み、NHKスペシャルを手配し たので視聴し、模造紙に「共生社会と考える コト・モノ」を書き出していくグループワーク を行う予定。“答えなし”でいろいろ話すこと を目的とする。

NO	参加地域	実施予定	語りの対象	内容・感想	参加人数	場所	備考
36	静岡	令和4年11月7日	職場内の職員	「いろんな角度から物事を見てみよう！」	参加者15名 スタッフ2名	施設内のホール	
37	滋賀	令和4年度中	職場内の職員	「共生社会のあり方について」	参加者20名 (2回に分けて)	職場活動室	
38	広島	令和5年3月29日	内定者	内定者研修「地域の一員として」	参加者6名 スタッフ4名	法人内	直近として内定者向けに研修内のいちプログラムとして取り組むが、今後も経験年数や階層別を考慮しながら段階を踏んでつないでいきたい。
39	福島	令和5年7月28日	地域一般 〇〇郡対人援助職	「共に生きる〇〇郡へ ～相模原障害者殺傷事件を振り返る～」	参加者20名 スタッフ8名	〇〇郡〇〇町	
40	佐賀	令和5年3月7日	職場内の職員	「第6回 頭の中」	参加者6名 スタッフ6名	事業所内	職員のミーティング内。参加者の頭の中の考えを列挙。(添付資料あり)

(抜粋) 別添資料1 研修テキスト(ブックレット「ほほえむちから」抜粋版)



(抜粋) 別添資料2 テキスト資料(糸賀語録等)

共生社会等に関する基本理念等普及啓発事業 テキスト資料	
目次	
資料1 糸賀一雄追悼	1～20
資料2 糸賀一雄生涯100周年記念展～市きることになる～(抜粋)	25～80
資料3 札幌市歴史資料館資料に因る市民の声	81～92
資料4 札幌市歴史資料館資料に因る市民の声	93～103
資料5 株式会社西岡社「やまゆり園事件」記者座談会 リポート 糸賀一雄plus(その影響)	104～111
資料6 新型コロナウイルスの3つの館を知らう！～市のスライムを動かすために～	112～113
主催 厚生労働省 実施 公益財団法人糸賀一雄記念財団	

「糸賀語録50選」について
社会福祉法人六心会 奥村 昭

○この50の文章は、『糸賀一雄著作集Ⅰ』、『糸賀一雄著作集Ⅱ』、『糸賀一雄著作集Ⅲ』に掲載されている文章を、前後の文脈が途切れない程度で50のフレーズあるいは文章を抜粋したものである。

○本来ならば、一定の基準を設定したり、「刊行の辞」や「解説」などに記載されている故・岡増美彦先生をはじめとする「刊行会」の先生方の視座を基準化したりして抜粋すべきであるが、このような手続きを省略して編者の「主観」に委ねた抜粋となっている。

【記載内容の凡例】

36 この子らを世の光に 「第一部 この子らとともに」(1961-1968)「II 子どもたちへ・手をつなぐ親たち」34 この子らを世の光に「おはな」 純粋なながい。それはいまこそもう一度あきらかにされねばならないことです。くどいようですが、この子らが不幸なものと世の片隅、山奥の谷間に11の目もみずに放置されてきたことを訴えるばかりではいけない。この子らはどんなに正しい教育を受けても、かけがえのない個性的な目に見えをしているものです。人間と生まれて人間となっていくのです。その自己実現こそが創造であり、生産であるのです。私たちのねがいは、所信を聞きながらこの子たちも立派な生産者であるということを確認させる社会をつくらうということです。この子らに世の光をあててをろうというあわれみの期待を求めているのではなく、この子らが自ら輝く素材そのものであるから、いよいよ光をきをかけて輝かせようということです。「この子らを世の光に」です。『手をつなぐ親たち』第128号、昭和41年1月15日【00-p274】	最終に掲載した著作集の目次
	75歳に拘束した糸賀先生の言葉
	文章が掲載されている通り、冊子、書籍名と発行年。【】内は著作集の巻と記載されているページ番号

(抜粋) 別添資料3 ワークシート (中堅用)

共生社会フォーラム in 佐賀 福祉支援語り部養成研修〈1日目〉
おなまえ

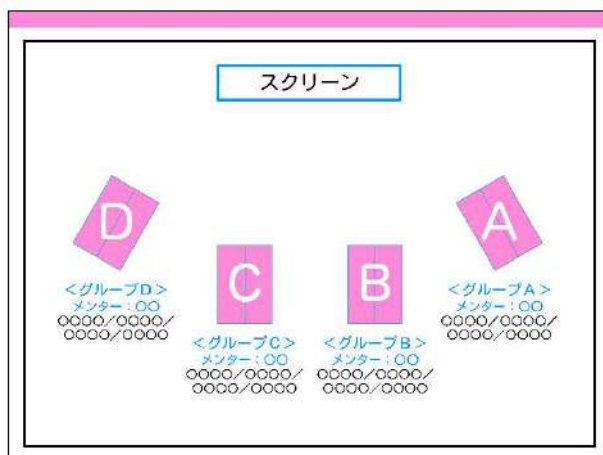
語りかけ練習シート その③ 以下の「問いかけ」に対して「語りかけ」を練習しましょう。 【誰から】自殺念慮のある思春期女性（1人親貧困家庭育ち、薬物療法効果なし） PTSD、性虐待、人格障害、ミュンヒハウゼン、解離性障害、躁鬱... 【どんな状況で】精神状態が落ちている時 自分の命だし、自分で死ぬと決めているのに、周りの人から死んだらダメだと言われる。どうして死んだらダメなんですか？ 【なぜ答えに窮したと思いますか？】 【どのように語りかけるか？】 【メモ】	シート No. 9-3 27
---	----------------------------------

(抜粋) 別添資料4 ワークシート (学生・新任者用)

共生社会フォーラム in 滋賀 学生・新任者研修
おなまえ

【DAY1→2 宿題】語りかけ練習シート 以下の「問いかけ」に対して「語りかけ」を練習しましょう。 【誰から】祖母あるいは祖父 【どんな状況で】知的障害者施設に就職したことを報告したとき 障害者の面倒なんて、家族が見るものでしょ。そんなことに税金を使って、そのお金をもらう仕事なんて、仕事と言えるの？ 【なぜ答えに窮した（困感して、答えることができなくなる。）と思いますか？】 【どのように語りかけるか？】 【メモ】	シート No. 8 17
--	--------------------------------

(抜粋) 別添資料5 グループワークの進め方 (GWシナリオ)



メンターの引き出し 状況、メンバーのリアクションをふまえて、引き出しの言葉を効果的に使って、議論をすすめましょう 【深掘りする】「もう少し詳しくきかせて～」、「例えば？」 【要約・翻訳】「要は、～ですね」、「～ということ？」 【話題を振る】「他には？」、「どんな感じですかね～？」 ※状況や実情を知らずして、自由に意見が出せない受講生がいる場合があります。まずは、この場が、その人の立場から、望ましい改善方法や技術的な解決法を当てるための時間ではない、ということを伝えてあげてください。立場や認識を切り替えて、この正解のない（誰も答えがわからない）問題に対して、<u>個人として、かつ、グループのメンバーと一緒に向き合う時間</u>であり、「あなたは（人として）どう思うのか、どう感じているのか」という部分を中心に、意見や言葉を引き出してください。
--

別添資料 6 新型コロナウイルス感染予防マニュアル&チェックシート

1. 実施する感染予防対策

(1) 参加者規模

各開催地域の集会の人数規制に応じた受講者の募集をする。

☐ ○○フォーラム：収容人数○○○名の会場で、参加定員を一般 60 名研修 24 名の計 84 名とした。

(2) 発熱者等の会場への入場制限

- ・関係者および事務局職員の体温・体調確認を行い、体調不良の者は、研修に参加しない。
- ・受講者の体温・体調確認を行い、体調不良の者は、研修に参加しない。（詳細は、別掲）

☐ 事前に健康観察票を送付し、研修当日、記入された票を、受付にて回収する。

☐ 受付時に検温し、37.1℃以上の者は参加させない。

(3) 3つの密の回避

- ・参加者同士の距離を確保する。（できるだけ 2m（最低 1m）空ける。）
- ・講演、グループワークの際の受講者について、十分な座席の間隔（四方を空けた座席配置等）を確保する。

☐ 講演時、座席は前後 1 列、左右は 2 席以上の間隔を確保するため、座れる席を表示する。

- ・人の密度を下げるために、参加人数は、原則として 50 人までに制限する。（実地地域における「集会」の人数基準に従う。）
- ・行列をつくらないための工夫や列間隔の確保を行う。

☐ 受付の前の床に 2mおきにテープを貼る。

☐ 適切に換気を実施する。（毎時 2 回以上。二方向の窓・出入口を開放する。）

☐ グループワークの席は、真正面としないようにする。

(4) 飛沫感染・接触感染の防止

- ・関係者および事務局職員のマスク着用、手指消毒、咳エチケットおよび手洗いを励行する。
- ・受講生のマスク着用、手指消毒、咳エチケットおよび手洗いの周知・徹底を行う。

☐ マスク着用、手指消毒、咳エチケットおよび手洗いの励行等の掲示をする。

☐ 複数の人が触れる設備や施設内を定期的に消毒する。

- ・共有物品や手が頻繁に触れる箇所は、工夫して最低限にする。

☐ 筆記用具の使いまわしをしないよう、アンケート記入用の鉛筆は各人に交付し、研修用マジックは各自持参とする。

- ・人と人との対面する場所は、極力アクリル板・ビニールカーテン等で遮る。（仕切り等の設置）

☐ グループワーク時は、状況に応じて、受講生の間にビニールシートの仕切りスタンドを置く。

※場所等における感染予防対策

●トイレ

- 不特定多数が接触する場所は、清拭消毒を行う。
- トイレの蓋を閉めて汚物を流すように表示する。
- ペーパータオルを設置するか、個人用にタオルを準備する。
- ハンドドライヤーは止め、共通タオルは禁止する。

●休憩場所

- 対面で食事や会話をしないようにする。
- 常時喚起に努める。
- 共有物品（テーブル・椅子等）は、定期的に消毒する。

●清掃・消毒

- 市販の界面活性剤含有の消毒剤や漂白剤を用いて清掃する。

施設管理者と事前に調整

2. グループワーク研修における感染予防対策

(1) 実施者（全体進行者、助言者、事務局等）の役割

- 健康チェック、マスク着用、手洗い、必要時の手袋・マウスシールドの装着等の感染予防策を徹底する。

(2) 受講者への対応

- 受講できる者は、当日の体温測定で 37℃以下であること、およびリスク者との濃厚接触がないこととし、別添チェックシート表を事前に送付し、研修当日に提出するよう依頼する。
- 受講に際しては、マスクの着用、共用部分を触った場合等のこまめな手洗いを依頼する。
- グループワークの際は、パーテーションを設置し、マスクおよびマウスシールドの使用を依頼する。
（マウスシールドは事務局で準備する）
- 研修の間は、3密とならないよう人との距離を保ち、不必要な大声や会話を避けるよう周知する。
- 研修受講者のワークシートは、事前にPDFで送信し、各自で印刷を依頼する（希望者に対しては、印刷したワークシートを郵送する）。所属の事業所で印刷できない受講者がコンビニ等で印刷した場合には、領収書の提出があれば、印刷代を事務局が支払う。
- 一般参加者に当日配布する資料等は、手渡しとせず、受付で各自が取る。
- 名札およびマウスシールドは、自己管理とし、終了後に回収しない。
- グループワーク時のマジックは、各自持参とし、各テーブルに除菌シート（アルコールタイプ）を設置する。

(3) 基調講演・表現活動における対策（一般参加者との共通プログラム）

①（対策強化時）事前に収録した講演を視聴する。

（対策緩和時）会場で講師が講演する。

②（対策強化時）集団での表現活動は、事前の収録とし、研修当日は、ビデオを視聴する。

（対策緩和時）十分な広さがある会場を確保し、観客席との距離を十分確保し、密にならない状態で発表する。

(4) 会場の環境対策

- 受付より手前に手指消毒剤を設置する。
- 受付にビニールパーティションを設置する・
- 受付での密、物品の共有を避ける対策を講じる。
 - ・列を作る場合は、会話をせず2mの間隔を保つ案内を提示する。
- 研修会場の消毒は、開催前後にアルコール消毒液、ドアノブ、マイク・パソコン、机・椅子等を拭く。

※講師が使用するマイク・パソコン・演台等は、講師の交代毎に消毒する。

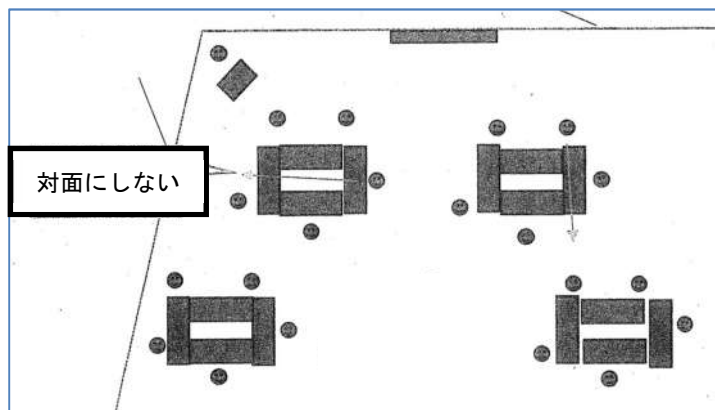
- 研修会場のドアは、基本的に開放とする。
- 窓は、二方向を開放し、空気の流れを作れるようにする。
- 休み時間、昼休憩の密を避ける工夫をする。
- 休憩スペースを分散して使用できるように案内する。

(5) グループワークの対策

- 隣り合うグループとの距離を保つため、十分な広さがある会場を確保する。
- 各グループの座席を対面にならないようにする（レイアウト参考例を参照）。
 - ・ワークシートは、研修会場でスキャニングするか、受講者が持ち帰り後日事務局にデータを送信する。従来の方法と異なり、人の手を介する回数が減るため、感染予防対策になるとともに、各自の成果物を一旦預からないため、研修後の実践の迅速化につながる。

□ ワークシートは、回収することとするが、手袋を着用して取り扱う。

○グループワークのレイアウト参考例



☆必要な場面以外は、対面とならない机と椅子の配置とする。（参考：右の写真）

○リモート研修について

厚生労働省障害福祉課から令和2年5月18日付け事務連絡「新型コロナウイルス感染症に係る障害福祉サービス等事業所の人員基準等の臨時的な取り扱いについて（第6報）」で、「居宅介護職員初任者研修等について」のQ&Aが発出されており、「新型コロナウイルス感染症の感染リスクを低減する観点から、受講者が一堂に会した講義に代えて、通信の方法による講義を行うことは可能か」との質問に対して、厚生労働省から次のとおり回答されている。

新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、通信の方法による講義の実施について検討していたきたい。なお、演習の実施にあたっては、グループでの受講者の能動的参加型学習（アクティブラーニング）の方法により、対面で実施することが望ましいが、以下のすべての要件を満たす場合は、遠隔化しても差し支えない。

- ①カリキュラム及び内容が遠隔以外の方法に依るものと同等であること。

- ②演習では、グループ（受講者同士）によるリアルタイムでの討議を行うこと等受講者全員による参加型の学習が可能な方法を採用すること。
- ③演習では、講師による受講者へのリアルタイムのフィードバックを行うこと。
- ④演習を実施するグループを構成する受講者数は、必要最低限度の人数を単位とすること。
- ⑤担当する講師又は事務局等が、受講者の演習への積極的参加を促し、その点について評価を行うこと（遠隔教育の場に接続されていることのみをもって受講を認定することなく、演習に参加していたかどうかに基づく終了評価を行うこと。）

これに基づき、全国的に感染拡大が強く警戒されるレベルとなった場合におけるリモート研修の実施方法について、別途検討する。